



增補
改正
俳諧歲時記彙草
三

^ 5
4307
3



陽 5
號 4307
卷 3

增補俳諧時記纂草 芦

豐亭主人纂輔
藍亭青藍增補

秋

漢書律曆志少陰者西方西遷也
雩遷落物於時為秋秋穀也物擊歛

乃成

少皞 帝禮月令其帝少皞注云少皞白精之君金天氏也

蓐收

神月令其神蓐收注云蓐收金官之臣少皞氏之子該也

白藏

爾雅秋為白藏一曰收成注云氣白而收藏萬物故曰白藏

金商

秋五行屬金五音屬商故有金風素商之稱唐高宗九日詩云端居

臨王辰初

明景 元帝纂要秋景曰朗景朗明義同

籟

謂秋声也增韻爽清快也夷則夷傷則法也言金氣始肅萬物于此凋傷猶被刑戮之法

秋



七月 立秋

節月令廣義孝經緯云大暑十
五日斗指坤為立秋七月節

新秋

韓文是時新秋七月
初金神按節炎氣除
孟秋 廣韻孟勉
也始也又

初秋

中院通茂公脚說和歌了是
初秋ハ七月十四日までとい

處暑

中月令廣義立秋十五日斗指申
為處暑瀆暑將退伏而潛處也

處上声止也暑氣止
息也 是七月中也

文月

清浦奥儀抄此月
ふつき七日ふまそとふりそ

として文どもをひらく故ふ文ひらげ月といふと畧せり
藏玉 七夕のあふよの空のうげとえて書ふらへる

機柵月

藏玉 鶉のよ

女郎花月

ちぎりのつらふ

涼月

月令 孟秋 益秋 經
月涼風至 益秋 曰

もどととる一ヶ月 顕昭

每年七月十五日為父母
設盂蘭盆供十方自恣僧
相月 爾雅七月為
相疏云七月

桐秋

淮南子一葉落而天下知秋
甲書 梧桐立秋之日一葉先落

蘭月 蘭秋 肇秋

肇秋 蘭秋 月令廣義畏

親月

和爾雅此月諸人詣
親墳墓故曰親月 錢月 錢

景曰送行燕說文送去也
と訓き暑の去を送る意あり

八月 葉月

此月肅殺の氣を生じ百卉葉と落と故
小葉落月といふ今畧して葉月といふ

南呂

律礼記律中南呂高誘註云南任也
言陽氣内藏陰倍于陽任其成功

白露

節月令廣義孝經緯云處暑後十五日
斗指庚為白露言陰氣漸重露凝而

秋分

同上白露後十五日斗指酉為秋分
陰生於午極於亥故酉其中分也仲

秋

月之節為秋分秋為陰中陰月令八月
陽適中故晝夜長短亦均焉仲秋為仲秋

壯月纂要八月為中桂月同上八月亦曰
商又曰壯月桂月○桂の花の

ひらく月中律芋環不出せり難月芋環不出せ
處處未考唐類函

八月乃難以達秋氣藏玉秋の
あふやらひちちと難月の誤り也秋風月葉の露宛

みごと音ふるや身ふちを月見月藏玉名ふし
ををしあき風の月定家雁來月月令仲秋之

の空をきて、むのつとあ雁來月月令仲秋之
ある月とさうらふ長明雁來月月令仲秋之

九月無射律九月律中無射高誘註
萬物隨陽而藏節月令廣義孝經緯云

無有射出見寒露節霜降日斗指戌為霜降言
辛為寒露言露冷霜降中同上寒露後十五

寒而將欲疑結也霜降日斗指戌為霜降言

氣肅露凝結季秋月令季秋紅樹通俗志
而為霜矣之月云紅樹小出せり

疑らくハ紅樹月の誤あら藏王あけと山ゆあくらく

うさつとせや紅葉の月の色とさつん後鳥羽院御製○
朱熹詩云秋山有紅樹忽憶田野中○韓退之

詩云春風紅樹鶯眠處似如歌章作艶声と
さつとさつハ紅樹とむりハ玄月范蠡曰王姑待之

九月の異名長月夜長月と素秋素秋ハ九月小限ら
月也義ハ素秋秋の總名あり素ハ白

あり四時と五色小配もふ秋ハ菊月又菊秋ハハ
白小中るゆもふ素秋の名なり月令季秋月

菊有黃花晚秋對早秋梢の秋季吟云紅
故曰菊月日晚秋葉もる故ハ

木深月紅葉月證歌紅樹寐覺月藏玉
ともいふの下小出つなびうた

ふ枕のねさめ月秋少小田菊月藏玉さひさ
とぬ長き夜もつら家隆ハ鳴さけいさこの

秋

露まげく袖うち拂ふ
小田のりの月 頭胎 色とる月 梢の秋といふふかふし

い 七月

糸織姫

棚機七姫の内、異名分類
旧事紀小、令天、棚機姫神

織神衣云云是
犬飼星

志の部二星
石枕

仙覚抄
の糸小出

ハ真の石小あらむ玉ななよ
むこのけふ夜の玉の枕と見え

芋の葉に露

藻塩 草露

取草とハ棚機の歌と書付
る小羊の葉の露と書云

曬衣裳

星のうし物
うし小袖

四民月令

七月七日麩を作し藍丸及び蜀漆丸と合

し經書及び衣裳と曝し俗お習ふと然り世説郝隆
七月七日鄰人ともども皆衣物と曝し隆仰と因して

腹と出す人其故と云ふ曰腹中の書と曝の○星のう
し物衣裳と曝ま物とくすも七夕小巧と云ふん為

く賈之家集世とく我を糸ハ七夕の涙の玉の緒と
やふるらん秋きても露や袖のせらるる色いたまふつめ何
とくままし舟内侍荒野集七夕よ物うもともあはれむし

越 池の坊に立花

洛の六角堂頂法寺雲林院三
條の南あり三十三所順礼の

一箇所也近世僧專光數品の花枝と二瓶のうちふと山
水の景象と摸とるを得り、和俗とて立花と云ふ今

小至て代々とて玩ぶ僧俗此徒弟ともあはれ多し例
年七月七日立花數瓶砂の物等とあり人争ひてこれと云

るも池の坊の立花と云ふ是
り又二星小供まの意あり、

伊勢踊

滑替雜談
いせとらふ

とらふより侍るる
○せふの松坂音頭あり、

生身魂

蓮の飯 關窓
こし籍 倭筆

本朝の世俗七月ふあまは生る二親と供養して生身魂と名
づゝとも孟蘭盆の修行あり盆經願くハ現在の父母

として壽命百年病と一切苦惱の患ありむ是七月十
五日僧自恣の日現在の父母の壽命長久と祈る發願の文

あり是生身魂の修行あり、和漢三才圖會刺緒中元の日は
祝用とて但し背より骨小傍て割開きこごとと艱うて

二枚と一重とありこごとと刺と云ふ○同書云蓮の飯考
妣の靈前小供し又以て親戚小贈ると礼式と云ふこと稱

して生靈祭とり、荷の葉と以て蒸せ、搗飯と包み、**稻**
観音草と用てこまこと縛る佛名と以て好とするの、
妻 稻つるこ 和漢三才圖會 秋の夜暗て電のハ常
ゆかり 俗傳ていふ此時稻實る故小稻妻稻交の

名あり御傘 稻光ハ雜あり、**稻の殿** 稻妻小對して
説文電ハ陰陽の激曜するこ、
へし續猿蓑獨りて留守 **稻葉の雲** 詩ニ云多
ゆかりこく稻の殿一束、
秋風ハ田面小冬とこさふふといふもの雲の露どーぐ
う中院通茂公○稻葉のゆかりのゆる景色とあり

稻 夫木 ゆふぐまハこまやうし小我家の、
門田の稻の花の浪ゆる 後久我内大臣 **糸秋** 天

の花 本草 糸萩、
花紅ハ盛久、
蔓生と嫩きと花莢とり小煮食ふ京都て隠元豆と云
筑紫て南京豆といふ○此種黄葉隱元禪師來朝しく
諸種と持來さる其一種ハ、
故く隱元豆と名づく、

稻脊虫 和漢三才圖會 糞
蟲 春香 和名以

祢豆岐古萬呂俗云祢宜按まろふ糞蟲 蟲斯小似て小く
長さ一寸むり青色尖アと首兩眼の間廣し但し冬蟲斯
ハ兩眼の間狭しとて以て異なりとするの杜人立鳥帽子
と者る狀小似と人故小俗呼て祢宜といふ小兒兩足と捕入
ま身と伸して首と俯き仰ぐ稻と脊形小似と故 **鳥虫**
小和名稻脊とり古萬呂とハ蟲の類の和訓の總名

久蝨 本草 蟲 蝨ハ總名あり數種あり草の上小在と草
蝨とつる小至て土穴の中小入夷人炙てこまこと食ふ
辛く毒あり其類土中小乳じ深く其卵と埋じ夏小至て
始て出づ○按まろふ小蝨方ある首形沙雞小似て小く
青白の色田の稻小生る夜ハ株小あり朝ハ梢小上り稻の
露と飲ひ故小稻子と名づくこまこと取て炙て食ふ味甘
く美あり小蝦の如し形同くして灰色 **本草綱目**
田野小在て地小跳る者即土蝨也 **蝗** 蟲 蝨集解
三云蝗亦蝨類して方首小王字の冷氣小生る所
天と蔽ひて飛ぶ性金の声と畏る一とハ八十一の子と生
む冬大雪あるときハ土小入て死む **和名抄** 蝗 和名於保天
和本草 管子小凶年の五害水旱風厲蟲といくハ

秋 い

國最上川水もくく舟と引のちも舟のうしろめを
るが人の物といふと云てうづらふふ似れり又二説
稻とつゝる舟とつゝ讀方物といはれり心と
稻舟ふよせくよむふつと藻塩草と云る
稻莖

夜分も居所もいづらば○又新葉あて織る莖とも又
か多稲とて木の枝あへ均いねとけりたるもの稲莖
とよめり万葉玉の道行つと稲莖と云きこの人
るよもがぬ人九新古今秋の田のうりねの木の稲む
しう月やまことのまけ露うね定雅○大く是れ心

得べ 鱒引 裂鱒 和漢三才圖會 鱒 俗字 鮠 和名伊和
和之訓及相通 中畧 群行して至る時海波稍赤し渙
人豫知て網と下しとと米る鯨好て鱒と喰ふ為小逐
る者数万群とあつて浪棹のどしとと取て鱒小作
る炙として食ふ又脂と取て燈油とす○鱒引とハ網
と引の義裂鱒といはれ魚刀と用ふるよ及ぶ指と以て
ことと解故ふりハ本朝食鑑一名赤紫或ハ紫といふ本朝

宮闈の兒女鱒の賤名と忌て御紫といふ
鱒の塩糟其内色紫黒故小名つるく
あんとする時一片の白雲ありその
雲段々として波の如し是と鱒雲と云
この部月見 十六夜月 既望 古今 君やらん我やゆ
の糸と云し 人のいよ小慎の椀
もさへぬふたり○いよふといふちやとら意十六日の
月暮てのちまがらいつつる故○やちくと出てい
よふ月の雲芭蕉○此句意ハやちくと月ハ出まとも雲
のさへいよふていよとつる曲節あり 蔡氏集傳 日月
相望じことと望とい 羊肚菜 和漢三才圖會 羊肚菜 今
ハ既望望じ十六日 云免口草八月の中湿地ハ
多く生む其織の表褐色端曲り捲裏ハ黄白色細刻
ちりちりありらうやして孔あり蜂の巢のごとく毒あり

石菖 同上 狀木耳のど 織柄あく黒色裏天 稻
白色峯の頭巖の上あり其得く 稻
小屋 同上 守舎禾と看るあり○ 稻木 稻掛
田間ふ建て猪鹿と追ふ処

秋
い

稻干

多識篇 喬杆伊奈 ○稻木、俗稻掛と云ふ、木

取て上小篋と用てると縛り、田和漢三才圖 稲束和漢三才圖

中ふ於て禾と上ふりけて乾す、
て束ぬて一把二把とす是あり、又稲塚あり、
と束ぬて後積て堆くと恰も塚の如し、是と稲塚と云、
稲

負鳥

古今我門ふいふむせ鳥の鳴あつふけと云、
風ふ鷹ふきむらり、
真洲翁云、稲負鳥、いづくも

り、此哥とよくも心得と云、
あて、皆いつふ足らぬ庭と云、
実秋の半もきて來鳴カの多、
鳥のさうと、人の意路ふまらざらま、
庭と云、つとむせ鳥と云、
畠會 鶴鶴雀のさひ飛とき、
のど、脚長く尾腹の下白、
故ふ杜陽の人、
とと連銭とり、

色鳥
御傘、
とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

とりの、
雪王、

秋

りみ至るとき木引のときあり三年うて木引成て又三
年木引のときあり材木ハ木曾山並紀州大杉山より出ッ
内宮御鎮座ハ垂仁天皇二十五年三月外宮ハ内宮
鎮座の後四百八十四年と經て雄略帝の時垂跡

た風 九月の風あり新古今ものおもひつらき風も
ありろ身むむ秋のころありふ久我内大臣

隱君子 菊の異名あり范至能菊譜序山林好
事者或以菊比君子其說以謂歲華婉婉

草木變衰乃獨燁然秀發傲視風霜此幽人逸士之
襟雖寂寥荒寒而味道之映不改其樂也愛蓮說

菊花隱 菊の異名あり 菘菹草 長月の
逸者也 いあて草 九日まきいあて草花ハ八重ぞ

五代ぞ 毬栗 其實苞中に在て未地小墜
魚化 和漢三才圖會其實材小似て木窄く俗唐材

果 とりん一月やそ熟も故一熟と名づくらの樹批
把小似よりとりんと然らば葉葉とて葉比麻小似て
小く皆色淡く潤ふ文理陰明より五痔と治まるとと

識て魚毒と治 櫛小似て花ハ栗の如く實
ハ推より少く大木硬くして多
く船の櫂小作ふ 色見草 藏王 秋もをまきつとく
實を以て秋とと

色不變松 荀卿曰隆冬と經て凋まば
雪霜と蒙て變せざ其
貞と得とりつべ 新拾 けりくぬもをの山の
松の松君とて千世の友とと人入道前内大臣
岩蓮

花 大和本草 岩蓮花倭俗の名之其草の形葉のあり
恰も蓮花の開るり知し異名之或ハ云佛甲草是なり

と非 鱒の黒漬 豫州の産あり宇和鱒と称まるとの
製両鰓と切削て鱒とを鱒の性
腸の中ハ黒汁あり塩水小和して

其魚黒くこまを黒漬とらふ
道叅 九日迎鐘 山城国名勝志 六道ハ五條の末北
棋賣 建仁寺巽の角あり今之建仁

寺大昌院管領も葉師堂あり是珍篁寺の本尊
雍州府志 珍篁寺ハ弘法大師の開基ありて元葬場

る 七月六

秋 いろは

秋 いろは

秋 いろは

秋 いろは

秋 いろは

小堂は地藏と安置せしむ六道と称す傳りし所の所具途
 小通も故小野篁この所より親ら六道不行て帰きりし
 是よりて毎年七月盂蘭盆前九日小男女赤詣〔紀事〕
 今日諸人六道地藏詣て男女鐘と撞て聖天と迎ふ
 とり各槓の枝と買て携帰ふ又新穀と買て聖盃小
 供も是と私と称ス○六道赤詣まうて槓の枝と買ひて家
 ふり、聖前小あけ、俗聖天槓の乗小乗を来るとりふ
 是聖天と迎ふる意あらべ〔古事談〕珍堂寺の別當某
 云當寺の鐘ハ慶俊僧都と鐘る慶俊入唐の時留主
 まる僧ふりら、此鐘土中ふ埋三年と經て掘撞下と衆
 僧三年と待ふ堪も、繞ふ一年と過してこそ掘撞下掛く
 撞ふ其声唐不聞ゆ慶俊曰我寺の鐘唐寺とも、予念むら
 三年と待て是と掘撞上よりくの時ハ撞ぐて六時よ声向
 るべと歎惜も、○わりの所謂よ、聖天とむらむらめ
 撞ふん是と迎鐘とりふ、○六道ハ桓武天皇延暦十三年長
 岡より今の京ふ遷らせむらむらき、諸人の葬場と定めふ
 よ、〔遷都記〕ふとえり、本尊藥師架
 傳教大師の作、七佛藥師のそのとらふ

は 七月

初涼

王劉錄詩云、昊天清、七月朔日
 且、高秋風發、初涼、墓赤、十五日ふ至り

て、各祖考の墳墓ふ詣るく、唐山の人清明の日上墳
 祭掃ふ同、○源順家集ふ、七月十五日わんりてせ山寺
 ままつる所、く、の、とれる蓮の葉とらる、露あく山
 小我、はき、は、是、盆の墓赤と、〔和漢文撰〕前文、一家と
 小杖ふ、髪、の、墓、ま、わ、り、あ、わ、る、こ、う、の、か、こ、も、あ、ら、ふ、あ、蕉
 評云、故翁伊賀の西麓庵あて、例の文稿とあらむ、むらこ
 今思ふ、白髪、の、竟、祭、ハ、其、日、の、感、情、ハ、演、ま、ま、と、登、白、ハ、祭
 る姿にあらむ、此故ふ赤の字と以て歩行の様と形容せ
 一、當季の詞も、造、あ、も、増、て、切、字、の、入、所、も、あ、し、此、等
 や有様、賸と云て、〔和漢文撰〕あ、ら、ふ、と、下、の、句
 と云ひ、次で、俳諧の、蓮、の、飯、いの部生身魂、花、燈、
 歌も、あ、ら、ふ、き、な、ま、蓮、の、飯、の、糸、よ、註、と、花、燈、
 籠、造、花、と、も、て、美、く、鏝、初、鳥、狩、初、鷹、
 貞徳曰、名出の鷹とば、あ、て、つ、ふ、と、初、鷹、と、も、初、鳥、狩
 と、い、つ、あ、り、鳥、屋、出、の、鷹、と、も、夏、の、羽、の、ぬ、け、と、も、鳥

屋よこめて羽の出さういふと盆の聖天の箸ごとめて
夜鳥屋より出さふより箸鷹とも申とつり○小鷹狩
の糸とも見 **鳩吹** 鳩ごととて手と合せて鳩の声の
合さるべし **八雲御抄**

歌林良材 **藻塩草** **袖中抄** **水説** 同し **花火** **和漢三**
才苗会

炭俵集 名月や誰か吹おこさぬ鳴酒堂 **花火** **和漢三**
才苗会

燈燧ふ代ふきめは又夏月河 **秋** **和漢三才苗会** 天
辺の遊真とて **御傘** **正花** 持し **花** **和漢三才苗会** 天

が如し按さる小枝葉長く垂地と蔽ふ状糸櫻ふ似て
一極三葉束の葉ふ似て又南天燭の袂ふ似て尖らば柔

軟之秋小花と着淡紫色俗専ら秋の字と用ふ奥州宮
城野方三里より萩生茂より山萩あり白花の者あり白

紫開分の者あり○或書ふ宮城野の萩ハ草ふあり又本萩
く弓ふと作る木あり稍ふ青き枝生てその枝小花さくより

○とやあくの萩鹿鳴草古枝草糸萩 **秋の錦** **錦**
小萩ささ萩ホ其頭字の部ふわらて註し **秋殿**

とてくひふあり **新後拾** けくまこおもててはる
秋とてこの花のゆきこの露のたてぬき **法皇御製** **秋殿**

秋の戸 **禁秘抄** 萩の戸ハ常の御所 **天要抄** 萩ハ限
りどと色と秋の花さくこと裁らる清涼殿の西
の方貳間の前 **五社百** **蓮の實** **菰** 頌曰其蒨秋
首註 菊戸萩戸同し **蓮の實** **菰** 頌曰其蒨秋
水ふ沈む石蓮子とも ○山谷詩 倒靱收蓮菰云 **初**
とも蓮の子の房中より抜出る穴と靱と見立し **初**
嵐 **和漢三才苗会** 山の氣と嵐といふ醫書ハ山嵐不正の
氣といふ是あり今初秋以後朝夕山より吹風と俗ニ
嵐と名づく **連哥新式秘抄** **初嵐** **和漢三才苗会**
七月末より八月中よりまての風あり **絡線虫** **和漢三才苗会**
鳴初て七月中ごろまで野最の中昼盛ふ鳴く其声
ギイ、スとりふ如し一二声の内ふ、チヨンと舌打を俗是
を蛩と云て小籠ふ入て市ふ賣て小兒の翫とてその形
自蝨蝨ふ似て大あり是ともおと、ギイ、とりふハ機杼の音
チヨンと箴打音あり又ギスとゆりり **續猿蓑** **軒虫**
夏の附合ふ砂と這ふ藪の中の絡線のまを沾園 **軒虫**
冬蝨 蝨蝨の属長サ三四寸身まふとて瘦て方ある首
両額ハ眼あり目の上ニツの鬚あり翅灰赤色黒

秋は

點あり、腹の下白く善跳て捕へが、
〇今の俗ととむことあり、
檀和漢三才圖會黃檀以て黄色と深

天子の御袍黄檀深と称ま是あり、帛と深て上り
磁水と用ふ畧深ま、黒茶色とあり、其葉小く浅青色
莖微赤し、三月小白花と開き、細子と結ふ、秋ふ至て紅葉
ま、可くゆせ、漆の類あり、葉柳の如くありて滑、元山

木、今世子と採て専ら蠟燭ふ作ふ、
依て多く平原の地ふ植て利とと

兼三秋物仕

日亥中月廿日の亥の正刻 旗芒袖中抄花芒欵と

ふと同一ひききあり、或ハ万葉裏書ふも、薄と、穂
の出て旗とさげさるやうふる薄とゆ、能因申し

けると、花野千草の花の野、咲きとむるをさりとる
ぞ云、野の花とりよとさ、花体とありて野ハ

用たり、花野とりよとさ、野、芭蕉大和本草本草に
体とありて花用たり心得し、濕草小載と軟ふ

る地ふ植て茂易し、春葉と生じ、秋ふ至て止む、冬根
莖枯も、年々發生も、冬と歷て大より、黄花と開く、極めて

稀、東鑑ふ、其花と優曇、雁来紅をいふあり、
華とゆ、葉雞頭雁来紅をいふあり、如の部見ら

苗和漢三才圖會生薑音姜、今俗多く姜字と用ふ、刺
我の音とと、未其標とと、倭名抄生薑久礼乃

美蜀椒奈留波以多知波 吳茱萸如波波此等と
之如美蔓椒之如美 以て考ふる、小徃昔波之如美とゆり、ハ、辛果の總名と

蓮芋其葉荷葉ふ似て、田く、其根栗の形の如し、味
美あり、或ハ呼て栗芋とゆ、按むる、水中小種ふ

り、と蓮芋といひ、圃園ふ、部の案山子鹿
種るもの、と栗芋といひ、の条ふ出づ、班龍鹿

異名、和漢三才圖會、彈塗魚、俗波世川の末海
あり、魷鈎近き處ふ多くこゑあり、常ふ水底と潜

行小蝦と以て餌とと、綸の端鈎と去ると二三寸許の處
小鈎の鐘と着鈎と地ふ附し、微動の響と俟て竿と揚

秋月貴賤以て遊魚の一ツとと、形色細小似て小く、細鱗
體畧滑やして口濶く、腮大、眼上、不向く、斑點微黒と帯ふ、

尾も又小班あり、虎彈魚、
納彈魚、飛彈魚、ホの類多し、
八月八朔田の實の節

秋は

特怙の節 紀事 凡毎月朔ハ吉日ナリテ相賀スル中
 田面の節 華と同一今日殊ハ八朔と称シ又特怙の節と
 称モ又憑の節供トシハ或ハ田實の節と称モ又田面
 の節と号モ中世農民稻の初穂ト 禁裏ハ献モ故
 小田の實の節トシ世ハ又其訓ト借用テ憑の節供
 と称モ蓋君臣朋友相依テ頼の義小取君臣朋友の
 間互ニ贈答の義あり今日貴賤各白帷子ト著シ互ニ慶
 と修モ公事根源ハ朔の凡俗後嵯峨院潛龍の時外戚
 源の通方卿の亭小存ハ近習の男女密ニ斯義トシ
 して閑素と慰め奉ル後皇位小即ハ爾来嘉事トシ
 初月夜 或説ハ四日五日六日迄トシテハハ害
 初月と賞スルハ三五の月と待テヨリトシハハ
 十五日の潮トシハ一説ハ初潮の初の字ハ粟月の潮トシハ
 五雜俎 海潮八月獨大アルハ何ぞハ潮八月ヲ
 應モるりの故ハ月望トシハ潮盛アルハ八月の望尤盛
 御傘 伍子胥ウ死靈八月十五日夜ハ風波トハトシテハ

箱崎祭

祭る神三座中ハ應仁天皇東ハ神功皇后西ハ武内宿禰
 也ハ仲哀天皇三韓ト討んと欲シトシハ神功皇后トク
 ヲハ筑紫樞日の宮小至テ給ハ軍旅ト催トの時天
 皇崩御アリこの時皇后懷妊四月ト云々ト乃自ら
 男子の貌トアリハ弓鴛斧鉞ト云々ト云々ト日請征伐の
 後降誕シハ三韓トシハ平定シ筑紫歸リト云々ト

男子降誕ハハ應神天皇是アリその地と呼テ宇弥
 邑トシハ胎衣ト宮小籠メテ地小埋メ松ト裁テ標トシ
 也その地と呼テ箱崎トシハ醍醐天皇延喜廿一年六月
 廿日託宣ハヨリトシ宮ト宮寄の松原小建ラハ例祭ハ
 月十五日ハ○古老傳ヘテハ昔この松原小戒定慧三
 字の窟と埋ヒ故ハ箱崎ト号シハ松トその所小値
 標トシハその松猶在トシハ縁起 昔白幡四流赤幡四流
 虚空より降其所ハ松ト裁テ標トシハ故ハ八幡の号ハ
 也云々諸説 花白 貞享式 御傘ハ正花アリ春
 送ハ異アリ 秋 細ハ穿鑿トシハ種々の理

秋 は

彫^{ひょう}あまごの分^{ぶん}を置^お方^{かた}かよとありと如何^{いか}ある秘^ひ事^{こと}あやまご今^{いま}按^おざる小花^{せうか}檀^{たん}も花^{はな}畑^{はたけ}も決^きして秋^{あき}小^{せう}定^{てい}むべきもの○花^{はな}畠^{はたけ} 初^{はつ}花^{はな}初^{はつ}櫻^{おう}といふ小^{せう}同^{どう}ハ草^{くさ}花^{はな}もあまごあり、
新拾遺の山

木^き々の梢^{さか}乃^のちろむもづけこの **薄^{うす}荷^{かり}** 和漢三才圖會
あまごのまのそぢゆる 宗良親王 薄^{うす}荷^{かり}菘^{しゆ}蘭^{らん}

蕃^{ばん}荷^{かり}菜^{さい}ホの諸^{しよ}名^なあり、本^{ほん}綱^{かう}曰^い二月^{にがつ}宿^{しゆく}根^{こん}より苗^{えい}と生^なじ、
清^{せい}明^{めい}の前^のとと分^わつ方^{かた}ある莖^{くき}赤^{せき}き色^{いろ}其^{その}葉^は對^{たい}生^{せい}、初^{はつ}時^{とき}形^{かたち}長^{なが}しと頭^{あたま}圓^{まる}し長^{なが}むる小^{せう}及^{およ}て尖^{とが}る其^{その}莖^{くき}葉^は荏^{じん}う
似^にて尖^{とが}る長^{なが}し冬^{ふゆ}と經^へて根^{こん}枯^かむ、按^おざる小^{せう}多^{おほ}く山^{やま}城^{じやう}あり出^で

花^{はな}紫^{むらさき} 花^{はな}景^{けい}大^{だい}和^わ地^ち方^{かた}多^{おほ}く藝^ぎ春^{はる}種^{しゆ}と下^{した}す、長^{なが}じて
苗^{えい}の高^{たか}と一^{ひと}尺^{せき}以^も米^{こめ}葉^はハ謝^{しや}落^{らく}金^{かね}の葉^は小^{せう}類^{るい}し

て小^{せう}あり、又^{また}俗^{よこ}ふよふ琉^{りゅう}璃^り草^{そう}小^{せう}似^にたり、差^さ互^{たが}して生^なじ三月^{さんがつ}
花^{はな}と開^{ひら}く梢^{さか}の葉^はの間^まあり、形^{かたち}狀^{じやう}圓^{まる}く瓣^{はな}五^ご出^でやして内^{うち}
小^{せう}莖^{くき}懸^かる、又^{また}瑠^{りゅう}璃^り草^{そう}の花^{はな}小^{せう}異^いあることあり、く、く、この
色^{いろ}白^{しろ}し、又^{また}粉^{こな}紅^{べに}及び黄^{わう}色^{いろ}のむれあり、下^{した}小^{せう}長^{なが}甘^{かん}号^{ごう}ありて
ことごとく、実^みと結^{むす}ぶその形^{かたち}圓^{まる}く尖^{とが}まり、稔^{ひえ}小^{せう}類^{るい}して
大^{だい}あり、秋^{あき}小^{せう}至^{いた}て熟^{じやく}と、黄^{わう}白^{はく}色^{いろ}あり○按^おざる小^{せう}御^ご傘^{さん}

ホの俳^{はい}書^{しよ}小花^{せうか}紫^{むらさき}と秋^{あき}、若^{わか}紫^{むらさき}と春^{はる}とを然^{しか}る、本^{ほん}草^{そう}花^{はな}
景^{けい}ホの説^{せつ}三月^{さんがつ}花^{はな}と開^{ひら}くといふ、紫^{むらさき}草^{そう}と種^{しゆ}て試^しみるあり
て曰^い、此^こ草^{そう}秋^{あき}種^{しゆ}るもの、春^{はる}花^{はな}と開^{ひら}き、春^{はる}種^{しゆ}るもの、秋^{あき}花^{はな}と
くといふ、御^ご傘^{さん}小花^{せうか}秋^{あき}ありといふも、亦^{また}處^{ところ}ある小^{せう}あり、
○絹^{きぬ}帛^{はく}と紫^{むらさき}小^{せう}花^{はな}芒^{ぼう}の部^ぶ穂^ほ芒^{ぼう}
深^{ふか}る者^{もの}此^こ草^{そう}あり、花^{はな}芒^{ぼう}の条^{じょう}小^{せう}出^で、**濱^{はま}木^き綿^{わた}の花^{はな}**
天^{てん}和^わ本^{ほん}草^{そう} 和^わ品^{ひん}濱^{はま}木^き綿^{わた}万^ま年^{ねん}青^{せい}小^{せう}似^にたり、俗^{よこ}濱^{はま}あり、わといふ
海^{うみ}辺^べ小^{せう}生^{せい}じ、七^{しち}八^{はち}月^{げつ}白^{はく}花^{はな}とひら、莖^{くき}高^{たか}く延^{のび}て、小^{せう}梢^{さか}小^{せう}
數^{かず}花^{はな}あり、ひら、ひら、卷^{まき}丹^{たん}の花^{はな}の形^{かたち}小^{せう}似^にたり、好^{この}花^{はな}う
あり、秋^{あき}実^みと結^{むす}ぶ花^{はな}咲^さき跡^{あと}小^{せう}數^{かず}顆^かるもの、二^{ふた}顆^かの
大^{だい}と胡^こ桃^{たう}の如^{ごと}く、内^{うち}小^{せう}核^{かく}多く白^{しろ}肉^{にく}あり、中^{ちゆう} 篤^{あつ}信^{しん}曰^い今^{いま}按^おず
西^{せい}土^どふもあり、濱^{はま}芭^ぱ蕉^{じやう}といふ、紀^き州^{しゅう}熊^{くま}野^の小^{せう}多^{おほ}し、甚^{じん}と雪^{ゆき}寒^{かん}
と畏^{おそ}る、宅^{たく}中^{ちゆう}小^{せう}植^ちて、冬^{ふゆ}月^{げつ}葉^はと厚^{あつ}く包^かく、或^{ある}はこもを以^も
てわらふべし、あつせきと枯^かる、盆^{ぼん}小^{せう}植^ちて屋^や下^{した}の暖^{ぬる}き處^{ところ}
小^{せう}や、海^{うみ}濱^{はま}小^{せう}ありて、潮^{しほ}風^{かぜ}温^{ぬる}うて雪^{ゆき}早^{はや}く消^きる、故^{ゆゑ}
二^{ふた}種^{しゆ}あり、一^{ひと}種^{しゆ}ハ葉^は柔^なく薄^{うす}く、其^{その}莖^{くき}の皮^{かわ}多^{おほ}く重^{おも}く
まり、是^{こゝろ}百^{ひやく}重^{おも}く、あつせきとあつせき、一^{ひと}種^{しゆ}ハ葉^はつとくあつ

一^{ひと}種^{しゆ}の皮^{かわ}重^{おも}く、**万^{まん}葉^{はつ}** 三^{さん}熊^{くま}野^の乃^の浦^{うら}乃^の濱^{はま}木^き綿^{わた}百^{ひやく}

秋は

重成心者雖思直亦不相鴨人丸滑稽雜談此者

未俳書小載也然アとのと古奇み多くあり尤花と

以て季針草和漢三才圖會鼠草小似て織あり

小用ふ初草同上浅山松樹の陰處小生也狀松茸小似て

赤黄色立秋の初小出づ柔うて味白雁白雁全体

甘く諸茸より先小出づ故初茸哉先て歸り白和漢三才圖會鮭ハ鯉の本字

先て歸り白初鰈魚臭あり正字未詳狀鱒小

似て田く肥大さるりの二三尺細鱗青質赤章腹淡

白く肉赤細刺あり脂多く味厚美頭の枕骨軟

めて瑪瑙の如く氷頭と称々味亦佳天和本草本

邦東北州の大河多し南州小いことあり和名曰鮭

和名佐介俗鮭字鮭鮭の子同上其子二胞あり胞

と用ふ非あり中數千粒明透上小一紅點あり

鮭と云り又筋子放鳥やの部八幡

甘子と云りのあり九月海

和漢三才圖會紀事この月九日小兒小石と以て海螺の殼

と穿ち鈔と銘して売の内へ入ま或洲濱鉛

と売の内へ充て其力と助け各緒と以て海螺と纏

ひ勢小来して臺中小投入運轉せむその力マ

きりの其力弱きりのを盆外小出を互小勝負と争

ふことと海麻撃と云席の兩端と卷てること盆と

り和漢三才圖會いつきの時より始ることあり田

夫野人の玩ぶ所多し海螺の壳を用て頭の尖とと碑

き平げ尻の尖りと摩て田の糸繩と卷て引てこと

と席盆の中舞を二三の螺と以て勝負とを打出

さる者と負とをどの先小入るものと伊加といひ後小

入るものと乃字といふか打合て同く出ると何れバ

張とつ張のときハ伊加と勝とを波利女祭

九熊野よりつる海螺厚く堅し波利女祭

廿日○婆利女の社ハ洛陽高辻の北室町の西小あ

て祭礼昔ハ七月ありしと中ごろより九月廿日とを

秋は

奉膳式と雁鴨と並あがり、賞する処ハ秋冬の差別あり、まよとも見聞の次第情と論せむ、初雁といハ風雅と思ひ、初鴨といハ凡味と思ふ、爰と天眼とも天耳ともいへり、譬ハ初雁と音ハ喚とも凡味と先ハ思ふべき也、鴨の冬もハ勿論、初初初、肌寒、秋声賦、其氣慄、とまづ、秋とわむを感ん、列、砒、人、肌、骨

に七月庭の立琴

江次第、乞巧奠、御所より筆一張と申上

東北西北の机上の妻不置く、註ハ延喜十五年の例和琴と用ふ、裏書ハ云柱と立るハ三様あり、常ハ半呂半律と用ふ、秋の調子あり、公事根源頭書半呂半律とハ、樂書ハ云黄鐘調大食調ハ律呂の調ハ半律の調也、夫木、もまがこのあふ夜の庭ふや、琴のあふり引ハさりふの糸寂蓮、新綿、藻塩草ハ、十六日あり、内裏の貢の綿あり、俳諧ハ、二百十日ハ貢ものきらざとハ作者あらうを感ん、

正月の節立春の初日より、二百十日といハ此、秋の最中、金氣殺伐の氣變動する時、故ハ必凡

雨あり、此時節中稻の花盛るとこの花とをこめをんことを農民恐む、續猿蓑、公羽草二百十日も恙、葛草

廿六夜待

江戸の俗、今月廿六日の夜、月の出ハ三尊佛の影向と并むとて、高輪ハ群集

を、此夜蔭芝居手踊、或ハ音曲ハ人藝、つし繪等と仕組者あり、是と一夜藝者といハ酒樓小月と待遊客、是と招て與とも、又虫賣菓飴餅、つろくの商人來りて賑へり、土人幫間虎ハ云、土人廿六夜祭と称ス、其由來と尋るハ審あ、む、近村の民、此處よ未、海岸小生、菰と折取圓座とて月のあると待、今聖天棚不敷、菰と敷物不賣ハその名残、あ、と云、此外田安の臺湯島の社地、群集を、高輪の賑ハ、兼三秋物似杵、御所杵ハ似て肥満、及も、味大、

八月庭たき

兼三秋物似杵、御所杵ハ似て肥満、及も、味大、

八月庭たき

鶴、濁酒、醪、

和名毛呂美、今、俗濁酒といハ、

九月鬼箭

良安云、衛矛和名久曾末由美

其葉秋に至て紅葉す、面色丹の如くやして青赤相
襦錦の如し、故俗錦木とり、子と結ぶ一類也
て尖り小正りて紅より信州野州の山谷ふあり、
ほ

七月 星合、星の契
齋諧記 天の河の東に
織女あり、乃天帝の子

あり、機梭小勞役して、容と理る小違あらむと、天帝其
獨居と憐みて、將小嫁せんとして、河西の牽牛と夫小
與ふ、嫁して後竟小女工と廢も、天帝怒り責て河東
小歸らめ、惟一 ほし **星祭、星の手向** 周處風土記
年小一會せしむ、七月七日の

夜庭と洒掃して、露ふ几筵と施し、酒脯時の果と設け
香粉と河鼓織女小散し、云注云二星辰会する小
當て夜と守る者皆私願と懐く、或云天漢の中と
見る小爽爽とる白氣あり、光曜五色あり、此とりて
微應とる、見る者拜して願ふ小富と乞ひ、壽と乞ひ、
子あそこ子と乞ふ、唯一と乞ふと得兼求ることを得
む、三年あて是とり、願ふ其祚と受る者あり、○
牽牛、犬飼星織女、祭河鼓秋より、姫、薰姫とくが小姫、

百子姫、糸織姫、朝顔姫、梶の葉姫、ともし、妻、梶の葉、
天の川、秋去衣、石枕、九枝燈、庭の立琴、紅葉の帳、
火取香、願の糸、衣裳と曝も、芋の葉の露、索餅、銀
河、銀漢、雲漢、烏鵲の橋、紅葉の橋、年の渡、二星の屋形
乞巧、菓乞巧針、乞巧瓜、七箇の池、百箇の池、妻迎舟
妻あし舟、七種の舟、以上各頭字の部よりちて註を
ほし、
星のかし物 いの部衣裳と曝す **星合の濱**
といへる条小注す、

増山の井 伊勢小あ **本願寺の籠花** 七日 紀事
了星の逢ふ所あり、
の晩、東西の本願寺末流並家礼花敷種と以て船の状
と作り、又槽の形と作り、中、小草花敷品と建て、御門至
小献ぐらむと堂上ふらむと、
盆市 草市 荷の葉賣
おく今日七諸人それとる、
麻くら賣 盆大鼓賣

紀事 凡七月街市小太鼓團鼓大小、加伊羅木、三尺手拭、
奇特頭巾、作鬚、金銀箔の紋所小と賣、是盆踊必用
の具、又盆前截子燈籠、臺燈籠、金灯籠、草挑灯、
小行灯と賣、是皆中元の夜点むる所、又索麵、
秋 **ほ**

乾瓢茄子、角小豆、空開梨、木酢材、鼠尾草、荷の葉、
麻、大小の土器、供饗膳、破子、人あけホと賣、是民
間聖具會、**穗屋**、みの部御狭山、**鳳仙花**、時珍曰
の處用、祭の條小出づ

二月子と下し五月再び植べし、苗の高と二三尺、莖小紅
白の二色あり、大指のごとく、中空ありて脆く、葉長くして
尖り、桃柳の葉小似て、鋸齒あり、極の間小花とひらく、或ハ
雜色亦變易も、狀飛禽の如く、夏の**木瓜の子**

初より秋の尽まで、開謝相續て、實と變、
時珍曰、其實小瓜の如くありて、鼻あり、津潤、小味、木あり
るものをも木瓜と名、鼻ハ乃ハ花の落く處、臍蒂小あり、
木瓜灰、小焼て池中小散ず、以て魚小毒と名、和漢三

才圖會、世小木瓜と称も、もの本草の註小合も、是木
桃ありて木瓜小あり、武川江州より多く、こまを出す、
藥肆以木瓜小充、近頃唐木瓜と名、者あり、人其花を愛
む、是眞の**穗掛**、藻塩草田舎の稻のとり初め、新
木瓜あり、らき藁のすりぬるといふものと

て穗と組合せ、門戸ありと倉戸あり、
掛て神小奉るを、ほのちやとり、
兼三秋物鬼

灯、和漢三才圖會、酸時苗五月小花と開く、純白、長も亦
白色ありて、蒂ハ青く、宿根より自ら出き、小兒中此
白子と鑿去、空殼とて、こまを舌上小會て、風吹たハ
音あり、○今の世小女の童のわづと吹とい、采花物語
初花の卷、寛弘五年の所小、御色白く、うらまはうほづ、
あくと吹やうらめて、源氏物語野分の巻、わづと吹

いふゆる、うらまはうらめて、三々て
いふゆる、こま、あくと、と醒齊なり、
早出、三月種と下き、沙汰の地、小宜し、四月苗と生、莖
と別と甚と繁し、一蔓十余丈、延へ、節々小根あり、
地小近て、即着、其莖中空、其葉の狀、蜀葵の如く、大、
の葉の如し、ハ九月黄花とひらく、瓜と結ぶ、正田、
さ西瓜の如し、皮の上小稜あり、甜瓜の如し、一本小數十
顆と結ぶ、ハ其色或ハ緑、或ハ黄、或ハ紅あり、霜と經て
収む、暖處小置け、ハ留て、春小至る、ハ、○一種、南京瓜
一名東埔寨、一名唐茄子、本草、南瓜の下小、所謂、陰瓜

秋 ほ

是ほら螺ら芋も 形かたち螺ら似にて大
故ゆゑ不な名なづく ほとと鷓せ 志しの部ぶ鳴なの
星ほし 祭まつり不な出で川が、

月夜つきよ ありあ只ただ秋あき季きありあ東とう花か式しき 古ふる抄しやうハ星ほし月つき夜よの名なを
わけて只ただ秋あきありあとむらり云い捨て月つき不な去さ嫌きらの論ろんありあとむらり

是こゝハ秋あきありあて月つき不なああとむらり登のぼ夕ゆふ服ふく才さい三さん才さい不な此こゝ名な目めありあ
ときハ其その三さん句くハ素す秋あきやして七しち句く目めの月つきの座ざ不な他たの季き
少すくて異い名なとむらりハ例れいの埒らありあとむらりとむらりてハ故ゆゑ

公こう翁う芭ばの 八月はつげつ 譽ほん田と祭まつり 十五日じゅうごにち 河内かんな國くに長なが野の山やま
遺い訓くの 護ご國くに寺てら地ち藏ざう院いん

の縁ゆかり起おこニ云い當あた社しゃハ人ひと皇みかど十六じゅうろく代だい應おう神かみ天てん皇みかどの御ご陵らうあり
母はは后ごう神かみ功こう皇みかど后ごうの御ご胎たい内ない不なははりて三さん韓かん征せい伐ばつの後のち
筑つく前まへの國くに不な於おて降くだ誕たん御ご腕うで不な鞆たもとの形かたちありあ故ゆゑ不な譽ほん田と別べつ
の皇みかど子こと号なづし奉ほうる是こゝ弓ゆみ夫をとこの家いへと守まもるありあとむらり
此時このとき不な願ねがふと久ひさ治ち世せい四し十じゅう一いち年ねん仙せん齡れい百ひゃく一いち歳さいの春はる大だい和わ
國くに豊とよ浦うらの宮みや不な崩くずれむ王わう躰たいと瑪ま瑙なうの棺くわん不な納なめ河内かんな
國くに藻そう伏ふくの岡おか不な葬くわいり奉ほうる三さん十じゅう代だい欽きん明めい天てん皇みかどの勅ちやく不なよ
アとて室むろ殿でんと營いみ三さん所しよの神かみ明めいと祀まつりふ所ところ謂い中ちゆう殿でんハ八はち幡ばん

大菩薩だいぼさつ左ひだりハ仲なかつ哀あは天てん皇みかど右みぎハ神かみ功こう皇みかど后ごうと世よ不な神かみ祠でら多たし
とくこと當あた社しゃハ玉たま躰たいと納なめ奉ほうるの靈たま不な廟ぼありあて八はち幡ばん
宮みやの根ね源げん威い験けん深ふかきとありあとむらり云い〇神かみ祭まつり八月はつげつ十五じゅうご日にち
先まづ十四じゅうし日にちの夜よ奥おくの院いんの御ご席せき前まへ本ほん堂だうハ鳳ほう輦ふんと行ゆ幸きん
ふハ翌あした十五じゅうご日にち午うまの刻とき還かへ幸きん舞ま樂がくありあ四月しがつ八はち日にち若わか宮みや祭まつり
申まを奉ほう見み舞ま隔へき年ねん不な行ゆ放生ほうじやう會かいハ當あた社しゃ不な此こゝ名な目めありあ
よハ但ただ社しゃ 放生ほうじやう會かい の部ぶ八はち幡ばん 菩薩ぼさつ祭まつり 廿にじゅう二に日にち
説せつの趣すいと記き 肥ひ前まへ國くに長なが寄よ不な於おて米こめ船ふね人ひと船ふね神かみと祭まつりる八月はつげつ廿にじゅう二に日にちこゝ
とほとありあとむらり和わ漢かん三さん才さい齒さい會かい 舟ふねの神かみと媽はは祖そ娘むすめ々々
とハ俗よことと舟ふね菩ぼ薩さつとハ唐たう船ふね長なが寄よ不な未まて往い々々祭まつり
る所ところの神かみ是こゝありあ船ふね中ちゆうの品しん物ぶつと水みづ揚あり
とハ長なが寄よ不な唐たう人ひと寺てら
とて四しヶ寺てらありあ福ふく州しゅうハ石いし灰かい町ちやう崇すう福ふく寺てら漳じやう州しゅうハ下か筑つく後ご
町ちやう福ふく濟けい寺てら南なん京きやうハ寺てら町ちやう真ま福ふく寺てらこの三さんヶ寺てら昔むかしハ唐たう僧そう
住すまも今いまハ香かう主しゆ持ぢ外がい不な目め付つ寺てらとて筑つく後ご町ちやう不な聖せい德とく寺てらと
ハありあ昔むかしより和わ僧そう持ぢありあはさ祭まつりの日ひハ和わ僧そう由ゆ唐たう僧そう表へい
束たて法ほふ事じ修しゆ行ぎやうありあ本ほん尊そんハ觀くわん音いんありあ此こゝ日にち未ま船ふね人ひとと
その寺てら院いんハ恭こう詣ぎも其その異い体たいとむらり諸しよ人ひと群ぐん集じつとや

秋 ぼ

四箇寺に 花芒 芒の穂と尾花とりのこ
不黄葉流る 穂芒 尾花 穂とふくろの形獸の尾

牡丹の根分

和漢三才圖會 夏
月川の地と採晒
乾し古き畑の土と細き沙と以上三品篩和八九月紅き
芽と出ると移し栽べしと培ふ不糞濁と用へる
らど冬月油渣と用ひて少根の傍へ入
或ハ鮮魚の洗ひ汁と灌ぐも亦佳なり 頰赤鳥

正字未詳 和漢三才圖會 狀雀より小く背の色も亦
雀のこゝ其頰赤く胸白くして 鳴鶉の文あり声

畫眉鳥

同上 俗類白鳥
青鶉小似て細く高し 常ノ蒿間不棲む 狀ち鶯より大く
灰赤色眉白く畫くが如し頰亦白くして間黒し
背上黒點あり翅尾畧黒く尾の兩端小白毛あり
頰微赤黄色臆下小赤き斑あり其足赤黒く其声
口滑りて多く轉る小鈴の音ある者其声と謂て

九月 星見草

菊の異名あり 藏玉
庭りせふさくてふ
行鈴諸鈴
の名あり

鬼目

然るも生む蔓草に葉朝顔不似て小白花と開き秋
実と結ぶ秋季ともいれ其実と賞して暮秋その
実甚だ紅く鴨好んてるとと啄む依て名なり 菩提
○時珍曰白英ハ其花とつひ鬼目ハ其子の形象

子

校量類珠功德經 諸陀羅尼及び仏名と念誦する
とあり木患子ハ千倍あり浄土に生せんことを求め
む此珠と受よ水精ハ百万倍あり菩提子ハ無量倍に
可くせし昔洛東建仁寺の千光国師宋不ハ此種と
得て歸朝し筑前の香椎報恩寺に植らんとす

傳ふとす後其種と京師の寺々不傳てるとと植
泉涌寺六角堂叡山の西塔ホあり宇治の興聖寺不
予とと見る一樹不葉二色あり一ツの葉ハ棕葉似て厚
く大く又一ツの葉ハ木犀不似たり其葉不莖ありて莖
より嫩ある細枝と出しとまふ花さき実と結ぶ

秋 はへ

其実淡黒堅硬して念珠とて香氣芬々たり、興
聖寺の僧曰、是經小説、普提樹あり、天竺此樹下小於
て佛成等正覚し、多小樹あり、樹の高さ一
丈をり、枝極のふり百日紅不似て甚と奇樹と
杜ト

鶉草

多し、又篠の葉小似たり、蒼ハ筆の如し、花秋
開く六出あり、中より葉出て又花の形とあむる葉
と小紫の點ありて、杜鶉の羽の形小似たり、あざり深の
びく、莖の高さ
一二尺ふまきど、



兼三秋物 辨慶草

和漢三才苗會 景天和名以岐久佐俗よりの辨慶草、本
細小景天極めて種易し、枝と折て土中ふく、澆漑旬
日便チ生まらる、二月苗と生ヌ、脆き莖微赤黄色と帯
高さ一二尺、あどと折ハ汁あり、葉淡綠色あて光沢
あり、柔小厚く状長き匙の頭及び胡豆の葉小似て
尖らば、夏小白花と開き実と結ふ、連翹のてくあして
小く、中黒子あり、粟粒の如し、人皆盆小盛て屋上不
養ふとりの火と碎べ、故小慎、火草の名あり、按どる

小景天佛甲草小似て大あり、こをと折取て擔間小倒
小懸有小日と經て凋まらば、後地不栽る小亦活き、馬
齒莧小勝も、蓋辨慶ハ源の義經の家臣として、女
童相傳へて強勢の士とて、故小相比してこをと名づく、
以岐久佐も亦、
活の字訓り、**布瓜** 時珍曰、六七月黄花とひら
辨、具小黃あり、其瓜大さ寸むり、長さ一二尺、甚一きハ
三四尺、深綠色、皺の點あり、瓜頭、龍の首の如し、嫩ふ
る時皮と去る、蔬小充老
るときハ大さ杵のびり、
八月 紅草 和漢三
才苗會

陰處不生と其織紅色裏
白く細き刻有て毒あり、**蛇草** 大毒あり、故小
人近あらず、**蛇**

穴小入

月令 仲秋月雷始收声、蟄虫抔戸、和
俗春の彼岸小出、秋の彼岸小入といふ



七月

ととと 妻 どのハ乏の字と
よめり、稀少の義

あこの稀少とよき妻、故小織女年ト一度まらふ
あんととり、妻とよとる哥あり、と増山の井 苧

もふてみつと入てふこへまる **頼桐** 天和本草倭俗

らん云云稻の花とりんとて 唐桐といふ高廿二

三尺ふすきと夏紅花とひらく花繁多 **苧麻** 中て盛り久し美ゆして愛を盡し

うせと 和名唐桂又うらぐら 八葉ハ大麻の如し甚と

大あり夏冬の間花穂と抽て色黄高丈余及

ぶ實あり大 **兼三秋物 番椒** 天井守 和漢三

毒ありと 才高金

番ハ南蛮の義あり俗云南蛮胡椒今唐芥子二月種

と下し葉柳の如らありて小亦胡椒の木ノ葉ふ似て和

五月小白花とひらき実と結ぶ數品大小長短あり

と田きとの種あり初め青く熟まれば紅あり夫古公

朝鮮と伐き彼國より渡る故俗又高麗胡椒と

りハ天井守番椒の一種とくく上とむく故名く

とと **核蒙** 附てんごう **唐の芋** 是と連禪紫芋と

まゆりつら色つく素 芋蘇蒜曰毒少し

煮て食ふべし時珍曰連禪芋魁大ありて

子少し 〇莖紫色と帯味美く粟の比 **烏劫** か

部案山子 **八月 富賀岡八幡祭** 十五名所

の条ニ出づ 記江

戸城南深川あり祭る所鶴が岡小同トといふ別

當大栄山永代寺 宗深川才一の大社 或ハハ神体

ハ菅公の作り源三位頼政深くを崇む其後

千葉家に移り足利高氏傳へ基氏持氏小至り後

上杉小傳へて太田道灌ふくこと信仰と **磯石集**

寛永元年長感法印其夢の事ありて永代島小宮居

と建立し同八年成就と 〇深川の土人本居神といふ

祭礼八月十五日放生会あり二三十年一度祭と行ふ

とよらまの **豊浦祭** 神社啓蒙 長門國豊浦郡龜山あり

仲辰天皇あり 三十二社註式 人皇五十六代清和天皇貞

觀元年男山遷座の時行教和尚行宮と造りこれを

勸請と後土御門院文明年中建立と 〇今八月祭也

三月十五日の兩日龜山祭ありと 先帝祭といふ

安徳天皇の御祭礼あり 阿弥陀寺小御陵あり海辺

秋 こと

家蟹赤間が関の海辺ふ上る、常ハこのとりの、是先帝の御祢月ごと里民のり、又九月十四日十五日、八幡春日此両社と祭る、國主より馬二疋、**烏頭**、其苗高三四尺莖四稜と作葉艾ふ似て其花紫碧色穂と作其實細小糸椹の如し、黒色本附子一物と種成熟もふ小至て四物あり、天雄
黄蜀葵、時珍曰、二月種と下し、烏頭側子附子是也、或ハ宿き子土より
 て生じ、夏ふ至り始て長む、葉の大き菟麻の葉の如し、深緑色、岐子と開く、五の尖あり人の爪形の如し、旁小き尖あり六月花と開く、大さ花の如し、鵝黄色、紫心六瓣やして側てり、且不開き午不收、暮ふ落亦呼て側金錢花とす、其莖長きもの
木賊刈、南六七尺皮と剥く繩索とあまべし、
 曰木賊苗の長さ尺むり、叢生を、根毎小一幹花も葉もあし、寸々小節あり、色青く冬と凌て凋む、四月こまと採、時珍曰、木骨と治る者、こまと用て、磋擦とハ光浄あり、木の賊といふが如し、和漢三才圖會物と磋

と砥の如し、故小砥草と称す、**胡黄连引**、和漢三才圖會、苗の高さ五六寸、根小數莖、其莖細くして淡紫色、葉地層草ふ似て小く、七月花とひらく、桔梗の花ふ似て小く、黄色、〇千振、**大和本草**、胡黄连、黄連ふ似て大く、黄あらむ、味苦し、此草日本ふりや未詳、千振とて、秋白花とひらき、葉細く味甚ど、苦き小草山野ふあり、たぐやくといふ、**酴醾醱**

天和本草、酴醾花の條下ふ云、本邦のハ白花千葉菊の如し、依て筑紫あて菊の如らといふ、中花ハ黄色、ある者ありと、農政全書ふ記せり、**唐黍**、江戸の俗故ハ黄色の醱と酴醾醱といふ、
 ありといふ、**春の日待意**、ぬ殿と
 唐黍といふ、おろさん、**荷兮**

實、蘇頌曰、三四月花とひらく、黄色、栗の花ふ似たり、こころせと、**山木**、あて大木あり、葉の大き七八寸、実ハ栗より少く大く、餅ふ作て麴とて、凶年の食とも、木ハ斑文あつて、諸の器ふつくり箱とも甚美、

九月、**杼**の

秋
こ

木曾の山中多し、是と麩とまると其粉と熱湯を

と糸調へ温飽のてく棒小捲て温ふる内小急小と

と伸と冷まハ堅く縮つて伸と其手廻りと

其急ある故俗諺は椽麩棒とといハ其急あり

桐實 大和本草 荏桐とも油桐とも云々ト訛と

りらも實小油多し、民用とたも、此油とぬると青漆

の如くまら法あり、○時珍曰罌子桐の實と荏桐と名く、

罌子ハ實の状罌小似と云因てあり、荏ハ其油荏の油

小似と云、和漢三才苗会濃州江州多くを種油と

志留りてを販る其功荏の油小同、煉成て漆小代ふ

桐油漆と名く、五色とぬると、常の漆ハ白色と塗と

あともも、又松脂とこそへ船槽と塗る小水と漏さば、ま

とチヤンといふ、○年浪草ハ桐油、ガモ、同物といふハと

ろ、唐枿 魚花果の異名、團栗 子之數種

し、唐枿 子の部、團栗 子の部、唐枿 子の部

ドンクリハ櫛の一種小櫛といふ木の實、椎小似

て大あり、味淡く食ふべく、櫛の形状の部とす

秋 ち

七月 中元

十五日 修行記 七月中元ハ大慶の月、道書小云、七月中元の日、地官

下り降り人間の善悪と定む、諸大聖普く宮中詣、

道士その日夜小於て經と誦し、十万の大聖をわき

冥篇と録し、餓鬼囚徒ともふ解脱と得せむ、五雜俎

道經ハ正月望と以て上元と、七月望と中元と、十月

望と下元と、遂小三元三官大

帝の称あり、是俗妄の甚しき、地藏祭 洛外

六所の地藏詣あり、加茂御泥の池、山科、伏見、鳥羽、桂、太

秦、こま、九一日六所の行程十四里、文徳天皇仁壽

二年、小野篁、地藏の像六体と造り、木幡の法雲山、大

善寺小安置と故小この所と六地藏村といふ、その後保元

二年、平清盛、六ヶ所小堂と造り、こまとわらち置り、七

月廿四日、供養、西光法師とを興行ふ、今小至りて七

月廿四日、諸人六所詣とこまと地藏祭といふ、洛下の

兒童も、又各香花と街衢の石地藏小供してこまと祭

る、又今日六齋念佛の徒も、又六所の堂小詣りて、太鼓と

撃鉦と鳴し、以て踊念佛とあり、俗とれと六斎太鼓と

稱も洛東光福寺

ちりぬ虫

きんちくもの異名異名分類 ちりぬびり夜

千葉の一派ちりぬ

あく風やまひうらんやん

兼三秋物茅

和 大

本草 白茅本艸小蘗頌云春芽を生む針のどく俗

こまこと茅針といひ小兒好て食ふ毒あり血と破り血を

止む 九月 重陽

晉確類書 重陽ハ魏文帝の 鍾繇ふ興る書ハ歲往き月

来て忽ち復九月九日九日陽數として日月並ひ應む

故ハ重陽といふ俗其名を喜して長久うて宜うんす

故ハ宴して 重陽宴 公事根源 九月九日ハ節

高会ハ享む 日あて侍む 菊の宴行ハ

ることと重陽の宴と申九月九日八月と日と九陽

の數ハ叶ふがゆ名ハ重陽といひありむりハ天子南

殿ハ出御ありて節会行りて上達部御子達より始て

其道のハハ探韻給り文つくり文臺ふあて講せらる

十月の旬のふあはしけふも永魚とまふ例あり又羣

臣ハ菊酒と賜り大々ハ五日の節会ふあて御帳の

左右ハ菜羹の袋とけ御前ハ菊瓶とおくハ菜羹の 房と折て頭ハ挿め悪氣とさるといふ本文あり

千代見草

よまハ草 菊の異名あり慈童八百余 歳の後出て彭祖と名と替

て長壽の術と魏の文帝ハ傳ハ奉り文帝百歳の壽

と成さあり和歌もと菊ハ千と世の秋と詠むこと

珍しく此意 契草 菊花の異名ハ藏王陸奥

あて名付侍る也 國ハ兄弟あむの世ハあ

るまびて弟ハ筑紫へ行りていふ名残と惜と別れ

らるまき兄庭前の菊と一本と二つふまけつ意とらえ

とりのハといふ此きくもてまぐさむいといひり弟

筑紫へちつ下向して此きくともるりこの菊ハ二ハ

分しまふハ枝と

ハ小花咲くともん

の調

索隱曰按むハ律十二あり陽六を律とを

黄鐘 大簇 姑洗 蕤賓 夷則 魚射 陰六を

呂とて大呂 夾鐘 中呂 林鐘 南呂 應鐘是也名

づけて律といふ貞徳曰ハこれちりぬ秋ハ

秋 ちりぬ

呂の声ハ春よあさるべき道理あり共其さくあさるるにバ呂と雜むる

八月 龍膽 りゅうたん 草

和漢三才圖會其葉笹の葉よ似て厚く九月花を開く花紫やして鈴鐸の形のどく上ふむく花中小蒼子のり又正白花の者あり笹龍膽とあづく八雲御抄云々草とんとう云〇思ひ草 八重垣 龍膽とんま

露くさといふ通具御説道のへの尾花がもとの思ひ草今さらふあぞ物とわろん〇くさふ真洲翁云く木丹とくまきて云字書木丹ハ梔子の花也と出る是之源氏をとの巻ハ四季とつるその夏の方ハ花橘撫子さうびくふあどゆうの花くさくさくさくさあり是れ夏くさくさくさくさあることゆらり〇尾花かもの思ひ草ハ龍膽と定家卿の御説なまことまいりくあくくくくに龍膽といつるハ誤とあづく

九月 鯉魚風 りぎよふう 九月の風也 李賀詩明前流水江陵道鯉魚風起矣

老 荅 **ぬ** **兼三秋物 零餘子** ぬかご 野山菜と蔓草解と蔓

葉の形状混雜して分別志く草解亦零餘子ありて山菜のどく故小諸説草解と以山菜といふ其蔓紫色と帯ふ其葉田く大あり其花白色穂とあして下り密ふ草解其葉田くして大り且稜あり其蔓青色淡黄の小花とひらく隨て葉と結ふ三稜あり山菜もまき英とむまき故不見易くらむ

九月 白膠木紅葉 ぬるでもくち 時珍曰楠木木の形椿のどく五六月青黄色の穂とあす一枚小累々なり七月實と結ふ鹽曹子と名づく葉の上小虫あり五倍子と結ひ成す

八月 縷紅 るこう 如く草より蔓と出り八月小紅花とひらく形丁子小似て長さ六七分の花あり愛まじ

瑠璃鳥 るり鳥 和漢三才圖會碧鳥俗云留里大さ雀のしくわく頭背翻上翠色頰頰臆下小至て純黒胸腹白く嘴脚尾具小蒼色其声圓滑ありて

清く囀る **と** **七月 鬼の洞念佛** おにのほらねぶつ 七日

秋 ぬると

十五 滑稽曾雜談 洞ハ八瀬河の西の山中不あり俗鬼の
 まで 洞とりの口狭く中間し高き二丈許深き三丈昔
 酒顛童子此洞より丹波の大江山へ移りといふ或を
 昔叡山小童わら僧徒其美しきと愛を勸酒交歡の時
 時人と戯血とく酒不和してと飲ひ一旦魅とありて
 此洞不入云此話羅山詩集酒顛童子の洞不題すとい
 る序小とえり 雍州府志 毎年七月七日より十五日小至
 り村中の兒女此洞不聚して鉦と鳴り大小弥陀の号と
 唱ふこと先 踊 書言故事 王子醉ふの熙可と平
 祖祭といふ 踊 ちげ軍士小とて誣鼓とあり
 遂小せよ其ごと行ふ子醉西人と對陣せし時軍士百
 余人よ命じて誣鼓とありし隊小軍前小出と虜見
 て驚き怖く遂小とと擊破ふ注云誣鼓戲ハ樂人
 雜劇とありて跳躍とありし世人皆る小效ふ○本朝
 の俗七月十四日より晦日に至り毎夜大人小兒街頭小
 踊とあり○懸踊念佛踊題目踊燈籠踊伊勢踊
 木曾踊小町踊七夕踊ホあり 折つけ燈籠
 各其頭字の部不つちて註と

祭よむり用ひ折つけ燈籠と江大不絶り中續

塵粟貞享四年 附句刻 親ハ鬼子ハ口とき蓑虫よ其角折つ

けをらん月の支月野馬中 竹藪と折つけてその俗垣よ

まると折つけ垣といふ此燈籠と竹と折つけてつらる故の

名ありたりわれありていふ家とつらりしとねほく

よく竹とわらりありていふ又名のどく折つけて上を

わらり形のまらきあり 麻柯の箸 聖天祭よ供ふ

一ツ不異ありしと 著 續猿蓑

ふり麻木の箸もとありし惟然○時珍 送

日大麻其楷白うして稜あり輕虚燭心とま

火いの部迎へ火 女郎花 茶た花は 和漢三才圖會

を高さ二三尺莖不稜理ありて蒿の莖不似り枝兩々

對生し節の間は葉と生む其葉三七反前故の葉小

似て細く長し七月穂と生し花とひく最細小正黄色

愛をべし本朝文粹源順の詩云如蒸粟俗呼為女

郎者是あり隨て子と結ぶ花白き者男倍之と名づく

大和本草 敗醬藻塩草小白花あると俗ふととへし

秋を

とつゝ又オホトチハ女郎花小似て花白きありとて
 をこまの花とてつゝ敗醬と名づけし、此花葉の臭
 醬の損じとてつゝ本草小つゝ今試るふ然て
 ○此花と女子の艶姿小とて讀て歌能諧とふ
 同ト古今名よめでとれるむろとてつゝおれち
 あきと人ふつゝ僧正遍昭續猿蓑とてつゝ鶴坂
 の杖ふつゝ萩の凡大和本草萩ハときよつと
 馬寛萩の声つゝ淀川其外處々ふら
 山野おと水辺も生ぞ中実こよれど少ハ其中と
 葉とゆづり生じ似るもれ水草ハ○萩の葉ふ
 たりて音いふ萩の聲あきふさ
 とも萩の上爪とといふあきふさ
 大和本草麥門冬の一
 種
 小て葉ハ大葉の麥門冬
 小
 暮春及び夏の初め純白あり故小翁草といふ後
 漸く青くある根小門冬あり尤大葉麥門冬とて
 異草ハ滑稽雜談按もつゝ和名鈔と白頭翁と翁
 草と和らげゆり然とて本草綱目と考ふ小別
 種ハ白頭翁ハ俗小つゝ猫草小畧似たり今云翁草ハ
 あらば翁草ハ初生の葉純白あり秋月紫花とひらく

穂の如し猶考ふべし又菊とと翁草あきふさ
 とつゝ混とべらる九月の部小註也 弟切草あきふさ

和漢三才圖會初生地膚子あきふさの秋あきふさの枝
 小梗あり莖葉とて按もつゝ汁あり瀕東とてハ紫色
 變も六七月小黄花とひらく單五瓣つて細き葉
 あり莖と結ぶ三稜あり中細子あり藥小用ハ相傳
 入花山院の朝ハ鷹飼あり暗頼と名づく其葉小精あきふさと
 神小入鷹傷と被あきふさる時ハ葉と按もつゝあきふさ
 とてハ愈也入草の名と乞ひ問とも秘して言と然ふ
 家弟密ふとと露洩暗頼大不怒とてと又傷と
 ことより鷹の良菜とと弟切草と名づく○又葉師
 草と名づく慈鎮和尚鷹百首秋の野あきふさとてつゝ
 青くとりつゝ鷹あきふさ
 旋覆花あきふさ 燕頌曰二月以後苗と
 やさそそちつゝあきふさ 生も多く水の旁
 近ハ長さ二尺以來柳葉のどろ莖細し六
 月花と開く菊花の如し深黄色七八月小及ぶ
 秋物 鬼芒あきふさ 時珍曰葉芽のどろあきふさ長三四
 尺甚と快利あきふさて人と傷と鋒刀の

秋と

兼三

如亭生の浦梨 梨とて之をとりてわたくしをいひ

古今とてのうらふふとてこころをいひあはるる 小田守 晚

稲守 山田守 九田と守て稲と守るハ 八月尾 人畜の傷殘とて防ぐたをあり

花の粥 天内記田原康富日記 文安五年八月朔日 然見及ぶのより問ひて多ふいまだ見及ぶその子

細とちらむりより返答し畢ふ云 海人藻芥 八月 朔日 小花の粥内裏仙洞以下令用給良葉云彼粥

調法薄黒焼ヲ粥ニ入合也 後水尾院當時年中行事ハ 朔の条云タウこの御いもい初献

そへてとむふのういそいとい供ひ云 鬼の志草 紫苑の事と云

白粉の花 和漢三才圖會 白粉草 冬枯ふ高と二三尺叢生也葉淡青みて柔く白雞頭ふ

似て微小く四し其花朝以後萎と夕陽ふ至て開く深 外國の物あんと大 車前子 蕪頰苗経 春の

和本草ふとてなり 初め苗と生ず葉 地は布く匙の面の如し年と累し者長さ尺余中ふ

数莖と抽て長き穂と作と鼠の尾の如し花甚細密 色嫩胡椒の如くやて中ふ白粉とてと採て婦人

の面ふ塗光沢鉛粉は優まらん中華の書よとて 採て七八月実と採 滑替雜談 此者苗或ハ花とて

ど古来より実とて八月 尾花 ぼの部穂を 思 の部ふせり故実の准べき

草 其の部龍膽 黄蜀葵 名一物との部と

落穂 詩經 此有滯穂 伊寡婦之利注云滯 遺り棄るの意と收成の際に滯漏り木

穂わりむ寡婦とてと以て利とてとを得る此 豊成餘あつて尽く取らむ又寡とてと共ふと

秋 と

こと見ても、**列子** **落鮎** 和漢三才圖會七
拾穂者行歌 下築 八月最長三尺不

近し、此時鮎芥子の如き者腹不滿其背淡斑の文と
生も、刀刃の錆く如し、故不錆鮎といへ、九月満の水
草の間小子と生て後漂泊して流し墮ひ下り死を、是
落鮎なり、其下り落るゆゑと待築と構て以てことと
捕人名づけて下り築といへ、
九月 岡崎祭 十
九月より肉瘦て味甚劣る、

日或ハ東天王祭九月十五日、洛東岡崎あり、**名勝**
十六日 **志** 九月十六日祭礼云 **紀事** 東山岡崎正一位
東天王祭神輿一基、鉾二本、ゆり、その内一本の鉾、
下り埴と以て鷹二連、獵犬一疋と造り、彩色と施そ、
是と大鷹鉾といへ、其傍に感神院の三字と彫刻を疑
らく、旧感神院の鉾云、當社に聖護院の杜あり、
故有て吉田の地不移も、然る小同神社亦岡崎あり、
故小東西と以てことと分つ、**雍州府志** 大鷹の鉾
ハ、村人神室と称 **豺祭獸** 月令 此記 戌月之
してことと崇む **候** 祭獸者祭之於

天戮禽者 **弟草** **少女草** 菊といふこと草同前
殺之食也 と藻塩草ふいぬり

梅と花の兄といひ、菊と花の弟といひ故や、○ 古露ま
てとあひあひ、少女草、あらと風と花はあて下り、
公翁草 菊とも松ともいへ、住吉の里に五位の松とて、
年々くさる松あり、これ松の神やあるとけん、
後ハ化して翁ふ成て住り、常ふ心とまゆりて琴
とらへ、又庭不菊とて名て愛し、人翁が三我庭はきし
の松蔭ちのぞまむ、翁が草の花もさあへ、○此故 **老**
事ふより、松とも菊ともいへ、翁草といふより、

母草の實 三四月一莖と抽で淡黄化と開く、
穂の如し、其莖高うつと、随て実と
結ぶ生ハ青く熟すと、真紅累累とて、天南星の実ふ
似て可愛 **三才圖會** 万年青、葉芭蕉ふ似て隆々として

衰へ、其多壽と以て万年青と名く、**天和本草** **落**
唐ハ一切祝儀に用るゆゑ、花鏡小とあり、
栗 熟せんとして子出て、其苞 **遅稻** **晚稻** 時
自ら裂けて地不墜る物是、

秋 とわ

日稷稻早中晩の三収あり六七月収る者と早稷と
も八九月収る者と遅稷と云云是遅稲あり時珍
曰十月収る者と晩稷と落水水とつり、畿内ハ所々稻と蒔て後田ハ菜種と植る故ハ落水水とつり、畿内ハ所々稻と蒔て後田ハ菜種と植る故ハ
と云云是晩稲あり水とつり、畿内ハ所々稻と蒔て後田ハ菜種と植る故ハ
ハ所々稻と蒔て後田ハ菜種と植る故ハ

すん 是あり秋甚紅葉も立花と好む者秘藏して
はくせに 飲懃の木と旧事紀小載るもの

わ **七月早稲** 時珍曰六七月収る者
者と早稷とい食ふ

童相撲 扶桑畧記 延喜元年七月廿八日
丁丑童相撲廿番と脚覽綾綺殿

兼三秋 七月六日童相撲廿番終つて舞と奏も

物木綿取 桃吹 和漢三才圖會 其实桃の如
し四ツ小裂て中ハ白綿と出

すらとと桃吹といふ綿車と以て中の子と繰り去り
竹と以て小弓と作ら弦と牽て綿と弾くといふと

若煙草 和漢三才圖會 煙草相思草淡
婆姑 淡芭菰 羅山文集 佗波古

希施婁皆番語也云云 按もろふ天正年中南蛮の商
船始て此種と貢も以長寄の東の土山小植二月種と
下も五月移し植新芽と摘去り虫と除くと毎且
怠るべからず高と三四尺葉商陸に似て長大七八月
葉と米で葉を覆てこことおさへ一宿して取
出し一葉を小繩ふもさみ編みふらふて晒し乾し
一夜露宿して後晒し乾も黄赤色と云云
皺と擴けここと収む云云若煙草是あり

八月

楓茵 和漢三才圖會 此月諸鳥異國
より群飛して

渡鳥 山林江湖ふ来る 是と渡鳥といふ

九月度會新嘗會 外 十六日内 内裏より初稻と伊勢兩宮へ奉らせ給
宮十七日 大嘗会といふ脚即位の後日本國中
の神々へ御饌と奉らせらるるといふ

新米と奉る故よ早稲米の御祭云 **吾亦紅** 弘陶

秋 あか

景曰地榆其花子紫黑色或の如し故小又王鼓と名く云是花景小のワレモカ文本名玉鼓一名地榆比敷山鞍馬及び近道小生む宿根より二月苗と生初生地小く独莖直上高さ三四尺對し分て葉と出を榆の葉小似て稍狭く細長くして鋸の齒の状り似て青色七月花とひらく椹子の如くして紫黑色



七月 梶の葉姫

異名分類 碓の葉姫 榊機七姫の内あり

ハ八雲御抄は梶の葉よとの書も皆由緒あり云漢雲問答は芋の葉の露と硯の水と一梶の葉七枚小歌一首づ書ゆりてそそり是等小よふ梶比葉皆二星と祭る具事要の物と以名付とえり年浪草和俗七月六日市中小穀の葉と賣明夜詩奇と書て以て二星小供とる所あり又短冊は楸の葉と用て詩歌と書く和漢三才圖會和名加知俗云加按楮の皮今多く紙小造る又布小織往昔木綿と称と今も亦祭祀の人木綿織小被る上古の衣服小象と歟今二星小供とる時詩奇と穀の葉小うくと牛女神と

祭るの故小木綿の義小象とるの菅章長高辻朗詠抄曰昔余吾の海小天人下羽衣と獵師小盜ま心あらば獵師の妻とより年月と經て羽衣と取得く天上し再び人界小下りて獵師と共に天上を女ハ織女とより男ハ牽牛とある其再び天へ上るの時梶の木の上より糸と引ゆし是小取付て登る故小二星の手向小梶の葉と用ひ願ひの糸とて五色の糸と用ふと云畧して爰小記此事淡海志とえり

の鞠

あの部飛鳥井

河鼓

あまの部二星

烏鵲

橋

藻塩草 鴉鷺記ニ云史記小云瓊小夫婦あり夫と遊子といひ婦と伯陽といひ偕老と契り子ハ二ハの候陽ハ三四の旬也と云此文のころハ遊子十六歳伯陽十二歳より夫婦とある互ふ志切く共月と爰まると限マあり夕小月の出ると待て里小行曉ハ月の入ると惜して高峯小上る伯陽九十九ありて死を遊子深く歎て月と形見とてほろふ或夜伯陽鴉小乘て空と飛ゆと云遊子殊小歎きて百三歳ありて

秋 か

死せり天の星とありて、鳥小乗て天と飛行て銀河に望
 て川と隔てり、帝秋毎日此河を水とあひ給ふ
 故、水けなき有て渡ること許さず、然りといへども、七
 月七日、帝秋善法堂（御齋）の日あれば、水とあひ給
 へば、渡ること許さず、年一度といへども、人間の為
 一日一夜あり、此と鳥と鶴と羽とあらば、橋とて、彦星
 織女と通まは、是と鶴のこゝろあり云、大和本草
 鶴ハ畿内東北の國と云、鳩より小く、つらみより大
 羽小黒白あり、尾長し、本草小載、鶴と合り、
 茶の条に注せ、懸躍紀事十四日より晦日小至
 と催し、或ハ又各同列して相知處の家小至て、大小踊躍
 とす、是と懸踊といふ、舞ら、所の家再び踊躍と催し
 て、是と酬ゆ、この部とんが、
 是と返しと稱す、蜻蛉の条に注せ、螳螂鎌切同物
 こいの部、拍ちる御傘拍ちるハ夏あり、無言抄小
 秋と有と、辟事の加やりの常

盤木の散ハ夏中、畧今此國の人の申拍ハ、初秋小紅兼
 て、ちるものといへ、此注よつとて無言抄をよむる、されど
 秋ハ、貞享式、此拍ハ御傘ハ説ありて、論語の松柏と證
 とし、畢竟ハ雜とあせれども、爰ハ
 散字と結ひて、決て秋と定（き）下
 兼三秋物、桂
 男この部の桂と、鴈來紅兼雞頭時珍曰雁
 穂子とも小雞冠と同一、其葉九月鮮紅、こと望よ
 花の、故ふ名く、兵人呼て老少年と、一種六月葉紅
 の者あり、十様錦とまづ、○雞頭や雁のくる時、猶
 赤し、芭蕉、増山の井、雁來紅、一説うまのの化、云
 枕草紙ふうまのの花、時珍曰、折高樹大葉圓は
 雁の来し書といへり、云、
 黄白色、實と結ぶ、青綠色、ハ九月熟、○烘折、酬折、白折、
 胡盧折、樹練折、木淡折、似折、伽羅折、四座折、筆折、
 田舎折、君遷折、樽折、樽折、
 以上各頭字の部、よつとて注せ、
 秋、か

蒸て小兒^{こわら}と興ふ食し^く案山子^{あんざんこ}
下痢^{げり}下血^{げち}と止む
和漢三才圖會^{わくわんさんさいず} 彈鳥却^{だんちやく} 僧都添水^{そうどうせんすい} 会^{かい} 藝文類聚^{ぎぶんるいじゆ}

聚云古者三皇の世ハ人死して未棺殯^{いん}殯^{いん}葬^{さう}あり
を畏ふ白茅^{はくぼう}を以しと中野^{ちゆうの}の根と孝子^{かうこ}其禽獸^{きんじゆ}
の食ふと視る小忍^{せうにん}ひも彈^{だん}と作^{つく}以てと守り鳥獸^{ちゆうじゆ}
の害と絶つ按^おむる小俗^{せうじやく}ふ案山子^{あんざんこ}今田圃^{いまたのぼ}の中^{なか}草^{くさ}
偶^{あや}ふりと持せ以鳥雀^{ちゆうせつ}と防^{ぼう}ぐ備^ひ中國湯川寺^{ちゆうごくとうせんじ}に玄賓^{げんひん}
僧都迹^{そうどうあと}と民間^{みんかん}の奴^{やつ}ふ晦^{くわい}まると田^いふ入^い稻^いと護^{まも}りて鳥雀^{ちゆうせつ}
と驚^{おど}りて勢^{せい}を今^{いま}ふ至^{いた}て鳥雀^{ちゆうせつ}と懼^{おそ}むる笈^いと僧^{そう}

都^{みやこ}と續^{つづ}古今山田守僧都の身^みとて秋^{あき}
そとぬれいふ人^{ひと}のぬれ一^{ひと}玄賓^{げんひん}和訓栞傳燈録^{わくじんせつだんろう}ふり
案山子^{あんざんこ}ありととり鹿^かふしあまづ山田^{やまだ}のそむつと
るの是^{こゝ}あり信野^{しんの}少^{すく}節分^{せつぶん}の夜^よい豆^{まめ}うらとと
を焼^やくしと焼^やくしと義^ぎ埃^あ裏^{うら}抄^{せう}の灸^{しゆ}串^{くわい}と名^なく
とこえとらひとと焚^たる魘^{おそ}魅^みの畏^{おそ}ると傳^{つた}ふる意^いと
増^ま山の井^いとあづい添水^{せんすい}と書^かて水^{みづ}辺^へふあうけて水^{みづ}のちうら
と添^そて音^ねと出^でる鹿^かを中^{ちゆう}畧^{りやく}かしととらづ別^{べつ}の物^{もの}
ふれども玄賓^{げんひん}の山田守^{やまだのしん}をむつと僧都^{そうどう}よとてよ給^{たま}

つる故^{ゆゑ}ふ鳥^{とり}の人の形^{かたち}と心得^{こころえ}て古^{ふる}奇^きととらふと多^{おほ}

し然^{しか}ども実^{まこと}ハ別^{べつ}の物^{もの}石川^{いしかわ}文山^{ぶんざん}覆^{ふく}将^{しょう}集^{じつ}竹^{たけ}笛^{ふえ}尺^{しゃく}餘^{あま}
上^{うへ}短^{みじ}く下^{した}脩^{しゆ}し桔^か棹^{せう}ふ野^の方^{かた}て首^{くび}と下^{した}流^{りゆう}小^{せう}矯^{きやう}さる故^{ゆゑ}尾^び尾^び
石^{いし}と鼓^{つづみ}く旋^{せん}轉^{てん}俯^ふ仰^{やう}我^{われ}巨^こ々^々の声^{こゑ}と聲^{こゑ}揮^ひと連^{れん}心^{しん}院^{いん}云^い我^{われ}巨^こ
声^{こゑ}韻^{いん}九^くあらび鎌^{かま}帛^{ひつ}躬^{こう}恒^{こう}秘^ひ藏^{ざう}抄^{せう}家^かの中^{なか}小^{せう}鎌^{かま}といふ物^{もの}と
云^い是^{こゝ}添^そ水^{すい}を鎌^{かま}帛^{ひつ}物^{もの}と立^たて又^{また}それ銀^{ぎん}といふ物^{もの}と
たて菅^か笠^{かさ}とききせて立^たて鹿^かの田^でとまぬとこを
と鎌^{かま}帛^{ひつ}といふ歌^{うた}我^{われ}宿^{しゆく}のうほめ立^たるさうあやわづ小^{せう}

山田^{やまだ}ふ鹿^か鹿^か火^か屋^や
羊^{やぎ}山^{さん}紀^き聞^き説^{せつ}々^々あまづ山田^{やまだ}は猪^{いのしし}鹿^かの
のかわらぬ鹿^か火^か屋^やつく所^{ところ}は小^{せう}き家^かと作^{つく}て壘^{うす}埃^あ何^{なに}
くまの嗅^かきりの火^かととらひ烟^けととらひ鹿^かとやらひや
と心得^{こころえ}べし或^{ある}は香^か火^か屋^や又^{また}置^お蚊^{ぶん}火^かを字^じとくして書^かす所^{ところ}
もあふふりてまどふ人もあまづ用^{もち}ふらず又^{また}火^かの
字^じ濁^{にご}るともと頭^{かぶ}昭^{しょう}飼^{かい}屋^やの説^{せつ}は迷^{まよ}ふらばかせ
ぎ鹿^かの異^い名^な玉^{たま}葉^は山^{さん}ふらふあまづかせぎのけむりこ
世^よ不^ふ遠^{とん}ざうのほどもあまづ赤^{あか}深^{ふか}家^か集^{じつ}朝^{あさ}ぼら
るるあまづこゝえつるハ肩^{かた}拔^は鹿^か
色^{いろ}ぎのちうくたてふら

秋^{あき}か
肩^{かた}拔^は鹿^か
匡^{くわう}房^{ぼう}卿^{けい}哥^かかぐ山^{さん}
のそむか下^{した}ふら

とけて肩多く鹿ハ妻といふ事紀事云復令中
 臣祖天兒屋根命忌部祖天太玉命内拔天香久山之
 真牡鹿之肩而取天香久山之波波加而令占矣古事記
 の説もよみあはれ、神代より鹿の肩骨と扱てうらなひ
 くるくもかの木ハ和名抄云櫻桃和名波々加一名 延喜
 式云九年中御卜料波々加木皮ハ大和国有封の社
 小仰て採てことらふつら夫婦相そとむ離鴨鴨
 几と進らしむ、片鶉片鶉 鴨鴨 鴨鴨 鴨鴨
 草鷹狩草鷹狩ハ馬上馬上と鷹鷹と居居
 て、つり立て鳥鳥不不合合するするといふあり

八月 菅大

臣祭

十六日 雍州府志京四条の南、綾の小路西洞院
 地地の内の北ハ菅神の祭あり是菅神降誕の地故不
 社と建ててと祭る、神社啓蒙或人云此所昔菅家の
 館館一夜飛梅の天神といハ是之今ハ飛梅の跡この地ハ
 存存も又説ハ文字の宅ありて菅神とめて遷座の地ハ
 洛の人阿米神と称も例祭八月十六日社迎の氏子是
 と祭る神輿一基童子素袍供奉社僧僧といふあり

亀戸天神祭

廿四日 江戸本所の末亀戸村ハの
 祭所筑紫太宰府の神
 体体も同じ寛永三 寅年菅家の末葉大鳥居信祐
 建立と祭礼八月廿四日本所牛の御前と隔年ハ菅社の
 神室天國の劍といハありこの外後水尾院の宸筆安
 樂寺の瓦硯もみちの文臺大關秀吉公の文臺と連寺師
 昭巴よとまんとり紅葉の時
 繪等神庫繪ハ藏祭の日奉幣まの部間
 神樂ホ神樂ハ近來正祭あり、貝割菜菜の条出

苧萱

大和本草 霜草 莖葉節穗皆莖の如くして
 小ハ宿根より春苗と生も葉ハ青白のこて筋
 多くまがアて本末を通じ四五月穂と生じ中華の
 書書ハいまど見じ莖芽の類ハカルカヤといハ、新撰
 嵐嵐ハ岡辺ハ茂るかるもの上葉の露ハまがれりり
 衣笠内大臣ハ萬葉集ハ苧萱とよめるハ後世ハ一種の
 苧萱苧萱ハあらも秋苧秋苧といハる萱といハる
 とも和訓葉ハ雀麥雀麥こととらふハありし、萱川萱川 萱菅

萱の軒端

倭名抄 茅和名 萱和名 天和本草 芒
 カヤカヤ 長短一種あり短き者とカヤといハ

秋 か

御傘 萱葍 萱葍 軒端植物にあらざりて秋ふもあらずまどき
道理を知らぬやうの名草ハ秋の季大切なる故に用ちが
よきと云ふ 御傘編集の時事甚だ無数よ
つて如斯く簡多し屋根に昔て何十年よりありの秋
季植物に用ひざりし宜しうらざる式 桂の花 木犀
ありとも蕉門の徒にさると用ふべし

南方草木状 江南の桂ハ九月花をひらけ子ふ 此木犀
より本草綱目 菌桂 巖桂の二種あり 菌桂ハ葉材の
葉の如くして尖り狭く光沢あり 三縦の文ありて鋸齒は
其花は黄あり白あり 巖桂ハ其葉は鋸齒あり 枇杷の
葉の如くして粗濁める者俗呼て木犀 蓋草 蕪頰
と云ふ ○木犀の花 香気高く人として酔ひ 蓋草 日蓋
草ハ葉竹に似て細く薄し亦田小之荆襄の人煮て
黄色と染む極て鮮好之 和漢三才圖會 多く越前よ
り出を以て染家必用の物と云 按ずるに倭の蓋草
竹の葉に似き芒の類之 江湖大浦の辺山中最も多し
老鴉瓜 王草 ○時珍曰 王瓜一名土瓜 其根土氣
と作し 其實瓜に似たり 故に土瓜

と名く王の字何の義と云ふと云らむ瓜瓠子に似
て熟るとときハ色赤し 鴉喜と云ふと食ふ故に俗赤瓠
老鴉瓜と名く三月苗を生し其蔓長多し其葉山々
して馬の蹄の如く 六七月五出の小き黄花とひらき
葉とあす子と結ぶと果をとり 熟るとときハ紅黄の
二色あり 天和本草 其實まろく長し 王草と云王瓜の
実ハ丈をむすべし 似 籬豆 本草と考ふるに人家
より故に王草といふ 籬豆 籬垣の側ハ三月種
と下す 甘蔓生して延纏ひて籬と蔽ふ故に籬豆と
名く又和俗破牆豆といふ 此豆一粒を植むと豆八升と
得ると破牆と八升 芥菜時 時珍曰 芥數種の
と音近し故に之 皆八九月種
と下す 月令 仲秋月鴻雁來賓 ○時珍曰 雁の状
を 鴈 鴈に似て亦秋日の二色あり 今人白くして
小なるものを以て雁と云ふ 大なるものと鴻と云ふ 蒼き者
と野鵝と云ふ 雁ハ四徳あり 飛と云ふ 序ありて 前ハ鳴て
後ハ和ふ 其禮也 寒きときハ北より南の衡陽に止る
熟きときハ南より雁門に歸る 其信也 偶と失ひて再

秋
か

又川才見伏クチナド見イニヨ見ルニコ見江アラ見魚前
この外も猶あり近ごろ山海名産図会て人書よ委しく
論じたまはるる小畧記も、青藍云は焦門の先哲のよめ
るうらう蛙ふあきと猿蓑あやまりてききうちあやめ

鱸しほのくち九月桂の宮相撲拾芥抄六條の
嵐葉北西洞院の西九

月八日桂の宮相撲今昔物語天曆の御時ふ震旦より渡
り僧長考いんしんといひ々々元医師ふああり々々桂の宮
の前ふ大ある桂の木あり々々桂の宮といひ人々の
長考唐の桂心ふまきりといひ雍州府志桂の宮一

町ニ神社ニ神田明神祭島ふあり祭る所

の神二座神社啓蒙大己貴尊鎮座とを將門の社ハ
本殿と去ると百歩をり○大己貴尊ハ入王四十五代聖
武天皇天平二年鎮座之將門の灵ハ六十一代朱雀帝天
慶三庚子年二月十四日將門滅亡とをその後怨灵とを
祟あり小依て延久のころ一遍上人三世真教坊將門の
灵と以て神田の神社ふ合せ祭る富社といひ今の神

田橋の邊ふあり此所の中人芝寄村今に至る祭
礼の日神輿とををり此所留めて奉幣あり祭礼九
月十五日、籠町山王と隔年神輿二基引山三十六本踊
屋基太神樂ホと小従ふこの祭の練物入頼光大江
山入の形状と摸して二間余の鬼神の頭と造り臺小
のせて敷入とと荷外今ハ是ら神事ハ預るの
町内神田外神田大傳馬町濱町辺日本橋通り町前後
都合三十六町神幸の町々ハ夜宮より棧鋪と構種々
の提灯と出して甚賑へ神樂渡御の町ハ本社ハ鑪
倉町通り飯田町より由安御門ハ入上覽所前常
盤橋十軒店通り筋違御門と過て本社へ還御大祇
祭式山王祭ハあらむハむハハ神事能あり今ハなり
神主芝寄大隅守社ハ廿一日○攝易西成郡
家五人巫女ハあり上難波祭大坂博愛町
あり祭る神三座才一稻荷倉神第二祇園去蓋才三
平野仁徳後三奈院延久三年勸請俗小仁徳天皇の祭
といふ毎年九月廿一日神事神湯ホあり氏子醴と醸と
互不相贈ハ社説ハ仁徳帝の社ハ元大江橋の東上

秋
か

町の内ふあり是よりへ皇居の跡あり秀吉公の時上難波遷り

部野の宮の別と桂川の御後の

とる条は注と、かをらよもだ

天和本草順ふ和名抄よから

よめだと訓む但野菊やべし

蔵王のうせせむいつとまよくのこも草まきも秋

とかり名残此菊は奥州新妻の里ふあり因縁無常

新妻といふ物語ふあり業平作是はきくといふつ

きて秋ふ入りより彼物語は十月十五日とあり然る冬

榎時珍曰其本文木と名づく斐然とて章米は

故よことと榎は信州玉山懸の者と佳とん中

按てふ羅願爾雅翼云被は杉小似て杉小異は被

美しき實ありて木ふ文采あり其木桐に似て葉杉に似

たり絶て長下難し木牝牡あり壯は華き牝は實る

あり葉のどし其核長くして椀攪のどし核ふ尖る

者あり尖らざるものあり稜ふくして殼薄し黄白

色其仁生りて食ふへ亦焙り収むへ一樹數十

斛小下らむ天和本草其木屑と焼む

蚊退くカヤリの木こりの字と畧せし

日三四月白花を開き穂とふを栗の花のごとく実

と結ぶ大サ櫛の子の如し小苞あり霜の後苞さけて

子墜る

川 雞冠木

小至て葉丹し愛をへ雞冠木も亦楓の属然し

楓の花は白色実大りて鳴の卵のどし雞冠木の花

和名抄菊

良字茂木又云

加波良枝波岐

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

名あり

兼どうも明夜詩哥と書て二星ふ供も、或は短尺よ楸の葉と用ひて詩哥と書て、今ハ民間の兒女、五色の紙と剪て短冊とよきふ古哥と書て、此葉不結の高く屋上不出すこと竹竿の五線糸ふ換るりの、昨今市中短冊竹賣多し、又近來

七夕踊 小町踊 還魂紙料
 五色の短冊紙と賣りし
 正保の頃

の画巻ふ、七夕踊の面と載せし、其詞書云ことと七月七日ハ中畧を巧奠とて、今を今宵ハ七夕祭とて、もなまめめ、こゝろハセツハツとて、あゝ小姫とて、美し〜出立太鼓と手毎々持つも面白く〜ハ踊まゐるゆゑ、是れ是七夕とて、さむさむる事、昔今ふ怠らざるや、云々七夕踊とも別あるふゆゑ、小女の人情ふと、ともらうゆゑ、七夕よりとて、故の名もあづ、愚案問答ニ云、享保十七年七月七日七夕と祭る、中畧面白く歌と〜ハ大内と町と小路と、友達のこへハハ踊とけたり、むりあり小町とて、人毎々美人のやうふ思ひ名付けて、小町踊と名付たり、云々○七夕踊と小町ハハ踊ともいへ、小町踊といへる説もあらず、**題目**

踊 洛北修学寺村の老嫗法華の題目と
 唱へ踊とも、是と題目踊と云、松崎も同、**高燈籠**

用捨箱 昔々物語 新見翁著 昔ハ死去して其年より七月高燈籠とよむもの、七回忌までとつゝもあり、立ちやハ六月晦日長さ五六軒の杉丸太上ハ三角のいらうと結ハ杉の葉をて包四手ときつて付、燈籠ハ一番の行燈の形ふちひさく作上ひらき下を向ませ、屋根も板をて〜ハ玄關と臺所の間の廣とふ連て七月朔日より晦日まで、毎夜暮六ツより明六ツまでとつゝ一向宗ハハ〜ハ、他宗ハハ〜ハ、のく〜ハ、哀ハ〜ハ、と〜ハ、是享保十八年ハ記〜ハ、し〜ハ、既ハ當時在家の高燈籠の絶〜ハ、明〜ハ、と〜ハ、の頃まで、つ〜ハ、ら〜ハ、下

○猿蓑集 高燈籠
 ひ〜ハ、もの〜ハ、柱の那 千那

靈祭、靈棚、棚
 經 掛索麵 麻柯の箸枝豆、枝豆、根芋、青蕎麥、糍、瓜、茄子、此類、聖天と祭る意あり、秋〜ハ、青藍云む〜ハ、在家ハ佛檀と饅と、あ〜ハ、とあり〜ハ、故ハ七月十二月二度魂棚と饅と設け、聖天とむ〜ハ、祭り

玉兔 つきの部月の蟾 立待月 新撰六帖我門と

いへる糸に註せしむるものさきさき 衣笠内大臣○十
七日の月、山の端の月と立待月とらひてまらぬことを

鷹の羽芒 白き鷹あつて鷹 樽拔材 是酬

關東の俗を樽拔といふ酒樽の中に入置て洗と抜の謂あり 田の色 許慎の

稻三月始めて生じ八月熟と云ふころの時八月ハ青黄半熟する時あり故よと田の色と云 田

の庵 御傘田と守る時づり作て居る庵 八月 田の實の節 恃

とありて我衣手ハ露のぬれまづ 八月 田の實の節 恃

怙れ節 その部八朔 端正月 昌黎月詩三

出東溟事文類聚前輩中秋の月と名づけて端正の月と云 ○季吟云端正の月ハ圓滿あると云ふ

竹の春 竹譜竹ハ八月と以春とを 筒譜竹ハ八月

欲も故小春 と小春といふ熱去んと欲し寒來んと 檀特花 呉響集客又曰檀特花と

小春といふ こまも亦芭蕉の類あや、答て曰是亦芭蕉の別種

和漢三才圖會高サ三四尺葉芭蕉小似て小、甚柔あらざ又薏苡小似て大、甚硬くらと長サ尺ふ

餘、潤さ三四寸冬枯る春生む七月莖と抽んて花と開く、深赤色、形穂最も愛まへト子と結ぶ圓く

黒色、甚硬く用て念珠と作る、木西南外國の草性最寒と畏る、龍舌草 多識篇龍舌草 大和

本草 水中不生む、葉ハ車前のと、水中小花を生む花白く菱のどくわして大なり、處々ふこ

もあり、本草水草の類不載之西土の方言不こうと云、水かまけ、葉枯る、又水葵と云、葵の葉も似たり、花を三出あり八月ふさく、實ハ三角あり細、煙

草花 花鏡 烟花一名淡把姑 初て海外不出 後種と漳泉小傳へ今地不隨てこまあり、木春不老

秋 た

小似て葉菜より大あり、紫白の細花をひらく、**和漢三才**
番会八九月莖の頭不孕種と云く、小白花を開く、赤
色と帯ふ、畧紫苑の花不似たり、**玉章**かの部王瓜
子と結ぶ内、細子あり、黄褐色、**玉章**の条不注也

蓼の花、蓼の穂 **和漢三才番会**三三月繁
茂し、秋ふ至て穂と云す、細

花をひらく、紅白色數品あり、花穂と
あり、実と結ぶ、俗ふらとと種蓼と云、**種瓢**九瓢の
を、さよりの、採収て是と楷の下不鉤、或ハ火爐の上不
釣て水氣と去て、乾き過して褐色とある時、種子と云り
出し、蓄、**種茄子**時珍曰、茄中不瓢あり、瓢の中不子
へやく、**種茄子**あり、諸茄老ふ至つて皆黄あり、

茸狩木の子取、**尔雅**菌ハ形蓋ふ似たり、木菌、土菌
石菌あり、○茸狩や鼻の先ある、あか、其角

大根蒔 **和漢三才番会**蘿菔大根八月
種と下し、彼岸ふ苗と出き、**ぬのむ**

れ雁 **伊勢物語**さよりのこのむの雁もひさぶ、ふ君
うかふとあてらるとあくれる、**八雲御抄**基俊八頼

狩とて、東人隣家相と、小鹿狩事、俊頼ハ田
面の雁ことより、諸抄雁と用ふ、田の雁の事あり、**太刀**

魚 時珍曰、鱗魚江湖の中、小生も、魚の形物と割裂、幾
かの如し、故小鱗魚、魴魚の名あり、常ハ三月と以て
始て出づ、状狭して長し、薄く、削まる、木片の如し、
亦長く薄く、て、大る刀の形の如し、細鱗白色吻の上
小二の硬き鬚あり、腮の下、長き鬚あり、麥芒の如し、
腹の下、硬き角刺あり、快利刀の如し、腹後尾不近く
して、短き鬚あり、肉中、細き刺多し、**天和本**

草本草綱目小載、鱗魚小相似て同じらば、**九月**

高き小登る きの部菊酒 九日○嶽
の条不出つ、**醍醐祭** 國宇

治郡小野の南、深雪山醍醐寺小あり、**紀事**九月九日
醍醐天神祭、能あり、又昨日夜不入て、清滝権現の社前
小於て能三番あり、と云と夜宮能と云、○神樂三基才

一長尾天神才、二清滝権現、第三勝間明神、以上三社、
當寺縁起云、祭る所清滝権現ハ、沙迦羅竜王の才、二女

一長尾天神ハ、延喜帝の御願ふよりて、御願寺とある

秋
た

故小勸請多、勝間明神ハ神縁社説詳あり、糸切齒
例祭九月廿三日小記を誤り、廿三日ハ同所笠取祭あり
當寺の伽藍ハ、山上山下小なりて上醍醐下とらう
醍醐といふ上人長尾天神と以て本居と崇む、**室の市**
すの部住吉相撲ふんえんすまうり廿日、洛東建仁寺の門
会の糸小出づ **旅夷祭** 前小あり、今九月廿

日と祭る、相傳ふ建仁寺の千光國師采西歸宋の
日、船中暴風の難ありとあり、蛭子の像波濤小随て漂
ふものあり、采西とと收めてと祭る風やと波靜り
て恙なきことを得たり、采西寺小帰ると社と、今此夷
の宮是あり、今小至して西海小赴く人、此社小詣て風波の
難ありんとと祈る、故小旅夷と稱を、祭礼の日宮川町
辺の居民、邊物造物ホと出も、**大般若** 菊の異名あり、
神輿一基持鉾かきこと云、**大般若** 黄大般若万重
りて、花葉凡六百葉、故小大般若六百卷
よちとらと名づく、白色の者又あり、**たもれ實**

天和本草方小より、タモともタモとも云漢名と云、
桂の類、二種あり、一種ハ白ダブと云、葉ハ桂樹小似て香

氣もくねし冬赤き實あり、ツノミとの、鳥好んで食ふ
其實の大き木樨子よりや小肉と去と、其内小四き
實二ツあり、一種クスタブと云、其葉白ダブ小似たり、最よく
桂の葉小似たり、桂葉とクスタブの葉とをとも、本あり
ころ、凡他木ハ其葉のまぢ中、一一條り、桂葉ハ三條り
マ、本艸と如、如、クスタブの葉も桂葉と同く、三毛
あり、白ダブと中のとをとも、又枝をむら、處處々、コトツレ
クスタブの實ハ冬熟して黒し、とも肉と去と、其内小
實あり、クスタブの葉の形ハ桂と同じ、味も桂小似て香
氣や、ともあり、白ダブより、香あり、味辛し、木理クス
の木小似たり、良材、白ダブクスタブとも、小大木なり、
白ダブクスタブの實、いづれも火のいよ、いよ、油多し、
ことり、小肉と去中の實の油ととりて、**橙** 秋の部、
燭小作る、○桂桐とタモと訓を、誤り、
黄熟するといふ、正月の部小載、
嘉祝小用する、故、季、く、二月の部、漢、
丸 **八月**
荔枝 時珍曰、錦荔枝、本名苦瓜、一名麴葡萄、實
及び莖葉相似るを以て名と得、五月実と下、

秋
れ

羊蹄の實の如し三
稜あり老る時黒色
九月 蕪我菊
我といふ名の説あまどたうありぞ拾遺集雜「かゆも
る池辺ふこころが菊のまげこまそこの色のてこらこ
よこ人あらど〇まぢりまそごハ繁き小枝」
袖の霜

増山の井 獨稽古 糸衣 木出しと入
この部衣打袖の霜といへる糸衣注を
つ七月
机洗ひ 北野の神事ふあうふあふべ北野
の社ふおひて六日ふ松風の硯の兼と添て供と兒
童の手跡と学ぶもの専ら北野と宗信も故ふ机硯と
洗ひ清め北野の神ふ梶の葉まむし手向るあふべ
又二星ふ手向るものを書為しつり前説あり

迎舟妻あし舟妻送舟
ぎ出らり天のうらふきり一立ハ新勅 天の川うき
といふあふいとほりのつまむらぶみ今やこらん

ひささこの天の川門ハ明ふきりつまむらぶみとい
ひらん續猿蓑舟ありの雲きばらとるほりの影東湖
辻相撲 禁裏御神樂ふ付て民間ふあると里神樂
といふがごとく神社ふある常の相撲ふれ
いと禁裏の相撲ふありて秋とまそあり
士六日滑替雜談昔ハ諸国あてはと入とて家々秘藏せ
る器物或ハ其家の嫁娘妻妻まで常ふことごとく思
ゆのを客殿居間よ限らむと深く入て恣ふ見ハ近頃
まで勢州山田ふらりしゆえ世人山田のつと入といふ傳ふ
むらハ諸国ふありしとあり総て家財の類と畜ふハ
貪欲の道あるゆえとと懺悔のさあふせしとら今
世ハ絶てふ
爪紅 鳳仙花といふの部とべし天和
きとあり
とむと合せて爪と染む
兼三秋物 露
紅色とある云故ふ名く
月令章句 露ハ陰液ニ叙て露とあり結ひて霜とある
〇増山の井ふ出せる波の露ハあまそこの露の誤也〇

の劍 三日月の状と刀劍のつき 月の都 月宮殿 太平 廣記

羅公遠傳云中秋の夜時ふ玄宗宮中て月と詠ふ公遠奏して曰陛下臣不從ひ月中ふ遊入や否や乃ち柱杖と取空ふ向ひ擲つ化して大橋とあり其色銀の如く帝小請て同く登る約まふ行と數十里精光目と奪ひ寒気人と侵も遂ふ大城闕ふ至る公遠う曰此月宮也仙女數百皆素練寬裳して廣庭ふ舞ふと帝問て曰此何の曲と曰霓裳羽衣の曲と玄宗密ふ其声 月の調と記して回る顧ま其橋歩ふ随ひて滅と

蟾 月の兔 玉兔 五經通義 月中ふ兔と蟾とありハ何ぞや月ハ陰ハ蟾蛤ハ陽ハ兔と並ひ明ハ陰陽ハ係る○杜甫詩云搗藥兔長生○白居易詩云照地幾許人斷腸金蟾玉兔遠不知○蟾ハ月中三足のつき

月の蝕 天經或問 星月皆蛙とと玉蟾とあり 日の光と借日ハ月天の上ふあり月ハ天の下ふあり朔日月行と日天の下ふ在て日の光と掩ふ人地面の上ふ在てことと仰

き視ととハ其月の日と掩ふととふらふおつて日光あたが如し然も定ふ常と失つとと人其光ととらざる故ふことと日蝕とハ月蝕ハ朔より望月ふ至ふ一向八十度ありて日月望む中間ハ正對するとき地球障隔と月地影の上ふあり日地球の下ふありて日光つくとことと蟾とと故ふ月其光ふし是と月食と云 月讀

男 拾穂抄 月よと男月讀月夜見皆月の名つき 日本紀おと月ハ男神故ふ男とつふ 月の

出潮 性理大全 余襄公安道云潮の漲退ハ海ふ増減ととふわらと蓋月の臨む所ハ則水往て

西極ふ臨む故ふ月卯酉ふ臨むととハ水東西ふ漲る月子午ふ臨むととハ潮南北ふ平ふととつき 月の秋 御 彼竭き此盈て往來絶とと皆月ハ繫と 月の宿 御 夜とと花の春とと 月の宿 御 植物ふとと同一 月の宿 御 事と居つき 月の宿 御 所あり 月の宿 御

秋

の友 御傘 人倫之但し句体不よ 朔日頃の月

源氏浮舟の巻 ついでちころの夕月夜云 炭依集 細

とついでちころの宵の月利半○月のちめとついでち
ころころい月のとついでちころ
ころころい一日三十日ふきくらむ
月の舟 半月を

月ののぞみ 満月と 葛紅葉 時珍曰葛ハ松
葛の 拍の上不 寄生

女蘿ハ是松の上不 浮蔓ま ○地錦 大和本草 葉ハ衣の

紋不 付るツタ不 似て冬月も葉ゆる ぎ皆本草小ついでち

とし和俗壁生草といふ秋ハ紅め 又常のツタハ身不 似

とら冬ハ葉ゆる 和漢三才圖會 鳥蕨毎 俗云 本細小

葉整の間不 多し藤柔 ありて枝あり一枝 一鬚 九葉

葉長くして光る 疎齒あり面青く背淡し白蕨の葉

のどし故不 鳥蕨と名づく七八月苞と結び枝 とま ち

青白色花の大き栗のとし黄色四出賢と結ぶ 龍葵

の子の如し生青 熟ま じ紫く 内不 細子あり云

是大和本草小ついでち夏葛く 秋不 至て葉深紅愛ま じ

甘藷 和漢三才圖會 仙掌薯 葉薯蕷の葉小比

根の状ゆる 仏手柑不 似て肥り大く攪漫 者の如く故

小名づく鎮江府志不 所謂佛掌薯こ じこ ちこ ちこ ちこ

粒芋 其莖不 葉の理あり子こ 白柀 淡柀と以

て枝と連 根曝し 乾す 或ハ糸不 繫て 晒し 乾す 初高 麥稽

稻藁と用て包宿し てよく霜と生む 豫州西条の産

甘美備州こ 不次 濃州及び 妻梨 具 さいひ

尾州の産ハ長さ 三四寸む のこ 八月 綵雀 名 の部繪行器

敦賀祭 名 の部繪行器 名 の部繪行器

氣比大明神ハ越前敦賀郡不 あり祭神仲哀天皇凡 土

記氣比の神宮八字佐同体ハ幡ハ應神天皇の垂跡氣

比ハ仲哀天皇の鎮座あり例祭八月十日○今月二日よ

了十日まく 近国廿里四方の諸商人放下師狂言師等

来て 集り 二日神興 洗り 敦賀紙屋町と 所より 入

例年紙細工の家基 燈籠と 出し京の祇園難 と模

秋 つ

三日神事四日と後宴と称し町々の氏子東番西番と
ころ引山と出し地車を町中と引廻る山の上ふ一丈
むりの松と立四方錦繡の幔幕水引ホ洛の祇園祭の
山の如し上武者人形と飾る山の敷或ハ五ツ或ハ六ツ祭礼
當日ふくまると出ま天神の森と
鶴が岡八幡祭
ゆ所御旅所して神輿遊行

相州鎌倉ふわりの一名ハ雲井ヶ峯上の宮三座中ハ應神東
ハ神功西ハ妃大神ハ神下ノ宮四座仁徳天皇東ハ久礼
宇礼の二神西ハ妹比咩ハ後冷泉帝の御宇伊豫守源頼
義朝臣安部貞任と伐時丹祈の旨ゆりて康平六年ハ
月石清水の神と相州鎌倉郡今の下若宮の地ハ勸請
永保元年二月成就義家朝臣修覆と加ふ治承四年十月
右大将頼朝卿小林の卿ふ迂一ふふ今テの雀ヶ岡より
毎年八月十五日放生会並ニ祭礼奉幣流鏑馬角力ホ右
つとめし教隆卿記司召ハ秋の除目より入京官除目と号
と召春ハ大政官の廳秋ハ外記の廳ふ於てとと召脚
司召と称ま○司召定考同儀とつとる猶この部定考

の条とも見
月見
名月 今宵の月々々の月 芋名月
望の月 十五夜 三五の夜 月華

事文類聚 歐陽詹詠月詩序云月之為詠冬則繁
霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽月霜侵入敵與侵俱
害詠秋之於時後夏先冬八月於秋季始孟終十
五之於夜又月之中愁音於天道寒暑均取月數則
蟾兔四况埃壙不流大空悠々蟬娟徘徊博華上
浮身東林入西林肌膚與之疎冷神氣與之清冷
○名月 潮東問蒼去来云三五十五夜何名月と
つとるそのうちつとるの月々々名月といふ故あるとせ
きとめ然れども今日名月の詩哥と作らんふあまら故
實ハ限るべし尤故實ふよる佳あまら文明の字
と用るとハ和漢ともハ三五の清光と賞し来る故不明
と名と通ひつとるつて通用とべし○今宵の月今
日の月以上十五夜の月ハ限てつとることを且今
宵と賞まるとつとる句中ふらざればつとるのまじ
らつとあまらつとるやせん々々の月 智月 ○芋名月
御湯殿記 名月御祝三方ふ芋むり高盛と歳時

拾遺浪華の俗十五夜と芋名月といひ十三夜と栗名月といひ三五の夜白樂天詩三五夜中新月色○月華五雜俎人曰八月望月華あり或曰八月夜半或曰八月後或曰八月八月のふらむ秋後の望といふことあり或曰八月の五采鮮明旁照數十丈金線の如きりの百餘道或曰紅雲と見え繞るの臨川吳比部擣謙少卿詩時一度と見えその景象鮮妍千態月草露万媚真小人間いふこと見え所の奇

草 時珍曰鴨跖草花と碧蟬花といひ三四月苗を生じ莖紫ありて葉竹に似たり嫩き時食ふべし四五月

花といはる蛾の形の如し兩葉翅のどと碧色愛をてし巧匠其花と採り汁と取て畫色と作も主昔碧草とて黛の如し怪名抄鴨跖草和名部 岐久佐仙覽抄鴨跖草月草と称す月草ハ露草と万の花ハ朝日影ふこと咲と此花ハ月影

ふ咲けハ月和漢三才圖會土菌 月中より生じて大毒の草といふ

人近よ 燕歸る 格物總論燕春社小来り秋社小去故小是と社燕といふ 鶉

和漢三才圖會百舌及舌鵲馬鳥俗ニ云真豆久見狀鸚鵡のどくして灰黑色京師除夜毎ふこれを炙て食ふと祝 九月津村祭 概及西成郡大坂津村ふあり祭神鎌倉権五郎景政靈といふ高陽郡談昔津村何某専ら武勇と勵諸國と巡行して軍術奥旨と極む相摸の国に至りて一夕景政の社小詣て神殿不通夜々時小神渠武勇と感ト託して云撰津の國難波の勝地小祝ひ祭と我將小汝と擁護せん答云何と以て證とせん曰枕上小神幣ありん明且こめてこまばはぐして神幣ありみづのらとこと負ひ津村小掃きて最祠と造り神幣と納てことと祭る御天の宮とれく元祿のころ御天の大明神と贈号あり毎年九月二十七日神祭神湯の式わり津村の土人本居神も

椿の實 和漢三才圖會海石榴の實曰く無菓花小似て老て枯るときハ殼四ツ小裂け中は子海松子のどと皮と剥仁と取榨て露時雨 露路油と取但千瓣の者ハ實と結をむ

秋 つね

霜、露寒

古今イモとさうらひうること申せよたの木の白露ハ雨ふまきまき暮秋の露あきのさうらふとつゆ時雨と入露霜あき露寒ハ露の気の凝こんこと云ふべし

の糸

公事根源い乞巧きこうといふことありてより事ことにことりり七夕祭しちせつさいといふあり香花かうかといふ供具くぐ

とらひて庭上ていじやうふふととおきてさとのとらひ五色の糸とらひて一事と祈いのふ三年さんねんのうらふ心叶こころかなふとつて此こゝ思おもふ乞巧きこうと申まをす朗詠らうえい憶得少年おぼえとくせうねん念佛踊ねんぶつどり洛北らくへい

長なが乞巧きこう竹竿頭上願たけざんじやうじやうげん糸多いとた白居易えいぎ村一乘寺むらいちやうじ村念仏踊あり念仏ねんぶつと唱となへといふことこと故ゆゑ此こゝ称なづあり

兼三秋物かねさんしゆぶつ糸いと

まもろ月

新六帖しんろくてい秋の夜のひとりねまもろの月つきうう身みと吹ふくちを庭の松まつ瓜うり衣笠内大臣えがさのちだいじん八はち

重垣ちゆうげんやまの月つき十九日じゅうじゅうくにちの月つき一説いっせつ小こ子待こゝろまち廿日にじゅうにちの月つき八月はちがつ磨菰草まほもくそう

和漢三才わかんさんさい菰もも俗しやく云い菰草ももくさ朽木くもく及び老樹らうじゆの根上ねじやう生なまど九月くがつ盛さか不出い一根座いっこんざとふと數十ちゆうじゆ叢生そうせいもも織オリ四し

く泡頭うはづか釘くわい似にて長ながき二寸にすん莖かき細こく柔な軟なまりり纏まとの内うち外そと灰はい白色はくしやく九くて灰はい白色はくしやくある者ものと呼よび菰色ももいろとと此物こゝもの浅あ菰色ももいろあり故ゆゑ小こ菰草ももくさと称なづふ

日本紀にっぽんぎ持統ぢゆうとう天皇てんかう五年ごねん七月しちがつ七日にち公卿こうけいと宴えんし朝服あさふくと賜たまふふ紀事きじ今日けふ武家ぶけ並なら地下ぢかの良賤らうせん各自各自帷子ゐしと著慶しやくけいと修しゆス家々けいけい索さく類るいと

七箇池しちかんと事林廣記じりんくわうき戚せき喫く又また互たがひ相贈あひあひる夫人傳ふじんでん云い高祖かうそ

漢官かんくわん七夕しちせつ小百子せうひやくしの池の池小臨せうりん五緯ごゑいと以もつて相あひ羈かととことと相憐愛あひあひといふ〇七箇しちかんとの池の池とハ星ほしと祭まつりる小せう七ツしちつのたらし

小水せうみづと入いて鏡かがみとつけてほほの影かげとらふつとらふ百箇ひやくかんとの池の池ハ天あまの川がはともともふかふかくく姫ひめとハ棚機たなぐりといふ又また百ひやくのせうららふらふら水みづととららふらふらのの刀豆たうとう

時珍じしん曰い英えいの形かたちと以もつて名なととららふらふらのの命いのちとらふ案あんとらふ段だん成なり式しき酉う

陽雜俎やうざく云い泉浪せんろう不ふ挾け劔豆けんとうあり英えい横よこ斜しやありて人の劔けんと挾けりりが如ごとく即すなはち此豆こゝのとうあり三月種さんげつしゆと下くだも蔓生まんせいし引ひ

て一二丈いちにじやう兼かね豇豆じやうとうの兼かねの如ごとくく中ちゆうて稍しやう長大ちやうだい五六ごろう月げつ紫むらさ花はなといひい蛾かの形かたちのどど英えいと結むすぶ長ながき者もの尺しやくふ迫おし

秋
な

福王子祭九月二十八日神龔一基銚五本御室の御所の庭庭入云云○福王子の宮祭る所班子皇后皇后ハ桓武帝の孫女孫女ハ、吏部尚書仲野親王の女、光孝帝立て皇后とある、宇多帝と生る、此辺の地主神と崇め奉り仁和寺の鎮守とす、**滑誓雜談**俗小五器洗ひとし、是一年中の諸社の祭祀の終つて又當月の外小神祭ちき故に毛吹草毛吹草小鳴滝祭廿八日と記を近來の俳書外小福王子祭と並へ載り、同社の祭と認て再び出候、**和漢三才圖會**倭名奈良俗小古奈良樹の高丈大大櫛櫛ハ花實櫛柞の輩のどし、秋秋日紅葉紅葉をる時人人ことと賞と**大和本草**櫛櫛ハ大奈良といふ葉栗の如し、秋冬枯て落む、四五月花ひらく、栗の花花似たり、實ハ椎の大其苞半つむ又小櫛小木あり、材木とまべ、**南**うらと實の苞あり、半とつむるを即團栗團栗なり、**天の實** 菰菰頃曰南燭株高三五尺葉苦棟のこごひ、人家多く庭除の間小植俗小南天燭、とりハ○夏のふの部南天花の条南天燭



宗奭曰葉麥門冬のどくくして潤し且靱あり、長二三尺四時常小青し花黄綠色中間瓣上小紫の點あり、春芳芳き者と春蘭春蘭ととも色深し秋芳秋芳しき者と秋蘭秋蘭とも色淡し、開く時満室満室尽く香し他花と又別じ、山谷日幹一花ありて香餘り、**大和本草**身世數花やして香香はるもの大和本草、**心**俗小花と玩賞する蘭、真蘭真蘭ハあらざる今今の蘭ハ本草本草これと出さざらん草集解正誤草集解正誤ハ載す、**七月迎へ火** 送り火 七月十三日七月十三日黄氏日黄氏日及及ひこの義あり、此時門前門前ふかりて、必麻柯麻柯と焚てこまを迎へ火とりハ十六日又こまを行ふこまと送り火とりハ、**報恩經**七月十四日卯時来り、次の日十六日午時午時飯飯五雜俎五雜俎闕人最モ中元と重む家々猪猪陌陌冥衣の具と設け先人の号位号位と列ね祭てこまをこま燈燈く、女家則父母の冠服袍笏笏の類と具し、皆紙紙ふ為る者者と籠籠る籠ふ紗紗と紗以てこれと紗箱紗箱とりハ父母の家家を送る、女死女死を女死ハ塔塔亦代亦代アて送る、蒲中蒲中ふ至るときハ則清晨陣清晨陣設くこと甚

秋
ら
む

白交化、嘴黄色、鼻の辺微黒と帶脚脛黄その声鶯
小似て喧く好んで群とあそぶ、又小椋鳥の状相似て小く

九月撰虫

公事根源是ハあからし式に事
あは殿上の道遙として殿上人も遊び

木棠子

蕪恭曰棠華此
樹葉木槿不似て

て嵯峨野おどくひひて、
虫と籠小えりて奉る、
薄し細き花黄みして槐不似て稍長大、子殼酸漿不
似て其中小実あり、熟せる莢豆の如く、田く黒く

棕の

堅硬し、數珠ともし、南人以て黄と深甚と鮮明あり、
花収む、南人以て黄と深甚と鮮明あり

實

時珍曰無患子樹甚廣大枝葉多椿の如く、特
其葉對生、五六月白花と開き実と結ぶ、大と

彈丸の如く、状銀杏及び苦楝子の如く、生ハ青く熟
さると黄、老ると黄、文皺あり、黄むるときハ油燥の

形の如し、畧実中の核、
堅く黒じて正歯珠の如く、
擣栗の類あり、

七月 烏鵲の橋

うさぎの橋と
孟蘭盆

會

日本紀齊明天皇三年七月始て孟蘭盆と設け同
五年勅して孟蘭盆會と諸國お下し講せむ、

氏要覽孟蘭盆ハ是秋氏の孝と述恩と報い苦と救
ふの要なり、目蓮の母とをくんと以て始とす、梵語ハ孟蘭

此ハ倒懸といハ盆ハ此方の器、
云目蓮比丘その母の餓餽中お生むると見て、即鉢を以て

飯と盛り、往てその母を餉を食いまご口お入らば化して
火炭とらむ、終お食ふこと得む、目蓮大お叫ひて馳還り、

佛お白す、佛の曰汝が母罪重し、汝一人の力いやくおする所
おあらず、當ふ十方衆僧の威神カとりてび、七月十五日

お至り、當ふ七代の父母、現在の父母厄難の中おあるかの為
お百味五菓と具へて以て盆中お着て十方の大徳と供養

をへ、仏衆僧お勅して皆施主の、
し、禪定の意と行り、
蓮の母一切餓餽の苦と脱とらむこと得り、目蓮お白く

永く来世の仏弟子、孝順と行ふ者、又孟蘭盆會と奉り、
まらざることを得せむべし、可あらんや、仏言く大お喜し、

故お後代の人、
秋

竹と割鉛錫剪糸花果のうこん 時珍曰鬱きん 鬱金の花金三種あり

鬱金香是花と用ふ根と用ふ者ハ其苗薑の如し其根大小指頭のどし外黄内赤く人以水浸し色を染じ

又微香氣あり又曰四月の始り苗と生じ薑黄小似そ花白く質紅より末秋小莖心を出して實ふし嶺南の

者ハ實あり小豆とくせ 江東の俗スイト馬追 といふ其声スウイといふ

小似て噉ふ不堪とくせ 江東の俗スイト馬追 といふ其声スウイといふ

兼三秋物 上露嘉元御百 首凡の

の俗言小馬追といふ嘉元御百 首凡の

よ野の草の上露は落て和漢三才面会按

下葉小まこむまばり頓覚 鶉和漢三才面会按

小多くこれあり甲州信州下野最多し畿内の産又勝鶉

より黄赤小白斑の彪あり珍き彪のときハ人甚これと鶉

賞む其声知地快といふごとく教品あり嘩々快と上鶉

とて毎小早且日午夕暮小鳴凡春二三月始て鳴若鶉

種小至て声を止む六月又更小声を発し中秋小至て鶉

声を止む人是と養ふ其雌小く足卑く轉らば呼て鶉

阿以布といふ片鶉駟鶉鶉 鶉と取る鶉

各頭字の部小わらうて註鶉 鶉鷹鶉 鶉鷹鶉

衣荀子曰子夏之衣懸結 鶉の御全

生類小二句去し一説小衣の裾の御全

破とて鶉の毛小似るといふあり鶉の床 新式と

と床とて夜分小わらう物鶉の床 とむり出せ

是此道理と了簡鶉の床 余の鳥とらりてさ鶉の床

らと書し草のらち小の鶉の床 此鳥鶉の床

と床とて夜分小わらうと定鶉の床 とえ鶉の床

和漢三才面会鰻 鰻此物冬春ハ泥穴小鰻

月小至て遊ぎ出鰻 此時味勝鰻 子と生鰻

して長サ三四寸性滑鰻 利鰻 泥中鰻 潜鰻 故捕鰻

江州勢田城州宇治名と得紀事 秋月鰻 鰻鰻 流鰻

小従ひて下る是と落鰻 鰻鰻 以て鰻 此と捕鰻

る小流小従て築の中鰻 落入故小捕鰻 易くして魚店小

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

苗香の實

和漢三才圖會倭名久礼乃本綱苗香

高さ三四尺肥茎葉糸の如し五六月花開く蛇状の花のごとくして色黄實と結ぶ大と麥粒の如し輕くして細き稜あり俗呼て大苗香と今惟寧夏より出る者と以て第一と云他處より出る小き者これ小苗香といふ按むるに懷香と大苗香とすと雖今唯大苗香と稱る者ハ八角苗香本朝未小苗香と稱る者即懷香和多くを種て用ふ高さ三四尺肥茎粉昔色細き葉淺緑糸の如く葉夏亦花とひらく淡黄色子と結ぶ形枇の麥小似て小筋稜あり中の子ハ皮と同色なりと云く飛散る處小苗を生る

鶉艸

一切の國史草史和名抄亦小此名ありものをえと草花肆小尋る小とら或給

海雁

大和本草海雁在

九月

太秦の牛祭

十五日

紀事

山城國太秦の廣隆寺ハ常盤村の南山の内村西

北より桂の宮院内ハ如蓋神あり大辟の神社と号し祭る所の神秦の始皇帝あり元亨釈書聖德太子九つの如蓋と造る四天寺法隆寺元興寺中宮寺橘寺蜂岡寺廣隆寺の別号池後寺葛城寺日向寺云紀事上宮王院の庭ハわけて牛祭と修む寺僧各集會も相傳ふ慈覺大師帰朝の日順風と摩多羅神ハ祈る飯山の後此神と叡山の麓ハ勸請を赤山太秦も此社あり故ハ今宵寺中の神事もハ多羅神と祭る者寺中の行者紙衣と著牛小乗とて上宮王院の前ハ出祭文を讀誦も是悉く懺悔の詞ありハ寺僧のくこととてむむむともその戲謔ハ近きと以て近世行者とて修む法令畢つて門前ハ角力あり寺説その會ハ大念仏會と稱す十日の曉開闢十三日の曉に至ての結願と下雲州橘和本草温州橘其葉蜜橘小似て薄く漆掻漆樹の注小其葉肥蜜橘小似り太さ亦同ハ八月の

秋 うわの

部漆の花の条のそとに「**る**」とせし漆の木の枝梢迄
不悉く鋸と以て挽目と附其挽目より脂と登る是則
生漆汁の奥羽及び下野和州尤多し中國中と所々あり
其脂と攪取諸國皆六七月ごとと九月ふ出せる違ふ

裏枯

御傘草葉の外色づきこころ事こころれ
とむくせむ菌野邊原庭あとの文章と入

植物小二句草の名草の字ゆらむ植物小三句し
連ふ裏枯過て秋草の句ありしゆ字をせむせむれ
そ非ふ今一有べし云〇青藍云木の梢の枯るともうら
枯とこころる者あまこわぬし御傘の文体あて草ふ限れ
るこころる梅紅葉 梅の木葉の
あまべし梅紅葉 紅葉せりありうたぎ寒 秋の
寒さ

の

七月残る蚊残る虫

残る

貞享式残るといふ字は其季より此季小
残らむむ残るといへる道理あり中畧壁豆む

残菊ハ重陽ハ残るとも残る虫ハ何ハ残るまじや残るの
字ハ総て其季の次ハ取ると此論と残るの字の例と

志〇青藍云年浪草 俳諧歳時記 亦残る蠅と通俗

書ゆして蕉門の式ハゆら **残暑** 秋暑山谷詩西
も故小今改て秋季とも **残暑** 凡挽不來

残暑推不去〇梢まで来て **後の藪入** 春の部
みる秋のあつさうね 支考 注後

空断らむとも 秋季小連らむ秋さるへ一登
句と秋季のゆらひあむ後字不及 **八月**

野口念佛

十五日 播州加古郡教信寺小ゆら
と野口念佛といふ清和天皇の

御宇教信といふ者あり姓氏詳くとも或いは南都興
福寺の住僧永画坊の才子ありと加古の駅舎の北
草庵と結び常々西に向ひて称名念佛と性仁愛あり
て旅人の荷を助け労を救ふ貞觀八年八月十五日完栗
の卿おいて盗賊のこころを救ふ首ハ教信う庵り
贈る骸ハ其地ハ葬る毎年八月十五日僧徒多く教
信寺小集りて仏事念佛とて教書の畧云揚州勝
尾寺小僧あり勝如と名く八月望の夜一僧来ると

秋の

門と敵く即迎へ入る客僧り吾ハ播州如古の教信
念仏の功力ふよりて今宵極樂小往生も尊僧ハ必
豊年の今宵往生もいひとて去る時のち後
空中音樂きこえ明年八月十五日の夜果して死せし

比彼岸 いげん 春秋の彼岸ハ昼夜等分りて長短なし仏道
ハ中道と崇ぶこの時節まとも中道の辰故

仏事と修も提謂經淨土三昧經ハ王子ハ善と修ま
ことえりハ王子ハ彼岸小わらハ王子ハ立春春分

立夏夏至立秋秋分立冬冬至是也天神の諸神陰陽
交代も時この日梵天帝釈鎮臣三十二人司令司録聞

魔大王ハ王使者悉く出て四方と巡り見人民の善惡と
校へ録もとり故小善事と修まきこ善道寺大師觀

經叙念仏して西方往生の願行とまもハ冬夏の兩時と
取も春秋の二節ととも仲春ハ仲秋ハ兩時ハ正東より

日出て真西ふ没る弥陀仏の因真西日の没所ふあら
故小弥陀の在所と衆生小指示して往生とけむる

のち いづり 紀事雲嶠類要ニ云秦の人本家輝と
得て一子と生ひ妻ととも思とて隣家

後の出替

後

後

野分 のまき 月令仲秋月盲
風至注盲風疾

野山の色 のやま 御今何々々々

野菊 のきく 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

野 の 野原自然

秋の

九月

後

後

脚掌蒼黒りて 滑枕言雜談和
後の趾及蹠あり 國の女兒雛並
とあまの古き物語も出り上巳の節小扱はるは
今又九月九日小賞をも女兒多し源氏物語ハ常中も

今又九月九日小賞をも女兒多し源氏物語ハ常中も

今又九月九日小賞をも女兒多し源氏物語ハ常中も

この部



七月 化生

五雜俎歳時記云七
夕小俗蟻と以て嬰兒

と作り水中に浮へ以て婦人子小宜しきの祥とてこま
と化生といふ王建詩云水拍銀盤弄化生是今人の
泥塑嬰兒或ハ銀範を以てする者化生と
あそごとをりて七夕の戯あることをあらわす
と龍膽といふハ誤

あり龍膽の条に注 **観音草** くわんおんくさ
ふありの葉蘭ふ

似て少く狭く短し石菖ふ似てふのきふ一六七月
莖と抽て小花とあらはす穂とあも淡紫其蒼とまこ
愛まぐ一然るふ大和本草ハ観音草無花無穂とい
ふ京師の俗中元の日此莖を以て蓮の飯と縛る観音

草の名義 **常山花** とこざきのよか
和漢三才圖會根と常山と名
ふよる一
木處々あり其葉甚ど臭し高丈許葉梓楸の葉
小似て團く尖り畧皺して澤わらむ六月細花を開く白
紅雜 **常山の虫** とこざきのむし
同上 蟲ハ此木林の中あり蝎
櫛る木の心と蝕ふ六七月株と破てこれ

と取用て瘡の葉ふ入る或ハ灸て小兒小食しむ九蝎と
取の法虫ある木ハ株小必小き穴あり管を以て水の中
入るとバ出首と穴より出を輒木
と剪兩端と縛りこまを採り得る **栗奴** くりわらわ
和漢三才圖會
あそ時黒き煤と生る者 **鑣虫** くわうむし
和漢三才圖會 鑣虫俗
字正字詳あそを按て
小此虫莎雜のこくハ翅青く腹黄色前脚長く疾走
て跳る毎穴ふ出入する故ハ獲がこし秋鳴声馬の響
の音小似たり **蛸螿** とくわがし
時珍曰秋月鳴て音
因て名づく **兼三**
紫ある者蟪蛄とま

秋物 降り月

滑稽雜談師説ふり月ハ
十六七夜の既望をく月といふ

然まハ居待月の頃より廿二夜迄の月次第小魄と生ぞ
ると望まぐりともく月といふハ藻塩草の傾くの

義も捨 **葛** くず **同根と堀**
直葛原 和漢三才圖會
真葛 其葉薄く

楮の葉小似て面青く背白し爪至まはよく翻る恰も
掌と交まるとし婆娑とて声とふも故小可人葛の

秋 ぐ

葉の裏見と称し人の限ふも、天和本草根と冬月或ハ
春いよ苗と生せざるは用ふ、長き敷尺乾用
葛根是、云古式八月の季と不審、真葛の真いむ
る辞、真葛が原ハ京師知恩院山門の南ありとらと
只葛の生る原、貞享式今按るハ花壇と
花壇、花畠も決して秋不定じき、
どのふちもあし

草の花、草花實、諸草のこけい春夏小花を開
く者あまど、秋多き故無負

草花と秋とも實もま然、古今みどりあり、栗
ひら草と春ハ秋ハつるくの花あをりりる

芋、その部蓮芋、近江國芦浦觀音
寺より出、微赤く
の条るべし、觀音寺梨

甚ど大あらず、漿多く味、九万足、鱈一名九万足
甘、口中消るがどし、といふの部鱈

八月、桑名祭、十八日、春日大明神の社勢
注を、川桑名の城下あり

祭る神四座別當仁眼院説小云經津主命ハ神護景雲
元年下総香取の宮より勸請を又武甕槌命ハ正應

二年八月十八日常陸國鹿島の宮より勸請、天兒屋辰命
姫大神ハ永正二年八月十八日伊賀の名張より勸請あり、
毎年八月十八日と以て祭辰とふす、正應永仁の月日
と以るとと修まるとり、先十七日、社前の南北小車、輛
飾夜小入て試乐あり、翌十八日祭礼のとき、件の車を
南北へ引渡し音樂と奏を、明和十年の春、同禄以前ハ
兩社六座、北三崎の神社三坐、南春日の神座三坐、共
小往古ハ春日鎮坐の日と以て祭る、同禄後祭礼、引を
三崎大明神ハ土地の神、鎮座の年月詳あらず、凝洲寄
鳥洲寄泡の洲寄、合せて三寄といふ、又七月七日の神事
あり、氏子貞寺川ふ於て石とと来て、兩社小献を、これと
石取の神事といふ、此日、雜物と出を、此八月祭と天武
天皇の祭礼と記せる書あり、日本紀ハ天武天皇元年九月
朔車駕還伊勢國桑名宿、今歌中ハ神社あり、
よりて誤、苦参引、時珍曰苦ハ味と以て名、参ハ
記も、功と以て名、和漢三才圖會其
花莖の梢小穂とあを、七八月開く、莖根葉、藥堀
とりハ薬用とて、故小根と連ねると採る

秋野山小出て薬草と云く、**虞美人草** 和

本草名花譜云花四瓣色艶罌粟小類して小園史

云吳俗呼で虞美人草と云、是ハ四月花と云く

者之**花景美人蕉** 紅蕉 此芭蕉の一種類説褒斜山谷

の中小虞美人草より形鶏冠の如く大なりて花赤、葉

皆相對して或ハ虞美人の曲を唱ふれば兩葉撫掌して

頗る節拍ふらふが如し、○鶯水が新式小口決ありといふ

もの何れの草 **栗茸** 和漢三才圖會 山原小生と高ずす

をいふる也、**下筵** きの部 落鮎 **九月菜**

利する栗の肉の **黄の袋** きの部 菊酒 **栗の節供** きの部 菊の

併せ **九日小袖** 清嚴正徹記 九月衣類菊襲 **鞍馬祭** 九日 諸神記鞍馬

出さ 面白裏紫 ○地下良賤今日 **相賀** 是と九日小袖と云

天慶年中勸請を神社啓蒙 **馬山** あり、祭る所の神一座大己貴命 ○此社ハ天子不豫

世上騷動の時報と此神前小懸く故小由木と号、蓋大己

貴命少彦名とあり、疾病と療り、天下と治るの神と云

りて五條天神及當社小報と云るの遺法あり、或説小祭る

神妻益鳥尊と云、例祭九月九日、八日の夜氏子の男女

供物と旅所小献を、**勸學子會** 十五日 三月九月十五日

當日神真本社小入、**三月の糸見合** 公事 根源勸學院の大学の南

ふ此院と立らば、南曹とを申め、冬嗣大臣遠 **呉服祭** 祭の糸小併

の学問と云ん、子孫親族 **世注 胡桃** 庵厨本草 此木より、小似て最も大なり

も、**脂多く味最も美**、**榎櫃の實** 蕪頌曰 榎櫃の

木瓜、類も木瓜、比まれ、大わして黄色と云と云ふ

惟蒂の間と云ふ重蒂乳のてこのあり、此則榎櫃

秋

大和本草 花ハ林檎又海棠ノ似 九年母 大和本草 俗ハ九年母

てかろとて開ク、實ハ秋熟也、
とハ名義未詳、木ハ蜜柑ノ
事類合璧 九月霜降ノ

より長ク、早く実ル、
乃チ熟シ、其苞おのつら
裂テ墜者久シク、藏じ、
苞裂テ墜者腐易シ、

落栗、迷栗、燒栗、桐栗、柴栗、刺栗、打栗、出落栗、三度
栗、山栗、錐栗、搗栗、各
熊栗架と擡 特珍曰
熊石巖

頭字の部ふりて注、
枯木ハ在ト山中ノ人ト
熊館トハ、性よく木上リ
好テ栗を食フ、故ハ樂縁
稍小至テ、枝と折テ並鋪
居所ト設ク、是ト熊ノ

菜黄 和漢三才圖會 胡類
大抵三種あり、其葉

と實少シ、異トあり、
一種春月ニ當テ、苗と種
時實熟モ、大ニ小栗ノ
と名ク、一種五月実熟モ、
大ニ栗ノトク、莖長ク、
下

て垂ル、一種九月実熟モ、
小ニ其大ニ櫻ノ子ノ如ク
て簇リ、
大和本草 葉ハ牡丹ノ似
ト單ノ

草牡丹 白花トシテ、實牡丹ノ似
ト宿

根より生ズ、又實とまき
生ズ、是又牡丹芍薬ノ類、
の匂ハ、あつ、
菊の花ノ

草の主 菊の異名 堀川
百首

草の紅葉、草の色

草の錦 野山の錦 草木の紅葉と錦
ト云フ

の野ふり、咲り、
花の千種、邦忠、
崩魚藻 新續題林 織
ト錦ト云フ、秋
下ニ葉ノ破壊
ト云フ、魚藻ノ形状

春の部上リ魚、
暮の秋 暮テ行秋ト云フ、
秋
の暮ミ混ミ、

盡 九月の晦
日 **や** 晋史 蒲柳の
實秋ハ望テ

先 八幡安居の頭
十五日 紀事 凡安居の頭
ハ大經營ニ故ハ三年

以前その頭人と指點を、
先前年の十二月朔日より翌年
の十二月十五日に至る、
八幡山下の御家安居の頭と

勤む御家村里中の長と、
その土地の中にて、
姓氏あり、
者あり、
又十二月八日今日石清水安居頭人の宅において

秋 や

達所小綱の神人長吏の補任と授けりしと指部といふ又
 十二月九日頭人の宅に郷家衆と饗應し能拍子亦り
 とも古那志といふ是小習礼の訛り又十二月十日頭人
 夫婦杉山不動堂の前にて垢離と修むる事と精進入と
 り又十二月十三日頭人浄衣と著し七所の社に参り奉幣
 たり頭人の婦も又これ小従ふ並御家烏帽子浄衣と著
 し奉供まどの行粧甚だ古風あり放生川小橋二あり
 一は安居橋と名く是安居當人の渡り橋常小不浄の
 人と禁も頭人らとと渡りば今日山上相知る所の社僧の
 坊止宿して精進齋齋もこの間西郊桂の里に女子
 孫夜又白布と以て頭髮とつて未だ桂給と捧ぎ是
 と桂帽子と称も今京の童謡ふり桂帽子是十二月
 十五日安居頭人夫婦社参本社の前ふ大なる松一本建
 白布二足とこの上下の枝ふけ人として飯小猿のま
 としてこの松小登せとのうけ布の枝と伐携て頭屋
 小歸り後代修頭の效も増山の井今ハ十月十五日云
糯米 本朝食鑑今製する焼米ハ青稻と以て稔糠
 と去り炒り過してこもと替き扁米と作る

此と焼米と称も甚佳味ハ勢州莊野の市上まで焼米
 と造る青麥艸と以て俵子と作りこもと畏るて四方に
 送る弟切草と **益母草** の部
薬師草 の部
灸花 の部 嫩ある蔓草小白花とひら内
 微紅く児童其花ととり唾してまゝに莖付
 方と上りて手足或ハ頬小貼るふさあつら灸のこじ
 依て名とす○是和産其蔓葉女青う似て七月葉
 の間小筒咲の花とひら五瓣うて少しく瞿麥の形
 あ **やんま** の部 **兼三秋物** の部
 和漢三才圖會和名夜万都伊毛俗ニ夜万乃伊毛今云
 長芋其根の長さ三丈むり周ア二三寸灰黄色肉白し
 煮て食ふ一救荒本草薯蕷溪の辺小出とし時
 時風水不感して鰻不衰む半衰む者とも人往々あり
 ○此者薯蕷といひ薯蕷といふ又山藥といふ初め唐の
 太宗諱と蕷といふ因て辟て薯蕷と改む又 **烧帛**
 宋の英宗の諱と薯といふ因て山藥と改む

秋 也

躬恒秘藏抄

燒まゝとい馬あどの尾髪ときつてをまみ

てその余つと焼て田ふ立る、其髪ごりきて鹿のまゝぬん

ととと焼 放生會 八月十五日諸国

ちめといふ、 放ち鳥 此といりとい

とと男山の神更と以て京師の人八幡祭或ハ放生会といふ

社頭美豆の南八九町ふあり、京と去るこ四里余、男山、石清

水と号、或ハ雄徳山鳩の峯と称を、欽明天皇三十年冬

肥後國菱形の池の辺、民家の兒三才の時、神託して云、我

ハ是人皇十六代譽田天皇也、是ふよりて豊前國小鎮

座して八幡太神と称を、傳へいふ貞觀元年秋七月、八幡太神

鳩の峯ふ移る、いふ秋の行教、南都大安寺ふ居る、此

僧、姓ハ武内大臣の裔、曾て貞觀の初め、宇佐の神祠

詣づ、一夏九旬、登ハ大乘經と説、夜ハ密咒と誦も、一夕夢中

小太神告て云、師王城ふ歸らむ我も又隨ひ行、玉城ふ居

て當小皇祚と守るべしと、行教中、やく山城國山崎ふ

至るその夜太神又夢中ふ告て云、師我居る所と見よむと

覺てこことと、ハ東南男山鳩の峯ふ光と現を、行教こ

とと奏して宮殿と成る、○正殿三座中ハ八幡宮 神應ハ

氣長足姫尊 神功西ハ比咩大神 依 後差我 天皇源の姓

と諸皇子ふ賜ふ時、八幡宮と氏神と、此社と以本朝才二

の宗廟とまごまふ、毎年二月十日初卯の日、神樂いり、神

樂ふ准むらゝ、八月十日放生会あり、養老四年九月、征夷

の事ゆり、大隅日向の兩國逆乱とよりて、宇佐の宮ふ祈

請せり、あふふその祢宜幸嶋勝婆豆米の神軍と奉て

かの國と征し、敵と討て利あり、大神託して日合戦の間多

く救生といひ、宜く放生会と修むべしと、諸國の放生会

こふ始ふ、○紀事 今晚神と輦中ふ迂し奉り、神幸を

促を左右の馬寮、御馬二疋と幸、召使、官掌、外記、史、左

右兵衛の府、守參議、上卿、左右兵衛府、上臈、前駈、本館、屋

殿ふ参り、向ふ神輿楯の鼻と下り、病院頓宮ふ至りて、行

列行幸ふ准む、この式後三奈院、延久二年よ、八東穂

了始ふ、當社の祭式甚と繁多、故小略を、

豊羊の稻の穂のち、

山雀 和漢三才圖會、狀畫、鳥

あへのゆく長きといふ、 小似て、頭黄白、小赤色と

帯ふ、眼領の辺、小黒き、條あり、背灰赤色、背胸尾とと

小黒く、腹赤く、性慧巧、よく轉る、好て胡桃を食ふ、

秋 や

紙燃の輪と作て筆中不説くる時ハ飛て其論と潜る
別箱と筆の隅ハ安て宿處と云○此鳥藝と云
山雀小藝と云
敗荷注ニ不
九月山口祭下まもまろり

へて故ら鳥由
中巳午日周防国吉鋪郡仁壁の神社九月中巳午日
祭礼と行ふ云と山口祭といふ山口の古名ハ仁壁の庄故
小仁壁の神社と号ス祭者神住吉三神と以て本社とい
合せ祭者神二神味鉅高彦命下照姫の命各二社以上王
殿三社と云仁壁の神社と号す又織機大明神と云
又稻宮とも称す衣食の事と主り多ふ神多ふよりて
此号あり祭礼の事ハ織機の神更あり次の日神華
神興三座本社の西神華の地小出し奉る流籠馬より
皆国主より云と執行と云有司よりて國主の拜礼
あり又六月御田の祭り鎮守の年月詳らと入王十
一代垂仁天皇の御宇初幣
八幡花の頭廿日紀
山城国八幡山の社僧九月廿日花の頭と修を先六月
より撰りて花臺と造る云と地盤刑といふ我

俗板と割と片といふ又利といふ是板と割て臺と製表あるの
義あり花の頭ハ社僧の弟子髪と剃衆僧の列小如るの
とき社僧と饗をも小彩箋と以て草花と製し其臺と神
前の廻廊飾り酒宴の興と催も故小花の頭と称も

山路草菊の異名○十名と云山路のきく各
の極のくちめるのちも猶やはらん前肉大
臣實焼栗 焼栗焼栗 山粧山粧 破破
芭蕉芭蕉 芭蕉翁移芭蕉詞ニ云唯この蔭小遊
漸寒漸寒

次第小寒きといふと
あて秋の末の寒と云
の条 曼珠沙華
大和本草 金燈花 鐵色箭も云
月令廣義 曰冬春葉茂り夏月
花と生して葉死る花葉相衛しと云此花下品其葉
石蒜小似より一類此花と國俗曼珠沙華と云翻譯名
義曰曼珠沙此小柔軟又赤華といふ晋陽雜俎曰金
燈草俗人家おまこと種ること悪一名無義草と云

七月 槓賣
六道叅

秋 やま

花はるるときは葉あし葉はる時花あし、○俳書ふも曼珠沙華石蒜同物とよとつと、鳥信翁の説小従ひ石蒜は志の部ふこ、**松虫** 和漢三才圖會 蟋蟀の類 褐色ふらうして注せ て長き 腹黄之野草及び松杉

の籬小在り夜羽と振て鳴声知呂林、古呂林といふこと甚と優美、允松虫鈴虫昼六得と、夜燈火と照を時ハ光とと慕ひて來ると捕へて籠中畜ふ、今俗よりシくと鳴と鈴虫といふらうし、是松虫といひ、鈴虫と、チンチロリと

兼三秋物 真夜中月 まよあつづき 世三夜、子の刻小

出て午の **十寸穂の芒** 無名抄 穂の長さ一尺 二刻小入、むらりらるといふ彼ます

ぬきと、万葉小十寸鏡 **真蕪字の芒** 同上 眞のと書るわてらう得し、蕪杖と

とりの心、**真蕪杖の芒** まらう杖と、とりの心、と書るわてらう得し、

詞を畧し、**麻苧穂の芒** まそへん、穂の長さ一尺、はるわの糸、同上 眞麻の心、是俊頼朝臣の哥小あみて侍るますわの糸とらうけてと侍る糸あらの乱れと

ゆるく、**堀川百首花** きままわの糸とらうけてたえむと人とおりのゆるね 俊頼○まそわの芒とハ穂の赤きといふますわ、まそらうとらうけるは、語の轉

ト、あてかやハ赤赫の意あるとまをまとして各別種小注せるハ誤ある、**松尾利木** 形 觀音寺梨小似て

清水濱臣の考らり、**圓梨** 雪のど、漿少く甘し、奥州會津の中、松尾の産、今洛の人家所

小接得て、頂妙寺柿と二双ととといふ、**圓梨** 青梨

の種類あて大きく、皮 **八月待宵** 八月十四日夜孫

薄く色青じて甘美、**三潮草** 和漢三才

無声露暗垂玉蟾初上、飲四時情樽素瑟宜先賞、明夜陰晴未可知、○待宵と、翌の夜の暗曇りは、りか

けま、先今宵月と賞まら、**松茸** 和漢三才

待とい翌の夜の月と待義あま、**留金丸松** 草

草ハ山城の北山の産最佳、赤松の陰所、秋の雨湿の為小釀さきて生さ、初め落葉と戴きて見こ、漸く長ま

る者三寸頭田く柄あり、鼓の槌の如、其大なる者尺小近し、日と經て傘と発く、外の色黄白紫と帯内白く

細く深く刻みあり其柄太き者菜小 **舞草** 同上
て味良し八九月の交盛なりわらわら

ハ朽木小生を織柄あり一株片々と叢生を **間引菜**
火炎茸の如くして上黒く元白く味脆く甘し

貝割菜 **摘菜** 和漢三才圖會 九蕪菁蘿腹の類大抵
小葉 八月種を下し彼岸中小苗と生む其嫩

と扱て煮食ふ摘菜間引菜是云又曰苗と生じ地と出
ると二三寸漸く茁て二葉あると蔬と手人は是と貝割菜と号

猿子鳥 和漢三才圖會 正字未詳状大さ雀の正し
全体灰黒胸腹淡赤し羽灰黒色ややく

黒き彪あり尾の下西端小白者二つ其嘴短くして赤黒
く脚黒く頂灰黒頭より胸小至て淡赤ありて白き圈の

豆鳥 豆甘美いの部 桑鳥
猿子と照すと大まこゆ 豆廻の条と云ふし

九月豆名月 八月十五日の月と芋名月と云ふ
對して十三夜の月と豆名月と云ふ

外市 すの部住吉相 **鞠花** 菊の異名 藏玉わとえ
撲会の条ふ出 とら、鹿文曰按むる

菊の字本鞠よ作る鞠ハ従ハ鞠ハ **楹棹** 藏器曰樹林
音キヲ訓ミリ又鞠の如き形と云ふ 楹の如く花

白綠色マクハセ 此種蕃邦より渡りて此訓ハ則童語
あり今京師小多し梨子の如く凡味も又梨子小似て

少しうろしきせいとことハ菓子ハ **豆引** 和漢三才圖
こは小砂糖と和して製しこ 全米俗作

と菜といハ菜と藿といハ莖と其といハ本綱ハ菜の穀
の總名皆米といハ大豆小黒白黄褐青斑の數色あり

大抵夏至十日以前種を下し **正木の蔓** 真濁菊
七月花とひらき九月莢と結ぶ 云々

此ららハハと常盤若あつたつとまてのつべしハ
いといハハと神社小よりて用ひあれハハあつたつ

中ハ襴ハ髪とせハ一種有久古今集ハ深山ハ
外山ハあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ

とよみしハまづて常盤若あつたつたつたつたつたつたつたつ

年の古葉色ハと落るハれあるハ山の岩木ハとふゆとふ

とこそづハ葉ハ南天燭ハ似て黒とあつたつたつたつたつたつ

つきててゆめじ右のてくはまみつらん云○真淵翁の説
小のるるまきハ定家蔓よ似たり俳諧は秋季すと定めて
ハ古奇小色づくことあり

冬青の實

冬青目其葉冬
もまろ正青く光澤あり口長やして尖らるる較る鋸
齒あり夏小白花とひらき秋実と結ぶ生ハ青く熟ま
ハ紅ぬおのつら裂て中小白子あり、
枝とて活易し藩籬とほる懸る、
ゆてハ志ひ

天和本草 櫛の一種葉ハ櫛小似て厚く大ハ色深青
面ハ光沢あり屋材器を作り舟の櫓とも其用櫓
と同じ一類別種ハ実ハ櫓より大ハ櫓
とも民用と助く○実を以て秋とも、
の子ハ如くやして小ハ簇りある生ハ青く熟ると冷
赤し裂て内紅子三ツ粒あり其葉秋小至て紅あり

松の實

松の實 志の部松子
の条小注も
立秋と 牽牛 志の部二星
の条小出、
夏解、夏書納
の条小出

七月今朝は秋

夏ハ四月十六日入七月十六日解是と夏解とつハ夏九旬
の間他の化益の為ハ聖經及び名号題目と書寫し夏
終るの後是と堂塔伽藍ハ納め三束ハ方壺ハ
田圃も是と夏書納とつハ在家も亦此ハ效ハ
釈氏要覽僧尼解夏の日録と以て節と束は檀越ハ
遺るることと夏解草とつハ今この草と詳ふまろハ已ハ五
分法身の座とも故ハ吉祥草と名つハ漳州府志四時
一色泉石の中ハ生き山村の人瓶ハ挿と先と祀る陰宇
にありとつとも葱翠やして凋まむ家ハ吉事ハハおのつ
ら花開く故ハ吉祥草と名づく、字彙節ハ伊又及音
印草の名ハ天和本草 夏解
草ハ麥門冬の大なるもの

兼三秋物 玄兔

月の異名之○謝莊月賦云引玄兔帝臺
○つの部月の兔の条よりしとる
つこの部月の 雞頭花 時珍曰雞冠花の形と以て名
都の条小出、
高き者五六尺短き者幾ハ数寸、畧六七月梢の間ハ
花とひら、紅白黄の三色あり、畧花最久耐く霜の

秋 けふ

後始てけいも **鎮江府志** 莖も蔓も花も實も山菜
焦る、**黄獨** 小類も葉大なりてや田く根ハ芋此如
らうて鬚あり味微苦し〇 **枳根** 正字白石李蓋
俗ハ何首烏王と云ふ者是之 枳根ハ実の名の
その実大さ大豆の如しことと喰ハ少しく梨の味あり
小兒疳瘡鼻穴開くものことと以て其鼻穴を穿つ

八月 けふの月 つ部月見 **毛見** 紀事
年の貢と納る九秋米收納するの法晚秋小縣史先
田地の立毛の善惡と巡檢を是と毛見といふ草と毛
の故ハ稻未刈獲 **罌粟子蔴** 月令廣義
さる亦立毛といふ、 月十五夜罌
粟子と種とハ花 **ふ** **七月** 舟形の火 ひせ
盛やして繁し

部 施火焼 ふ **古枝草** 枝の異名之 **藏玉** 宮城野
の糸糸出 や露も色ある古枝草こと
しの秋も花ハ **藤袴** 和漢三才圖會 高さ二三尺葉
さきさき西行 女郎花の葉よ似て切又あり

六七月細き白花と開く、今云藤袴是之 倭名抄 蘭 和名
本草云布知波加萬新撰 **天和本草** 真蘭和名藤袴又ア
万葉集別用藤袴二字 ラ、キーといふ古哥ふらふとよめりハ雲御抄ふと蘭と
ふちむくまといふし書もふ葉ハ麻ふ似て雨岐あり香よし
乾て弥香し是真蘭野あり秋紫白の花とほらく若
葉ハゆききく食をべし其芳香美味凡菜小と云ふ詩
經楚詞ふと詠せー蘭是之 **和訓栞** 花の色とて藤と称
其辨の竹筒とあせるとりて袴と称せり、〇袴ふちむくま
と奇俳諧とりふ同じ **古今** 何人ききでぬきうけし藤袴らる
秋とふ野とふれをす **曠野** 藤袴と凡弱蜜みつらへ芭蕉
あてつし **蟋蟀** の異名之 異名分類 古き筆の化してふる
とらりふとつひ 秋も今に浅芽生ふこと

兼三秋物 **卧待月** 八雲御抄 子待
声もさるなり 卧待廿日月あり

桂明抄 永徳の頃、為重卿廿日月といふ題おてつをあまこ
とつ月の月、卧待も猶宵の間、まきこて出まき **卧待月** ハ
雲ハ廿日月と遊まはらふこと望月ふよりて廿日月ふ詠ハ不
審まはらふも月の百首おとふ十九日月、〇一説ハ卧待

秋 ふ

月八十九夜の月藻塩草更まもち月筆折
又寐待月日の月あり

形小依抄蒲萄本朝食鑑俗蒲萄材と称
て長しま或、穢材といふ味佳なり

いづとも用 八月ゆの部夕顔の匏ふよう 木芙蓉水
とふまむ 実の条に注す

者とととと草芙蓉のの荷の花是也陸小出る者ととと
木芙蓉といふ時珍曰此花豔く荷の花の如し故芙蓉

木蓮の名あり八九月始て開く故拒霜と名く中畧冬
凋夏夏茂秋の半始て花着く花牡丹芍薬類

紅白黄千葉の者あり最也 蒲萄時珍曰春月
寒耐て落と實と結む 苞と生じ葉頭

る枯樓の葉似て五の尖あり鬚と生し蔓延數千
丈と引三月小花とひき穂とふま黄白色実連り着く

と星の如し七八月 時珍曰蒲萄酒小造
熟と紫白の二色有る 蒲萄酒るしととと醕飲

ハ陶然とて醉ふ 袋洗山海名産面会伊丹 新
故小この名あり 酒成就の後猪名川の流不

袋と灌ふこのころと待て近郷の賤民この洗濯を 冥凡味
薄き體の如し是又他小異あり賤の女や袋洗の水の汁

鬼貫青藍云鬼貫の先吟も 二季子鳥雁の異名
あれハ秋季とて子細ありらん 藏玉つつ

と古里とて二季鳥らん 九月不堪田奏
ふと行くん忠岑 公事根源是ハ諸国の田の損亡

堪田の申文 九月七日 或ハ五日 公事根源是ハ諸国の田の損亡
所々の目録とて奉まととふつきて租税之三分二免し

ふとありとありとありと諸国より坪付帳と奉れハ大臣陣ふつき
てらと申て諸国小施行ありしく作る小堪田といふ

ろとて不堪 二夜の月 福王寺祭
田と申あり 志の部主 夜の条に注す

鳴滝祭の 佛手柑和漢三才圖會其樹柚 似て刺お
糸ふし 是全く柚柑の葎小似を指大決ん

青色筋理顯然とて畧多羅の葉小似て尖 緑豆引
らむと大和本草昔本邦小さ近世来る

大和本草緑豆一年の内小二度実る故ふ 佛甲草天和
八重生といふの蒴收ると引といふ 本草

秋 ふ こ

京都及び諸州小夏草といふものは是也又根あり草と云
根鬚あり葉細長として尖り莖を折て赤狭め能
能生滑替雜談或説ふこの葉の形指の爪爪似たり故
小仙甲草とも仏指甲の名あり此草の葉生ひ出て石地
ある形蓮花の如く故小岩蓮花といふ篤信ハ非
とと〇岩蓮花あらかんあらかんあらかん佛甲草ハ雜物也

待冬まちふゆと隣とま注不
二七月小町踊こまちおどり部の
夕踊の条ごりやう御靈おんたま御出おいで十日御ごりやうの社ハ上ハ京都
下小出ごりやう御靈おんたま御出おいでの北西小あり下ハ京

極大炊御門の北小あり雍州府志此社始ハ近衛通新
町小あり上御靈ハ京極の西出雲寺の北小あり上下脚
灵の社毎年七月十八日御出八月十八日祭礼あり神輿二
基御灵ハ所ハ崇道天王伊予親王吉備の聖天藤原大
夫廣繼藤原夫人橘速勢文屋官田九火雷神之世火
雷神と謂て菅家の灵ともる者ハ誤傳云御靈ハ所の
内四所ハ桓武天皇の御時とと勸請を下の四所ハ仁明天皇
の御宇ととと勸請と〇上出雲寺と上御灵の神宮寺

と下出雲寺と下の御靈の神宮寺とす傳教大師の
草創して今兩寺と小絶つた寛文中慈眼大師の
遺誠よりて久遠壽院の准后山城国宇治郡山村の郷小
於て出雲寺と再興あり毘沙門天と安置し上御灵
の社あり是古と存するの遺意あり上御灵の御旅所ハ京
極通り中御灵小あり下御灵の御旅所ハ年々その所と定
めどその年神事頭屋の家内小安置
御旅所のま不在との間とて御旅と称す
すの部相撲こ小鷹こたか狩かり滑替なげか雜談初鳥はつとり狩かり鷹たか狩かり
の条小あり少しありありといふと

万葉新点よりハ差別あり小鷹こたかと秋とすハこたか鷹たか雀
その外秋の小鳥狩あり大鷹ハ冬とて鶴雁鴨の類と
狩かり可かくくせせ凡て鷹ハ冬とて小鷹こたかの分ハ秋とこの種
類多し刺羽さしはといハ小隼こはや朝鮮より来る雀つばき雀つばき賊ぞく
つこの雄おとこ兄あに鷓鴣せうこ鶴つるのりの雌メ鷓鴣せうこ巢ねのりのといハ
ハ秋巢より取といハ凡て鷹ハたりのたりの名なも別とハ
大おほ鷓鴣せうこハ小こ仙翁花せんおうとせこふき浮うき蕃ばん一名な沢
たり此こ名な紅梅草こうばいそうの部ぶとすし

秋
こ

日くせに葉の葵の形似て滑あるところ那岐小似る
夏の末より秋碧花とひらく花こまぎと云へ水草あり
是と水葵とわらへる輩多し水葵ハ菘ハ
花黄あり○腥し小あぎの上の鮓の腸芭蕉
酉陽雜俎 寵馬 狀促織の如く俗より寵馬あれば食ふ
足の兆 天和本草 蟋蟀小似てひげ足あつくせの高く頭尾
さぐりてまると寵のあより小穴居を筑紫の方言小
井ヒゴ○海士う家ハ小殿あゆむるけくね 芭蕉

兼

三秋物 心の月

秋の枝折心の月 氷の輪 月と見立

て云東坡詩

氷輪横海潤

氷の鏡

月と見

牛房引

注よか

胡盧枒

一名豆枒即乾枒

樹練枒

形鳥の卵の如く撰津丹

波不多し所謂鶏の子枒欽京師

御所枒

大和の御所村

より出樹枒

紅瓶子梨

瓶子の形あて

空閑

の上品あつ物

梨

肥前の産微赤色極りて大なり其味田梨小亞 小瀑江鮒 和漢三才圖

者と江鮒と名く或ハ名古或ハ伊勢鯉或ハ口女又伊奈洲
走小瀑江鮒といふ 畧ハ九月稍長じ大さ六七寸江海の
交ハあり此時泥味あつ脂多くして愈甘美色
黒と減して瀑し洗ふが如し故小瀑江鮒といふ 八月

小望月

十四日のこま

今宵の月

つぎつの部月見 駒

牽駒迎

望月の駒

江次才 本ハ八月十五日あり朱

め用ふ云く頭書云信濃勅旨の牧十九ヶ所延喜式不載
所の一ハ天皇南殿ふ出脚ありて御馬と分ち取りし出脚
おきとれた建礼門の前の大庭ふ於てこまを牽分しむる
書小云上野九牧延喜式は廿八日ト云七日甲斐の勅旨の牧
十七日甲斐穂坂の牧廿三日信濃望月の牧廿五日武藏勅旨
の牧又十五日信濃勅旨の牧廿八日上野九牧以上六ヶ日延
喜式にみえりとの外兼平官府十三日武藏秩父の牧廿
八日同小野の牧の御馬とまを貢 公事根源 公卿以下次才

秋

こ

小御馬と給る馬の差繩ととりて御前小せと一拜も取残
 して馬と引分の使として次將と以て院東宮かといふ
 べき所々へまわらせさる〔新葉〕秋の田の穂坂の駒と引つれて
 とさゆする世のいも有る御村上御製〔金葉〕東路とは
 る、小出るもち月の駒ふさひや、何ん坂の関仲〔拾遺〕
 相坂の関の岩と踏あらし、やちらうらうらうの駒馬遠
 様〔一の戸や衣〕御靈祭 十八日 八所の御靈祭ハ
 やつ、駒むりへ去来 神の名七月の部御灵
 見合〔紀事〕午後小神興二基中の御灵の離宮と出て幸
 の鉾八本、元鉾と床ふ建て、棒二本四人と以てこまを荷ふ
 と幸の鉾より神室の内持ふことと尊敬と又勢力の人
 鉾と帯の間ふ立両手と以てとと捧げ行くと祭鉾といふ
 又一人竿の先小道祖神の假面とくけて神興小先づつ此
 仮面の鼻長大俗とまこと玉の鼻といふ別當及び氏子供奉
 御旅所より西の今出川下烏丸と登り長者町より室町
 と通り本社小入上御灵の社、京極通筋違橋の乾二町余小
 あり、下御灵の神興も同時小拜殿と立、鉾五本別當氏子
 供奉、上御灵の行列の如し、神幸の路次京極と出、榎木町

の西より東洞院の西と登りて出水小行、室町と下り二条と
 通り、油の小路の下立賣と上り東へ行、京極より本社小入
 下御灵の社、京極通大炊御門東〔十日〕名目抄
 北の方あり、例祭八月十八日あり、定考〔定考逆〕
 小讀例〔公事〕根源 是はむり六位以下の加階とまらる人ハ
 かの藝能行跡格勤とえらとと榮爵と給ひらる、上卿
 官の東の廳つきて事と行ふ次小朝所ふつて三献
 の儀式あり、次小安穩の座ふつ、又三献あり、挿頭の花
 と上卿以下の冠ふきと大臣ハ白菊、納言ハ黄菊、参議
 ハ龍膽、其外ハ皆時の花とまら、造花小わらをも、大々
 二月の列見小同じ、式兵の両省より、諸司の輩の上と選
 成まると列見といふことと書あつめて奏まると擬階の
 奏といふ、此人々を擇出し、衣〔き〕の部砧の、金〔こま〕
 て定めらるるを定考といふ、条下小出、
 剛草 〔和漢三才圖會〕山野處々小あり、高さ三尺莖
 枝花葉並小秋よ似て小く、七月花を開き、莖
 とあま小豆の莢のごとし、中の実黒く其根甚と強し、故
 小菊人牛馬と較ぶべし、俗呼て駒繫といふ、陶弘景曰

秋 乙

狼茅其根獸の齒牙 **革草** 和漢三才奇会 山の

のこころ故小諸名あり 蘇小木の葉と戴生を

状松茸小似て織の外黒く粒々の皺あり晒し乾せば黒

みして染革のごとし裏黄赤みで毛糸の如きものあり柄小

鱗甲あつて **五十雀** の部四十雀 正字未詳

味微苦し の条に注を **小雀** 和漢三才

畜金俗云古如良状山雀小似て小し故俗呼で小

雀といふ山林多し頭黒く頬白くして口き紋の如く背

腹白く翅尾黒し其声滑りて多く **九月御灯** 三

轉る捷輕やして上下にえぐり 九月神社啓蒙山城国

は同し其条 **御香に宮祭** 伏見京町の東了

あり祭神一座秋神功皇后○古老云鎮座年紀分明ふ

らど昔より垂跡此地あり秀吉城と築くの日東の丘

小移し奉るといふも神の祟りありし故復旧地小近し

奉るといふ乃今の社地也○一書云この地紀伊郡の属

も例祭九月九日之朝日と御出といふ十日神事能ありは

し祭る所の神九座也神輿も又九基あり土人本居神と

ま今ハ神輿一基造り山ニ基透物ホと出さ○當社ハ延

喜式小載さる所の御諸の神社是より鎮坐年月未考一

書貞貞觀二年勅 **後日の菊** 紀事 九月十日或ハ十

請のより記せり 日禁裏小残菊の宴

あ **御難の餅** 十百文永八年九月十二日蓮上人相別

の下僅ふ一命と全うも今日宗門の徒資と 鎌倉龍の口小於て尼難あり白又

作して像前小供さるると御難の餅といふ **小倉祭**

十五日豊前国到津の社ハ企救郡今村の庄到津村より祭

る神中ハ應神天皇左ハ神功皇后右ハ玉依姫草創年月詳

ふくも後鳥羽院文治四年宇佐八幡この地小勸請しこの

秋 乙

きふ加ふ九月十四日晡後神輿仮殿小遊ふ流鑪馬あり人夜小入襖と修し舞樂と奏と神湯の祝あり當日十五日國主家臣とて幣を奉らめ又流鑪馬あり晡後本社小還御説小倉祭或ハ巨掠ハ作山城國宇治の近隣之例祭九月十五日とりりりも増山の木幡祭井との外の書々豊前の小倉と記と多し

苗日神社山城國宇治郡木幡あり雍州府志祭る呀の神正哉古勝速日天忍骨尊是地神才二の神小

して父ハ素盞島尊後天照大神取御子とありこの神下土小降りとり故山陵ありしてその灵と祭

て木幡の神社と号を○例祭九月廿四日今神輿二基

内一基田中明神田中の社同所地主の神祭る神詳

あらむ或説小柳大金草菊の異名藻塩草名ハ

明神是木幡の神中東の比の草これ

からの数の數花濃黄花中ん故名菊弱の花時

曰春苗と生五月至てと移る長二尺宿根より

自苗生と根の大き芋魁の○蕪頌日莖斑花

紫木の實菓物秋多し故小名とさ柑子和漢三

按どり小柑子ハ柑類の總名増山の井九

あり今云柑子ハ橘の属あり衣打袖の霜再板九

月の部小衣打袖の霜と別条の如く認め出る青藍按

ぶる小衣打きののいまづて八月の部出せると再ひ

九月の部小衣打のとり出せる理あり全く衣打者の袖小

にく霜の小時ハ九月の季とりる心わく出せると別条ハ如

く書りハ書りの誤也苧環元禄十年枝葉集元禄十六年小衣

打袖の霜と一条ハ認める證とも足りと深く

も考へて獨替昔古ハ別条のとり認め又小衣ハ衣

衣打のとり文字ハ首きて出せる皆誤也濱の真砂持衣

の条云露霜と袖ハ重て打とりあり云氏

要覽閻羅王此ハ遮とり謂く遮りと惡と造らるとり俱舍論閻羅王ハ地獄の主鬼官の總司とり觀譯名義集

琰魔或ハ琰羅とり此ハ靜心と離とり造惡の者不善業と靜心とり以す故ハ或ハ遮とりハ○七月十六日と大

七月 閻魔赤

清成
て後古
板横本
の増山
の井と
の如く
の暗推
の如く
一条ハ
記と

齋日といひて善事を修し奴僕を暇和漢三才

とせめて閻魔堂へ詣てまひりあり紫葛

葛の葉蒲萄に似て実と結槐の花

いとも一種野蒲萄あり黄中不其美と

懐く故ふ三公とふ位と○蕪頌曰槐木極りて大なる者

あり按むるふ尔雅云槐數種あり葉大なり黒きあり

棖槐と名づく晝合し夜開くものを守宮槐と名づく葉

細くして青緑ありまぐれと槐といふ四月五月黄化といひ

らく六月七月実と結和漢三才面会其花未開時米粒

の如く其実莢多く連珠を中ふ黒子あり○槐の花本

草狼尾四五五月開花といふ然ふ増山の井毛吹草

等秋と名づく小のりてまぐれく受小出ま

あそ時珍曰狼尾其穗の象形秀てあそを疑然と

草兼三秋物とて田あり故ふ守田翁の称あり莖葉穗粒と

とふ粟の如く開宝本草蘭草の葉馬蘭

色紫黒毛あり燕尾香ふ似たり故ふ蘭草と名く

其葉岐あり俗兼三秋物犬子草時珍曰穗

小燕尾香と呼の象狗尾

故ふ俗狗尾と名く原野垣墻ふ多く生む苗葉粟の

似て穗も又粟に似たり色黄白りて実あり和漢三才

面会小児とて用て蛙と釣て戯る日くうせまのこ

草おのれと種のあるものをあそとい誰うのひり俗

云阿波国鳴門例あらむ鳴動して圓座枿形大なりて

止む和泉式部此哥と詠じてまひ肥田く藪

附の處肉起り青芋蕪恭日子多し

もの所謂著蓋枿飲細長くして毒多し

八月 繪行器

綵雀八朔紀事京俗八月朔日

所の女子は行器一雙と贈るその行器の中小生枿養

藤の花と盛藤の花ハ白糸餅赤小豆と点し此

餅の形皮は白糸に似たり故に白糸と称す深更名松格赤小豆と

称してあらうとらふ物ふ点まるとつくといふ白糸赤小

豆と点まると是あつきの義ととりて深更と名くといふ

今日童の戯ふ松笠と以て雉子と作り或ハ鳥賊の甲と

以て鷲非鳥と作り或ハ糸絮と以て金灯籠舟の字を

括り瓢の形とあり又挑仁と刻して松虫と製衣を具木の

秋 ねて

類ことと玩び或ハ五相贈ふこれと類合といへ云〇綴書
と雉子鷲の類と同ト又意以仁と枝を折て行春と
とよふ相贈ふ京師の俗
これ今日嘉祝の物と云
えゆ草 龍膽の和名あり

葶 和漢三才圖會 榎の根上ふ最生を織二寸灰黒
色裏白し細き刻あり微香あり味ひ美なり

九月 榎の實 大和本草 榎本草 榎の類と云
今按む榎の類あり榎を

葉柔ふ似て筋多し冬落葉と実ハ胡椒の
大と秋熟して黄味甘し小兒好で食ふ

月 兼三秋物 天井守 余下ふ出たり 照

月次 拾遺 水の面ふても月がことと云ふとバ今宵と
秋の最中よりける源順〇てる月と月次ふの

八月 天中節 八朔 拾芥抄 八月朔日の日
の出より以前天中節

赤口白舌隨節減と書て門戸小押陰陽秘法むじ大
国の后天中樓ふかりて事あり其人素懐と遂にふより

忽ち火神とありて天中樓を焼く時小后呪して曰八月乃至
隨節減云傳へん凶惡の日陰陽家天中の札とて良

賤の門戸 天狗草 大毒あり咬ふ
る貼と 人ちちちむ

きの部 天王寺一乘會 十四日 摂州大坂四天王寺
一乘会九月十四日

或ハ十五日六時堂ふおいてと修む此堂傳教大師草
創と且本尊葉師如来日光月光の三尊大師手造り

とりの寺説云九月十五日未刻衆僧三綱堂の司樂人
沙汰人堂仕公人出仕を先時刻と三綱及一和尚告て

出仕の鐘一番二番と撞諸役人太子堂へ出仕を太子の
像と鷹輦ふうすその式二月十五日の如し廻廊の下より

六時堂へ渡御あり法事の次第振鉾阿弥陀經傳供方
歳樂定言吉樂陵王納曾利悉く終る酒の刺還御

てんまのやぶの
天満流鏑馬 廿五日 摂州西成郡天満ふあり祭る所
の神北野小同じ九月十五日流鏑

馬あり社家とと動じ鳥居の辺より
天満橋ふりて馬と馳て的と射る

出落栗 紀夏 土俗

秋 てあ

誤りの古(不孝の子あり、此粟と以て又お投てきこと傷
る、因ててこち粟とらふ和俗父と称しててこちの〇一
説此粟自ら迷と脱して
地ふた、故不出落粟とふ
あ七月秋の初風

秋の初めつこの 秋さるし 秋の末 秋さるし 姫朝
ころふふじし、 秋さるし 秋さるし 秋さるし 秋さるし

顔姫 棚機七姫の内、異名分類 秋去衣 八雲御抄
等しと注釈見えむ、 秋去衣とい

天の川 只秋の衣あり、秋さるし、秋の末るといふことあり、
銀河 銀漢 雲漢 宇彙 天河 箕斗二星の間小あり、其

星河 河漢 長きし天小竟を、揚泉物理論漢
水の精、氣発して升り、精華上小浮ふ宛轉して、
流る名づけく天河といふ、云漢と云衆星とふ出つ、 飛

鳥井の鞠 紀事 棚機小飛鳥井家並小難
露拂並枝鞠上足小の義あり、堂上及び地下の門人多
く集る、**滑稽言雜談** 楮の鞠の事と毎年七日飛鳥井家

あて行々式、鞠の露拂ふ當家門弟の上足、
の者坪の内へ持参る、是二星へ手向る心あり、
鷹の雛已小巢と離れ、自ら未食の時、羅と以て捕ふ、是と
網掛といひ、又あら鷹といひ、新小捕てく人、馴さると荒鷹と

い 愛宕火 廿四日 紀事 伊丹池田の愛宕火七月廿三日
より廿四日至る云々 撰陽群談 標及豊

鳥郡池田村小あり、愛宕山古言小所謂五月山ありとて山
上、愛宕権現の社あり、毎年七月廿四日の夜種々の灯笼小火
を点して愛宕火と名く、大坂北の町より望み見れば星

の如し、愛宕の神社有馬郡道場河原新町口小あり、祭る所
火産灵尊毎年七月廿四日祭礼 扇置 太平新
あり、世俗とて愛宕火と称も、 録詩

人皆棄 朝茶の湯 貞享式 風炉と夏とあり、炉ひら
秋扇 秋の末とあり、木地の炉縁と春

とふせは、朝茶の湯ハ朝顔の例と假て秋の用とあり、
茶人の家小尋せし、〇朝茶の湯ハ日中の暑といふ故を

青目薬 どの部弟切草 牽牛花 和訓栞 朝顔の美
の糸とあり、朝ごと小花と

秋 秋 秋

あ

名く、あららぎ 蘭とつよふの部 ありのひ苑 藤袴の条ふ注と

桔梗とつよふき わごつらん 青瓢箪 ひの部瓢箪 栗穂 あそふ 和漢

三才面全種類元て數十青赤黄白黒の色あり早中 晩あり早葉米實晩粟ハ皮厚く米少し 秋の狼尾草 あひる

粟奴各頭字の部 あさつむ 秋津虫 この部とふし 秋の あき

蝶 あき 秋の蚊 あき 秋の螢 あき 秋の蠅 あき 秋の蟬 あき

注秋小及むも中を秋の蟬 あき 兼三秋物 あき

朝月夜、朝の月 あき 朝の月 あき 朝の月 あき 朝の月 あき 朝の月 あき

夜 あき 有明 あき 秋月 あき 秋風 あき 秋水 あき 秋聲 あき

あり云々青藍云々有て あき 明るとつよふ義 あき

種や秋の月貞徳 あき 秋野 あき 秋風清 あき 其風清 あき

論秋氣動 あき 秋野 あき 秋水 あき 秋風 あき 秋聲 あき

至て百川河小灌ぐ涇流之大雨小浹渚涯の間牛馬 あき 秋の七草 あき

歐陽永叔秋声の賦あり畧之 あき 秋の七草 あき 秋の七草 あき

松の葉や細きかも初も秋の声 あき 秋の七草 あき 秋の七草 あき

秋野尔咲有花乎指折可伎数者七種花 あき 秋の七草 あき 秋の七草 あき

之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝白 あき 秋の七草 あき 秋の七草 あき

之花〇是と秋の七種と称も撫子の一種ハ連俳又押出 あき 秋の七草 あき 秋の七草 あき

してハ夏とも然ととも此のゆへ久しく盛とて冬迄 あき 秋の七草 あき 秋の七草 あき

も有りのゆへ霜を結ハ冬もあき あき 秋の七草 あき 秋の七草 あき

草枯の籬 あき 秋の山 あき 秋の山 あき 秋の山 あき 秋の山 あき

〇霜の後撫子咲る あき 秋の山 あき 秋の山 あき 秋の山 あき 秋の山 あき

夜 あき 夜 あき 夜 あき 夜 あき 夜 あき

小林不棲不時群飛て寺院の叢林よ出る事有り百
 千群と成て天と蔽ふ状に雀小似て大く背太し頭頭灰
 蒼やして柳色の斑あり領黄赤して背白し背蒼赤と
 帯ふ黒き斑あり日本紀天武天皇七年鴛子鳥天と蔽ひ
 て西南より江鮭輝鱒草魚鮭輝和名阿米
 東北に飛ぶ江鮭輝鱒草魚鮭輝和名阿米
 三尺小き者尺不滿さるものあり儼鯪魚のじ江鮭は則
 江湖の鮭河鯪魚よりハ臆多し湖水あての佳品秋ハ
 月雨水河小より湖中流れ入るとき多く川より
 上る築と構へ或ハ大なる撫細とこれと取る新走
 新酒の尤早き秋の暮
湖東問答著問云春の暮小對して暮秋と心得
 る者多しとりり尤秋の暮ハ秋の夕間暮あり
 春の暮ハ暮春の事侍る也昔云春の暮ハ暮春
 又一片不限る一句の趣とよし秋の夕暮
 とつとと文字の數もさなき句あり畧して秋の暮
 とつと近より下五文字秋の夕とつと句
 あり秋の夕とつと句とつと句とつと句とつと句
 九月

温酒

御光明寺殿下御抄九月九日ハ寒温のさし身
 肉ささる時此温酒を飲め病を得とこそ
 あり酒と温の用あり十五日増山の丹百
 世諺問答と引あり栗田口祭川橋の東

穴織祭

十七日摂州豊嶋郡池田村民家の北ある山上
 其間僅十町あり日本紀應神天皇十四年春二月百濟
 王縫衣の二女と貢ふ真毛津といふ同三十七年春二月
 戊午朔阿知の使主都加の使主と呉小つらて縫衣女と
 求めむ阿知の使主亦高麗國小至して更亦道路とをらむ
 道と知る者と高麗小も高麗王乃チ父礼波久礼志二
 人と誦て導す者呉小通とて得たり
 吳の王女兄媛弟媛穴織と典ふ同四十二年春二
 月午朔阿知の使主亦兵より筑紫小至るの時宵形大神
 工女とて故小兒媛とて宵形大明神小奉ふ今筑紫小
 阿知御使君の祖既ありてその二女と率て摂津國小至

秋 あ

る武庫小来りて天皇崩じゆふ及むと大鯨鶴の尊仁
 小献るこの二人ホの後今其の夜縫蚊屋の衣縫是あり○
 仁徳天皇七十六年戊子九月十七日小縫媛二人とも去ぬひ
 てつひふらむと祝ひ祭る縫寮の神とあり毎年九月十七日
 十八日と穴織具織兩社の祭礼と和衣荒布の神供と備
 てふとと神衣祭と称も社家の説ふ應神天皇春二月
 縫媛と具ふ **秋の花** いふ不審の体小よふさこの
 求むとつら **秋の藻塩** 菊の異名とつら **異名**
 草ふつら **秋の久の花** 分類藻塩草ふつら **異名**
 とはふらふらふらと枯るまで野小残つら **秋のくの花**
 是古き物ふあり或説ふ菊と秋くくとよむと云今按
 ずるふ埃囊抄云聖一國師重陽の佛事の時に草
 の花と北の籬小植てノントくと南の山と見るとよふ
 しりてえとる是古文前集小陶洲明う採菊東籬下
 悠然見南山とつら詩と東と北と採と植とも **傳**
 寫の誤あるべし埃囊抄ふらふ藻塩草 **赤小豆引**
 の秋くくの花も誤とつら秋草の花

大抵土用の中種とわ **孝子傳** 閏損後母
 蔣九月これと収む **芦の穂絮** 生處の子ふ衣ま

小綿絮と以し損ふ芦花の絮と以て父とと出ると
 す損ふ日母在せば子單あり母去らば子寒しと遠ふ

止 **烏抄** 本草別録 烏抄て熏じ乾と甘温 **秋**
 む **烏抄** 多識論 烏抄今檢 向未保患

の葉 御今 **秋の霜** 初霜ハ **朝寒** 御今
 のありあり **朝寒** 朝寒

秋くさむき朝寒きゆと **網代打** 藻塩草 網代ハ各
 朝寒さむいづれも冬

九日の前ふ打初て宇治の **秋過て** 秋暮て 秋
 網代人供御小奉る也

を隔る **秋小後** 秋より後 秋の別

秋の名残 秋の限て 秋と惜 秋深き

秋の湊 注小 **さ** **七月** ささか小姫 棚機
 不及

秋 **わさ**

秋 **わさ**

秋 **わさ**

秋 **わさ**

秋 **わさ**

姫の内之、かふこい蜘蛛の工異名分類開元遺事、蜘蛛
と以てこと小き金盒の中納め曉あけ至て開きて蜘蛛の
糸の稀密あると視て巧の多少を得とと云々長明四
季物語、あはれ蜘蛛とてあはれあはれもの其つてあはれ或ハ
ねづの糸を引ぬるとあはれと云々私のねづあはれあはれ
つとまるとあはれあはれあはれあはれあはれし、あはれ索

餅 先代田事記七月七日織女とまらふ又牽牛神あり、
その祭供ふあはれ索餅と以て是糸織の象小表す並お
犂麩あはれと以てこれ鋤耕の象小表すあはれ十節記昔高皇産女

子七月七日あはれ死あはれの冥鬼神とありて人小瘡を病む其
存あはれまる日麥餅と好めり故ふその死あはれまる日小至あはれて索餅
と以てと祭る後人あはれの索餅をくくを瘡疾と思ひ

刺鯖 あはれの部生身現 あはれ天和本草 莖大めて
の条小出ツ、澤桔梗 あはれ葉志々々、卷丹の葉は

莖小なるが如く花ハ桔梗小似て淡碧色桔梗あり小
水辺小生む秋花とひらく根まゝ桔梗のどし又浮菖蒲の
花とも沢桔梗と あはれ五味子 あはれ本草 五味子皮肉甘酸

いふ同名異物と、 あはれ核辛く苦く都て鹹き

味ありて五味具る故ふ名く春苗を生じ赤き蔓高木ふ
引く其長と六七尺葉尖て田く杏の葉小似り三四月
黄白花を開く蓮花の状小類を七月實ある莖の端ふ
叢生を豌豆許の大きさのこをく生ハ青く熟まれば紅紫

さゝれ萩 あはれ葉の細うろと あはれ兼三秋物 哉生明

二月三日の月といふ哉、始前あはれの月大あるときハ二日小
明と生む前あはれの月小あるときハ三日小明と生む、あはれ哉

生魄 あはれ十六日の月といふ尚書望後月明死して
魄と生む〇月の照る所を魄といふ、あはれ佐々

良衣壯士 あはれ月の別名、萬葉山乃葉乃佐々良衣
壯士天原門渡光見良久之好藻、

盃の光、盃の影 あはれ御中 盃の光と月小あはれ
秋とつし面の月とつ

さゆけき あはれ秋の月 あはれ君遷子 あはれふの部蒲萄抄
の条下小出ツ、

狹牡鹿 あはれ和名抄 牡鹿和名佐乎之加和名正濫要略
顯宗天皇紀ハ牡鹿此云左鳴子加和訓の

秋

さ

狹雄鹿とらとして狹山とら狹野とらをどろてり詞あり○萬葉とら小牡鹿とらと書るはちひさき鹿とつゝあはれ小いさてり
てり、**猿酒** さるさけ 猿菓と取て山中樹木の屋或は露腹の
わり、四つ小野へ置き、数日の後熟し
酒の如く味甚甘美えびこれと猿酒
といふ獵者往々見て竊し食を、**八月** さつご **塙天神**

祭 まつり 三日 まろり 泉州府志 泉州塙常樂寺天神の像菅神
太宰府とら在せり日自ら作らる七軀の像の内

也といひつゝ長徳二年 或は延喜年中 正月海濱うみづみ漂ひ来り
より此所こゝ安置あんじせり或は昔塩穴の郷湊村あり故
塩穴天神と称も中世此の莊しやうふるとと勸請くわんきやうせり文明二年
菅原為長郷の記云和泉国毛須深井草部土師向井
塩穴高石菅家の氏神天の穗日の命以来の旧領あり
為長卿の真跡 今按る小塩穴天神八天穗日命うして後
五条殿あり
小菅丞相と合せ祭る久○例祭六月十三日と夏神樂と
八月三日と秋神樂とこの日参詣多し神輿塙七道濱の
なれし夷島えいじま渡御即日還幸かへり先板の諸 **三五の夜**
抄四日とあるも今ハ三日ありといへり

つこの部月見つきみ廿八日春日の神社ハ洛西野
の糸小出ツ **西院祭** 郡あり四条通西の土

手四町計り云西院村の西平林村の中あり名跡志
持てる小西院の号中頃此所の西小齋院居あり故
ふ此辺の名として齋院と書るを後誤りて西院と作
る故○例祭八月廿八日神輿二基あり其一ツ住持
神輿推吉の社同村の西あり **紀事**
西院八幡祭といふ未詳 **柘榴** ざくろ 時珍曰榴りゆうハ榴りゆうハ丹賢
垂たれとして贅瘤しゆりゆうの如
し事類合璧榴大くして盃の如し赤色ハ黒き斑の
點あり皮中蜂の巢の如し黄膜ありてこもこと福子
人の齒の如し淡紅色亦潔白ありて雪の如き者あり潘
岳賦云榴ハ天下の奇樹九州の名果千房同腹千子一
の如し飢うへと禦まもぎ渴かわと療なぐさし醒さめと解とれ酔よめと止とむ比史李祖

收傳元魏安徳王延宗李祖收と納て妃とて後ハ帝李
が宅いせハ幸ゆきせ妃き母はは二の石榴ざくろと帝の前まへハ若もむ人其意と
知しらる祖收そしゆ云子孫多うんてを欲ほむ○今鬼子母
神と祭る人ひとハ備そなふる小榴せりゆうと以てるハ千子多
子の義よみハ夏なつの花はなの形かたちハ夏なつのこの部ぶとてハ **三七**

の花

本草三七春苗と生じ夏高サ三四尺葉菊
艾ふ似て勁く厚く岐尖あり莖赤き稜あり
夏秋黄花とひらく蕊金糸の盤紐のごし愛を産し
氣香も花乾くとたい絮とて苦賣祭のよき

烏鳳

和漢三才圖會今云三光鳥近年こまあり紺
碧色背の上赤と帯腹白く羽黒くして微
赤く項の毛乱起て頂上小冠あり眼大りて臉青く其
尾長き者一尺半計やとて廻轉せ其声清越日月星
と言ひ如し今三光鳥と称も其雌雄ふ似て浅く尾短く
俱ふ性勇悍難と育る時か鳥鴉の来るときは羽を
振ひると拒む或ハ其眼を啄く其翼翰の如し
兩端小口あり表より入裏小出尾の長きと以然

鮎

その部落
鮎の糸出

九月坐摩祭

記ハ夏のさ

の部坐摩の脚拔の糸注しんハ爰ふハ各々例祭九
月廿二日とと相嘗八十島祭と号と新嘗の神事
小逆髮祭廿四日社説云江州滋賀郡琵琶湖の南
逢坂山関の清水大明神ハ延喜

四の皇子蟬丸の社ハ蟬丸双眼盲とあり故小勅して延喜
廿二年壬午春三月公卿大夫蟬丸と供奉して逢坂山左
近し奉て各波雨を滴て帰京も残て留る人白川の紀
則長基經古屋の美女師輔ハ云爰小於て姉の宮深く
蟬丸とを密に禁闕と出て相坂山小来り蟬丸と共ハ
花月と清賞し旅駅の山岩川陸と偏歴して雲鬢緑
髮顛倒も國人御名を逆髮と号し天慶九年廿四日逝
去り故小毎年九月廿四日の祭祀今小至て台心るこ
ちハ姉薨去の後蟬丸とこのハ一社小合せ祭と云く青盛
云蟬丸と延喜才四の皇子及び盲人といつるハ七女説ハ
後撰集のゆもつるもよめる哥の詞書ふあきこの人
ととて有むとありと諸書小論ありととるべし水
戸學士の一説ハ唐の南朝元帝の諱と延基とつるハ延基
の三男極禰の時より立極とて其上替とれハ遂小是と相関
といふ所小捨る此子の名と彈兒といふハつるもハ切年
より瑟とよく彈せり故小のく付し今此事より日本の
蟬丸の吏と考ふハ延喜と延基とキの音同じ彈と
蟬と字の形相似り又相関と相坂の関も相似り又延

夕小婦人七孔小針と穿ち或ハ金銀鑲石と針とを瓜菓
を庭中不陳ぬ巧きを乞ふ蟬子ありて瓜の上小網を時
ハ巧と得

九枝燈

漢武内傳七月七日帝宮掖の内
と掃除ト雲錦の帷と張九華の

燈と燃と西王母降公事根源

禁裏御燈籠

燈臺九本のく灯あり云

滑紀百雜談當世小わいて禁裏へ御家門方より燈籠と
献せらるる奇巧金銀と鍍り花鳥人形ホの美と冬せり

是と南殿ふらふらふのころより始とるお尋ぬ
べし十四日ハ禁門と赦して賤の男女と庭上ふ入て是と

拜せ

切子燈籠

和漢三才圖會一種岐里古燈籠
聖天祭ホこれと用ふ飾る所

紙繪甚

逆の峯入

紀夏七月の初大峯の修驗道
山伏の客僧大峯より京師ハ

華美

出て大ある法螺と吹き自ら金剛杖と拏る々と遍歴
して齋料と乞ふ或ハ前鬼木鉢或奈良碗黄ホの物と

且那の家ふ贈る凡峯入の法本山派熊野より大峯入
是と順の峯入といふ當山派大峯より熊野ふ出是と

逆の峯入といふ○春の部順の峯入の条がよりいふはし

○貞享式峯入の類も順逆といひて春と秋とと断れお
今の俳諧の省法ふあらは秋季ふつれて

秋とハ春季とつとてハ春と多ひへん

木曾川地
ふよりて名る

清水千日詣
十日七月九日より十
日小玉して京

師清水觀音ふ諸人恭詣も夜ふ入て恭詣殊ふ多し今
日の恭詣平日の千度ふあるといふ江戸浅草の觀音と

同日つて恭詣多し

經木流
十六日 摂州四天王寺ハ
俗四万六千日といふ

東僧坊の前ハ

龜井の水りり白石玉手の水と号もむりり白川法皇
の上東門院當寺不詣し時其水盤ハ龜の形あると見て

白石玉手の水と以て龜井の水と詠むとれ其号の起る
ところあり

新古今濁りあき龜井の水とむまひりけて
心のちりとまきつるりねの七月十六日世俗經書堂ふ

かつて經木の表ハ法名と記し此水と手向て灵魂と吊ふ
と摂陽群談おもえとる昔八月毎ハ六斎の日講堂ふお

いて經と誦し恭詣の戒名と名帳ふ記し回向せといふ和

泉式部恭詣のとき名と名簿ふらして詠を古詩律

とつていふにむねをてあき身の敷ふりぬる今の

經木ハこの名時珍曰枯ハ結ニ其草の根結實

薄の遺意也和名抄

桔梗和名阿里比布木和漢三才圖會山野及び人家小多くこれと

種允紫碧の者と桔梗の正色とを又白花あり紫白相

交る者あり單葉あり八重あり古今物名秋ちう野

ありふらうちうののけること葉もゆるるゆるく友則

大和本草本草四十一卷竈馬の附録よのそ一名

蟀蟋蟀又蟀とて立秋の後夜鳴くイナゴに似る

翅あり角あり頭ハ切れる如く古詩俗まづるを

くとつ西土の方言古詩古奇みきりくをせ

るは是秋の末まであく故古奇霜夜よめり

俗古奇霜夜よめり

吟吟鳴あをむむらさぬもの我いさむいさむと華つ虫ち

らむしすげの庭鳥ホの異名あり頭字の部ありちて注

兼三秋物銀鬼月とつ階煬帝云既望清露冷侵銀鬼影

さよひの糸 既生魄既生魄と生むる十七日の月暉暉

小併世註既生魄と生むる十七日の月暉暉

素文選註月光月光霧爾雅孫炎註天氣

と雲とつ入地気天ふ飛して應せまると霧とつ入和漢三才

金波前漢書霧爾雅孫炎註天氣

や朝と夕とふあり甚と多きと紀菜蔬草木淵淵枯る

と霜雪より列藻塩草霧春夏由詠とつし秋小

限るべうとつとつと連俳ハ霧とむりハ秋ハ雲御抄

の如く春山の霧ふまるとる鳥又夏霧とも方葉あり

と云俳諧とて由春夏の季小結春夏ふわと

べしハ朝霧夕霧別義あり胸の霧ハハの部あり霧

の芭霧の立つて霧の海野原小下霧

とつて別霧の小白霧霧の小白霧霧の小白

霧の香霧の香霧の香霧の香

とつて別霧の香霧の香霧の香

の香とあきと詩よを作るハハ秋霧のそと霧立

秋 霧

泉式部恭詣のとき名と名簿ふちりて詠を古詩律

とつていふはもとねどつてあき身の敷ふりぬる今の

經木この名時珍曰枯ハ結ニ其草の根結實

薄の遺意名桔梗 和名抄

桔梗和名阿里 和漢三才圖會 山野及び人家小多くこれと

種允紫碧の者と桔梗の正色とを又白花あり紫白相

交る者あり單葉あり八重あり 古今物名 秋ちり野

ありふたりちりつのおけること兼もゆるるゆくと友則

蟋蟀 大和本草 本草四十一卷竈馬の附録 のと一名

蟋蟀 蟋蟀又螿とつて立秋の後夜鳴くイナゴに似る

黒し翅あり角あり頭ハ切る如く大 俗まづるを

あくとつて西土の方言クツ とつて古奇みきりくを

よめるは是の秋の末まであく故古奇 霜夜よめり

今俗つまきりくを 家持集 きりくをつりさせ

鳴あをむむらむらむら我きりくを ○華つ虫ち

らむしすげの庭鳥ホの異名あり頭字の部お ちて注

兼三秋物 銀鬼 月とつて階煬帝云 既望 部の

清露冷侵銀鬼 既望 部の

さよひの糸 既生魄 既生魄と生むる十七日の月 暉

小併世註 既生魄と生むる十七日の月 暉

素 文選註 月光 前漢書 霧 尔雅孫炎註 天氣

と雲とつて地氣天を飛して應せまると霧とつて 和漢三才

金波 金波霧の三種皆露の交する者 秋月盛んして其降

や朝と夕とふあり甚と多きと紀 菜蔬草木 枯る

と霜雪より列し 藻塩草 霧ハ春夏由詠とつて秋ハ

限るべうとつとつと連俳ハ霧とむりハ秋ハ雲御抄

の如く春山の霧ふまるとる鳥 又夏霧とも方葉あり

と云俳諧とて由春夏の季小結つて春夏ふわと

べしハ朝霧夕霧別義あり胸の霧ハ部の部注 霧

の芭 霧の立つてて 霧の海 野原小下る霧

とつて別小き物ありふありと霧不斷 霧立

の香とゆきと詩ふと作るハ秋霧のとき 霧立

蟋蟀
竈馬
今俗混
どとね
るきい
とらふ

秋
き

人 八雲御抄 霧雨 霧の深き所ハ雨 木淡 霧の降る人まのふ

樹上小熟ト美 加羅枿 一名透徹枿形長く口 枿を木淡といふ 微尖り肉中沈香の理の

如くゆて 錦馬 鹿の異 八月 北野祭 四日 味脆く美し 名あり

二十二社註式 一条院 永延元年八月五日 祭礼 おぼろ 官幣あり 後冷泉帝 永長元年八月四日 不定らる 五日ハ母

后の国忌ふよりて 拾芥抄 北野祭今ハ四日ハ五日先例大臣より始て納言参議に至り大頭と称を催し申

あり料米六十石 ○祭神三座中ハ天満天神 東ハ中将殿 菅品吉祥女 菅家の北の方都の西南吉祥院に住むいし中名の御名あり 路馬水記曰此祭甚

美麗りて神輿下立賣の西御旅所小移し奉る其間廿余町の地ハ蜀錦と敷き供奉の華綾羅の袂とつらみ

管絃の声雲井ふひびくる 四千打綾巻 宇林直 よし 當社の古記あり 礎 衣打 ちちり打 小春と拵

といふ古人衣と拵小兩女相對して一杵と執り米と春か如し然る小今易る小卧杵と作る對座してととと拵つ

其便と取り 和名抄 唐韻云礎 和名岐 擗衣石 擗亦擗 杵 和名 ○綾巻衣と巻末 この緒と巻て打く ○四手打 八雲御抄 まきり小打く衣をて打ともよめり 銀杏 實

○まらり打 まらり 槌の名 槌を打とら 時珍曰銀杏其葉鴨の掌小似り因て鴨脚と名づく宋

の初始て貢む改て銀杏と呼其形小杏小似て核の色白き小因て今 木の子取 たの部茸狩 拒引 新收

白果と名く 啄木鳥 一名とらつき 時珍曰此鳥樹と剝裂て蠹と

る者雀の如く大者者鴉の如し面桃花の如く啄足皆青色爪剛く嘴利く錐のごし長さ數寸舌味より

長し其端小針刺おつて蠹と啄り得るときハ舌を以て釣出しとと食ふ ○昔王造小天王寺と建し時此鳥群来

て寺の軒と啄き損む故小寺啄と 菊戴鳥 和漢 三才 名く守屋が怨灵鳥とまらしといふ

番会状眼白鳥小似て背翅青綠色頂の 九月菊 上小黄毛ハ化の如き者と戴く故小名く

秋 き

花の宴

九日青藍云俳諧盛時記小周の穆王冥禮山
 小傳慈童八百歳とあり貌少年のとし魏の文帝
 の時名と彭祖と更て文帝小此術と授け奉る文帝の
 術と受て壽七十歳今の重陽の宴是此説妄談の甚
 しくついで列仙傳小彭祖ハ帝顓頊の玄孫姓ハ錢名ハ鏗
 周小至マ八百歳ありて衰老せむ穆王召して大夫とせんと
 す病と称して與らむ後遂小流沙の西小姓彭祖の傳か
 くの如し慈童より事と以て附會せむ元野史小
 説の詩話より出づ菊花の宴ハ秦漢以來より既あり云
 論ひり實小妄談附會の甚しくついでついでと
 本朝文粹小祝賜群臣菊花詩序云紀綱言採故事於
 漢武則赤黃挿宮人之夜尋舊跡於魏文亦黃花助
 彭祖云々又世諺問答と魏文の説と引きて凡古より
 いいつつ々々妄談もつゞ九風雅の道ハ事の虚實小
 いらむ其趣のまづき小随ひとあらむとあらむと
 ままハ附會の説といふとらら小捨き小
 もあつハ○ちの部重陽の宴任まづ菊花 公事根
 源脚前

菊花の酒

高小登る統
 菊の節句 菊酒と

部重陽の宴の条小云々
 諧記 汝南の桓景費長房小随ひて遊學とて思年
 長房謂曰九月九日汝家小中災ありん急小去し家人各
 絳袋と作り茱萸と盛り以て臂小繫て高き小登り
 菊花の酒と飲もむ此禍ハ除くべし景言の如くし舉
 家小登る還て見む雞犬牛羊一時小暴死と長房
 小言を聞て曰此言小代る今世の人九日高き小登り
 酒と飲婦人茱萸の

菊の節句

栗の節句 菊酒と

親戚朋友互小贈る故小
 菊の節句栗の節句と稱

菊の節句

御湯殿記九
 日の夜小入て御

殿の南階小菊と多く植其菊小赤白黃の染むこと
 丸め菊花小作して枝々小付る今日葵と菊小取つ
 らるるついで云々○青藍按むる小菊小著まると
 くらハ菊の露とて移しとら面とぬとらと老せぬ
 葉とせむとて後撰集とあり小まゝ侍る時九月八日
 伊勢が家の菊小著ふつとらとら又のつと

秋

秋 菊

秋 菊

秋 菊

秋 菊

秋 菊

秋 菊

秋 菊

秋 菊

宿のつゆもあらねんかし 藤原雅正 露もあもる宿
 の菊も花のつゆもあもるらん 紫式部日記 九日菊
 吐きと共部のおもりのたまきと殿のつゆのわきと
 よう老のしゆ捨あつこのたまきとつゆのわきと
 わのゆもろふ袖もさそ花のつゆもふ千代あつらん 此外
 源氏枕の草紙にもあもるらん 今禁中せうく 菊
 の綿とつゆとねらもいづのちのたまきと
 くの部九日小 時珍曰陸佃埤雅云菊本
 襲 鞠の糸小注 鞠は作ふ鞠の窮より月令
 云九月菊黄莖あり華事此小至て窮り盡く故ふと
 鞠とく 和名抄 菊 和名加波良与毛木 和漢三才圖會本綱
 云菊凡百種宿根より自生も其莖葉花の品々同く
 千葉單葉心あるらん心あつあり黄白紅紫間色浅深大
 小の別あり其莖葉蔓紫赤青緑の残あり其葉大葉薄
 尖赤の異あり又夏菊秋菊冬菊の分あり 〇百夜草 星
 見草 金草 千草 千貫草 齡草 山路草 少女草 弟
 草 草の主 殘草 弟花 花の弟 百菊 狸菊 醉揚菊 大

白大藥若菊草 隱君子 女花 鞠花 秋の花 秋の花 契
 草 籜我菊 承和の色 殘菊 野菊 くららもわだ 各頭字の部
 小つちて注を 〇今著聞集 延喜十三年十月十三日
 〇今著聞集 延喜十三年十月十三日
 相争勝負以甲時各方領花 参入 一番合自社華
 立庭中 一番種花以各洲形 三番裁入 二番合自社華
 候御前傳作勝負十番勝方 簾中 古今
 并舞選進菊中各四本 裁西方庭 菊の洲 宿の菊
 くららのけふごとく小幾せ 百菊の内あり黄 秋
 つゆのつゆとつゆらん 金目貫 万重小え
 牡丹 大和本草 秋牡丹 外 農圃六書ふと色と嗅が臭く
 云今試ふ小然て春分後し植九月中菊小先て開く
 紫菊小似と初め深紅りて後浅紅く 畧鞍馬貴布禰
 攝州箕面又西州諸山小たり 本邦ふ廿日よりある草あり
 〇京都の俗きつ菊 貴船祭 九日 神社啓蒙山
 城國愛宕郡鞍
 馬の北一里むろり小たり 祭る所の神二座高麗の神身永徳
 の神りて別雷の神宮オニの攝社なり 神代卷 伊弉諾尊

秋
 き

訶遇突智と斬て三段とも其(授)高雷龍とも二十二社註式

貴船の社ハ船玉命と高雷龍と改曆雜事記九月九日小兒

咳逆疫して死亡するを多し仍て相者としてトセしむ云貴

船の神の祟る所なりと云ふ於て弘仁二年百六代後秋九月九日

疫と追しひ今貴船の神輿と稱して洛中と振るもの是との

遺意云〇余くより以来毎年九月九日小兒相集りて小き

神輿と作て貴船祭と稱して市中

北山祭 廿日六所

了振るるるとと狹小輿といふとも

洛北鹿死寺の西南衣笠の岳の良平林の中より祭

神詳あらむ例祭九月廿七日 名勝志の記北山天神祭九月廿

六日この拜殿於て三番曳あり正月廿七日六所明神小猿

樂りし菅見記九月廿七日等持院村祭松尾等持院鹿

苑寺小相隣る故ふまゝ北山祭と稱も類聚國史北山の

神社ハ大北山村あり天長五年八月天地震災ありて寺

丁内北山の神小祈る名勝志北山ハ高橋の西北四五町小

らり高橋ハ北野平野の洛陽より成交のこ北方小いらむ

とととも古より北山と稱を疑らる村名小より 金柑

久〇毛吹草ハ北山祭廿五日と記譜説送ふ異

時珍曰金橘実と結 本草圖經橘の如くして

ぶ秋冬ハ黄熟也 和 橘 小く高と五七尺葉橙の如く

刺多し春白花を生む 大和本草 枸橘今案もろろ 和名

カラ多子といふもの其木より多き故ハ人家植て籬と

盗不備ふ昔より國俗誤りて是と

和鼓枳實と云々藥亦用ふ非也 ゆ 七月 奠

寺千部 十五日 明願山祐天寺ハ江戸驛里あり

廿五日まで 開山ハ祐天大僧正例年七月十五

日より廿五日まで阿弥陀經 夕顔の實 品類

千口修行この節赤諸多 夕顔の實 多し

〇瓠長き越瓜の如し首尾一の〇懸瓠瓠の

一頭と腹あり長き柄あり者いへば柄あがくしてひらくと

まぐ〇瓠柄あくして山大形ち扁き者〇壺瓠の

短き柄有て大腹ある者〇蒲蘆壺の短き腰の者〇

其形状各同いへばと云ふも苗葉皮子性味ハ一なり

右本草時珍説〇乾瓠ハ瓠畜と云生あると日小ほし

又塩とひておのり

兼三秋物 夕月夜 註

秋 きゆ

の大小よりて翌二日の夕より出現の事分明十日
 あまりの頃までも暮は出るやどの月と夕月夜と讀ふ
 らしむるなり **弓張月** 釈名弦は月半の名其形一弓の曲
 し一旬ハ直くして弓の弦と張る如
夢野の鹿 攝津国凡土記云雄伴郡夢野の
 父老傳てり昔刀我野小壯鹿
 居る彼壯鹿屢野島に往て妻と相愛を既く壯鹿
 来て嫡の所小宿を明且壯鹿その嫡に語て云今夜
 吾背を雪よりおけりを見き又まき草生るとまき此
 夢何の祥ぞとの嫡も夫の妾の所小向往べきと惡く
 詐り相て云背の上小草生る矢背の上小射るの祥
 又雪より白塩穴は堂の祥汝淡路小渡り必船人小射
 られて海中小死人謹て復往事あるとの壯鹿感意小
 勝も復野島小渡る海中行船小あひて終小射殺る故
 此野と名つけ夢野との俗説小刀我野小立る真壯鹿
 夢相のまふ云 **河社** 契仲大人云仁徳記小菟餓野の鹿
 の夢のこゝろとて夢野といふなり

よりて夢野 ゆめの **九月 柚** 説文
柚ハ橙

小似て酢し柚の皮ハ **柚味噌** 滑枕雜談 近世編笠
柚味噌といふものを作る

抽出し乾し置て柚味噌用する所の味噌と其斤小盛り

包を編笠の形ふありよ蒸して用ふ **行秋** 行秋の
みちく

七月 益母草 猪蘇俗目

紫の小花を開く又微白の物あり本草ハ **八月 名月**

眼白鳥 和漢三才圖會 頭背翅尾黃
青く鮮明俗よつて黄

腹白し性よく群とあそぶ文と好て樊の中ハ在るハ一傑

小集り相依て卒推を、其中一雙飛出群と拔るるを、
餘ち相推を又中より抜去初のこと、毎小竹と好む

み 七月 鼠尾草

時珍曰鼠尾草の形を以
名小命、韓保昇曰鼠

尾莖の端は夏四五穂を生ず、
増山の井説々

車前の如く、花赤白の種あり、
水懸草 増山の井説々

水影草は、おやく七夕ふあり、水懸草ハ稻の事、
三井 あり又或説ふとそぎと聖霊水むる心あり、

寺女詣 十五日 江川長等山崇福寺 又蓮
地福院々 大津の側あり、園城寺又三井寺と

称さ、園城寺ハ御園小隣ると以て名と、三井寺ハ西巖
不灵泉あり、天智天武持統三帝即位の時この井の水と搥
て浴湯ふ献る、因て御井といひ、後小改て三井小作る、是三皇
の浴井龍羊三會の義、この寺平日女人結界の山、六七
月十廿女人の赤詣と許し登山せむ、これと 妙法寺
女詣といふ、當山ハ智證大師山珍の開基、

の火 せの部施火 御狭山祭 穂屋 廿日 信及諏訪
の条に出ツ、 郡諏訪明

神の祭、今在記 上諏訪ハ建御方富命、下の諏訪ハ八坂
入姫命、或説ハ御射山の祭ハ、薄おて神殿と造る其外
人の家も祭の程ハ皆薄おて作る、又このこと云もまきこの上、
日本紀才三野槌の神ハ、五百箇野薦の八十五籤と採りむ、
是ハ天照大神と天の岩戸より出し奉らむ世時のまき、よりて
信及諏訪と山祭ハ、薄おて以幣と守故ふらむと川信濃
とつらゆ、○此祭ハ遠笠懸と射て進らむと其始、田村
將軍の安倍高麻呂と伐んとあふ、信濃國に至り、此神ハ
祈り申され、小握の葉の紋付し直垂着る人湖の波上
小馬とまき、おそ笠懸射りしと今笠懸射て神事す
ら、この所謂あり、よりて越波とも記して諏訪ともゆめりと
縁起不出、當社ハ桓武の御宇、田村將軍の建立といひ、
この神ハ、おそ田獵のことと主といひ、○穂屋 御狭山ハ
作る穂屋あり、この祭ハ貞徳説ハ八月、藻塩草七月廿日
とも、増山の井ハ七月廿七日とも、此説多し志とがふべき、秋
むりハ勅使と立ちらむ、ハ穂屋といひ、ハ勅使尊敬の、あ
新ハ仮屋と設けらむ、今もその余凡そ穂屋と造るを
と、新式秘抄ハ云穂屋つらむ、諏訪祭の、諏訪祭ハ

秋 み

州境の庄塩穴の下条開口村あり住吉日記祭の神伊
 非諾尊の御子事勝食勝国長狭之後生玉牛頭天王
 と合せ祭る乃住吉の外宮と故朝延二十年小度住
 吉の社造替とありあふとき當社も此義あり社地元
 開口村木戸村原村の間俗三村大明神と称し大寺祭号
 泉州府志社説云密乘山念寺聖武帝の御願依て行基僧
 開基する所社領八十石〇例祭八月一日二日と三村祭
 又大寺祭といふ木戸村開口村原村の産沙神ありて大念
 佛寺の鎮

三津八幡祭

十音 摂州西成郡坂大三津の寺
 町あり三津と八高津

敷津難波津是傳へる昔行基寺院と建て三津寺と
 号後神託ふより八幡と勸請も毎年八月十音祭礼
 あり社説ふり當社清和天皇の御宇筑紫宇佐の神
 男山小遷座のとき西海より初て至りあふ洲中なるの旧跡
 小祝ひ祭るといふ又一説小應神天皇行幸の地といへり
 〇摂州難波堀江の人月と此所小賞も各深更小及びこ
 家小婦ふここと月見と称も又
 難波の御被と称も是八幡祭なり

水引の花

和漢三才
 面盆水

引草高さ二三尺葉楊柳小似て嫩あらむ秋長穂と出
 小き花つく紅色其莖田く織く紙燃及び水引の如し故
 小名 **水始涸** 月令 小出

九月三度栗

本朝食
 鑑上野

刈下野刈よ山栗あり極て小みりて一年三度栗と収む
 故小三度栗と称も味佳あらむとせ及古の所より
水木 和漢三才面盆 美豆木高きもの二三丈葉梅嫌
 木の葉小似て微厚く冬凋む花藤の花小似て

黄色ちり一種土佐の山中より出る者高さ二丈葉粉
 團花の葉小似て小し正月黄花と開く撥簇こ下り垂
 る子と結ぶ赤色呼で土佐美豆
蜜柑 和漢三才面盆
 木といふ〇実と賞して秋とい

名ハ橘類の總名今單ハ太知波奈と称するものハ包
 橘之專果と其皮と葉とも乃蜜柑其実熟まると
 きハ蜜の如し故小名づく **たす草** 橘ハ准とこりこ
 化て枳とありといふとさうきまるといふハ此國まこと
 といふ九年母をいふもの其樹と移し **水の紅葉**
 て出羽小植まるといふ枳殼とあるといふ

秋 みま

諸物と澁下、**澁取** [和漢三才圖會] 枿澁造法、枿一斗故、漆の名あり、**澁**と去水二升、五合、**和確**、**持**、**編**ふ盛り、宿と經て、**澁**と搾り、**澁**も又水、**和**て二日と經、**澁**とびこれと搾り、其用甚多し、**兼三秋物**

とら露 [李白詩] 秋露如白玉、**伊勢物語** 志らくももの何ぞと人のとひとと露とて消るる

物、**新月** みの部三日月の余り注、**たまほ** 月の異名あり、**秘藏抄** 朝教

はふららみりの空ふ風、**常娥** [淮南子] 羿不死の姫娥とて竊んで以月を奔る、**後天文志** 嫦娥、**昇**、**真如** 不死の葉と竊んで月を奪ふとと蟾蜍とす

の月 [法華玄義] 清淨真如、雲外の月のごとく、○衆生の真如、**如**、**性**、**常**、**煩**、**悩**、**不**、**つ**、**ま**、**れ**、**て**、**も**、**其**、**体**、**は**、**少**、**も**、**深**、**を**、**汚**、**と**、**ど**、**喻**、**は**、**月**、**の**、**雲**、**を**、**掩**、**り**、**て**、**も**、**其**、**体**、**は**、**清**、**く**、**明**、**ら**、**る**、**が**、**如**、**し**、**ら**、**る**、**と**、**真**、**如**、**の**、**月**、**と**、**つ**、**ま**、**れ**、**て**、**も**、**不**、**妄**、**の**、**義**、**如**、**不**、**異**、**の**、**義**

條芒 [宗祇] 目志のまきこと、**縵芒** 縦小白、**忍草** 真徳、**薄**、**文**、**あり**

公箱云志のべ草、和名抄の古の類、垣衣を志のふとみり、古き築地朽と物の端、古き軒端、**不**、**常**、**不**、**生**、**る**、**草**、**と**、**云**、**と**、**ゆ**、**か**、**ら**、**は**、**の**、**ま**、**の**、**あ**、**て**、**昔**、**の**、**類**、**後**、**世**、**の**、**俗**、**を**、**山**、**中**、**の**、**ひ**、**ら**、**の**、**草**、**と**、**て**、**ろ**、**の**、**け**、**し**、**て**、**根**、**と**、**つ**、**て**、**軒**、**の**、**く**、**ら**、**と**、**云**、**ハ**、**古**、**き**、**と**、**こ**、**ろ**、**ろ**、**得**、**ぬ**、**の**、**偽**、**名**、**今**、**云**、**忍**、**草**、**本**、**草**、**の**、**石**、**長**、**生**、**の**、**か**、**ら**、**ひ**、**あ**、**へ**、**し**、**石**、**長**、**生**、**四**、**時**、**凋**、**ま**、**ど**、**今**、**俗**、**の**、**櫛**、**掛**、**る**、**の**、**冬**、**枯**、**る**、**後**、**醍**、**醐**、**帝**、**の**、**廟**、**前**、**を**、**御**、**廟**、**年**、**を**、**經**、**て**、**忍**、**ぶ**、**何**、**と**、**志**、**の**、**草**、**芭**、**蕉**、**是**、**ハ**、**垣**、**衣**、**よ**、**新**、**澁** 七月の部澁取、**鹿** 搭物論、**鹿**、**の**、**性**、**驚**、**烈**、**多**、**し**、**能**、**良**、**草**、**と**、**別**、**他**、**獸**、**多**、**く**、**ハ**、**三**、**辰**、**八**、**卦**、**ノ**、**屬**、**と**、**惟**、**鹿**、**然**、**ら**、**ハ**、**一**、**千**、**年**、**小**、**して**、**蒼**、**鹿**、**と**、**あ**、**る**、**又**、**百**、**年**、**や**、**て**、**自**、**鹿**、**と**、**化**、**し**、**又**、**五**、**百**、**年**、**や**、**て**、**玄**、**鹿**、**と**、**あ**、**る**、**鹿**、**ノ**、**麋**、**あり**、**鹿**、**あり**、**麇**、**あり**、**天**、**和**、**本**、**草**、**鹿**、**の**、**角**、**ハ**、**春**、**生**、**し**、**夏**、**長**、**じ**、**秋**、**堅**、**く**、**冬**、**脱**、**杜**、**鹿**、**ハ**、**鳴**、**き**、**杜**、**鹿**、**ハ**、**鳴**、**き**、**七**、**月**、**の**、**末**、**あり**、**八**、**月**、**の**、**中**、**は**、**く**、**ふ**、**九**、**月**、**末**、**まで**、**鳴**、**き**、**鳴**、**き**、**紅**、**葉**、**鳥**、**と**、**さ**、**き**、**夢**、**野**、**の**、**鹿**、**肩**、**枝**、**鹿**、**と**、**各**、**頭**、**字**、**の**、**部**、**に**、**ち**、**て**、**注**、**す**、**但**、**ま**、**か**、**ら**、**ず**、**鹿**、**と**、**つ**、**つ**、**ハ**、**誤**、**あり**、**ま**、**の**、**部**、**に**、**注**、**す**、**鹿**、**笛** 獵人鹿角の根及び胎

秋 志

開帳

五日神祇正宗近江打屋白鬘大明神猿田彦也社

中より止む今六尺内陣と開て官殿と拜せしむるの

四月上の辰の日祭礼神輿渡御あり往古の神門石橋の

邊今水中二町をうり湖水の沖あり縁起あり鳥

居のありし所と鶴川あり社頭あり二十町あり河あり鶴

川と号す此川の北と鶴川領あり別當と白頭山延

命寺福壽院と号毎年二月八講あり開帳八月廿

賀八幡祭 十五日淡海志四十代天武天皇即位九年

の御前八幡大井八今の聖真子是唐光僧の形聖真子

ハ阿弥陀八幡大井の分身之〇是山王七社の神あり淡海

国滋賀郡坂本村あり見瀬村の神社あり秋社月

あり今ハ山王祭の外神事ありあり

廣義曆書云立秋の後五戌の日と秋社を註云

社ハ后土あり民とて祀りむ以て農と祈み死

活杖祭 あり雍州府志昔刑部省此辺あり獄

断して以て死刑と行ふ故小刑死の人の為小この社を建て

祭祀と修せり毎年八月神事ありことと死活杖の祭

といふ〇千本引接寺壬生の地藏ありて毎春修せり

所の念佛會ハ元死刑人の為小修行せり始れりといふ

四手打、志ころ打 きこの部礎の紫苑 鬼の

蕪頌曰紫苑三月の内地ふ布て苗と生ま其葉三四相

連て五月六月の内黄白紫苑を開く黒子と結ふ万葉

草草昔下紐余着有跡鬼乃志許草事仁思安

利家里 家持〇鬼醜女草これ紫苑也袖中抄鬼の

まご草とい別の草の名あり忘草ハ愁と忘る草

をんい意き人と忘れん料下紐みつけれと更ふと

るころね忘草といふ名ハ只事ありら猶意けれ

鬼のまご草といふころねといふ誠の鬼ありら

い詞日本紀第一不煩也凶目汚穢之所とわら

嫌ふ詞凶の字とあり俊頼抄昔人の親と三

人あり此を孝行せらるる親をてのち歎き塚

み詣て在が如く有るる年うめれ兄弟らうつて

秋 志

ゆきぬ其兄公つて私とつりてふ堪も思ひたる
 やう只よ止む時あり忘草ハ思ひとほむ物と塚ふ
 こまに植ふる弟ハいづくを恨とて紫死したる草
 こと植ふる兄ハいつの程うつらまゐりて行せし草
 草といふことある一たり弟ハまゝ絶と詰てぬある日親
 の塚ハ声あり忍るべしとわれハ君ハ親の塚と守る鬼
 神ハ兄ハ忘草と植て公みつらふはつるころ忘らひその
 家と思つて實ハ其許ハ思ひ草と植てますく忘らひ
 至孝ハ天帝ハさきと給ひてこれよりむるハ今より益
 わんてと夢ハ昔よりまづとつて止る弟ハ不思議
 おわい帰るぬそれ益あること夢ハ見る不違とて徳を得
 久敷くともん人ハ植へくさ草ハ故ふとわふ
 といふ鬼のこゝろつらつと鬼の師子草といふあり
 和漢三才圖會推の木より生む大 **松露** 和漢三才圖會
 あるもの二寸むつり大小叢生も 麥草俗云
 松露沙地松樹ある陰處ハ生む松の津液と秋濕と相
 感して菌ともふ綴柄く状ち零餘子ハ似て田く太き

推草

松露

濕地茸

し外褐色内白く柔 **濕地茸** 和漢三才圖會 原野
 小淡く甘し香あり 濕地ハ生む故ハ濕地
 茸と名く狀松茸ハ似て小くすむり不過と織の内灰
 白色柔く脆く破き易し九月盛ふ出づ又織の外黄
 色の者あり並ふ食ふ **本朝食鑑** 標茅草標茅草
 茅此多く生むる地ハ名下野國黒髪山の下ハ標茅草原
 あり此則其處あり此草草 **猪草** 和漢三才圖會
 卑濕の地ハ生む故ハ名づく 草茸ハ似て黒
 く織脂潤ハ其裏ハ穴 **代々雁** 夜止宿と中
 あり蜂の巢の如し毒あり 更毎ハ居と換
 こまに代々つとつと代々田 **四十雀** 和漢三才
 のとて春の部苗代ハ条注あり 四十雀 留會小
 雀ハ似て大也頭黒く兩頬白くして白き田紋黒き圈類
 小至て胸背灰青翅尾黒あり灰白の堅條あり腹
 白色ふくして胸より尾ハ至て黒雲の紋あり其声清滑
 て多く囀る四十雀といふ如し故ハこまに名く其老
 るはれ毛と換色や異りて形ハ又大 **鷓鴣** 蘓頌白
 俗呼て五十雀といふ雌ハ腹の雲紋幽微 **鷓鴣** 狀ち母

秋 志

の尊徳社の前小同じ、天満鎮座、延喜八年三月三日、
 旅所ハ本社鳥居の前二町むろ西ふあり例祭九月十三日
 土人産沙おんさん 十三夜 後の月、二夜の月、高瀬、五十三夜の
 神ととも、
 豆名月、栗名月、月見ハ我朝の凡心
 らると近世のえせ儒者ハ天邊將滿一輪月又光彩遍空
 輪將滿といふ詩又明の十二家詩ハ鄭少谷何大復が
 十三夜の月と翫ぶといふ詩と引て異朝ハ十三夜の月
 と賞をもといふ附會の説ハ信景云今彼集十二家詩
 ろハ是八月十三夜ハ九月十三夜ハありとも其他ハ九月十
 三夜の月と賞セリ詩支うハも一旬一章ありとも、
 其人臨時の良かりて天下の名月とも事ハ我朝のこれ
 旧凡心右中記七十五代崇徳院保延元年九月十三夜今宵
 雲清く月明らる夏むく寛平法皇明月無及のより
 仰出さる依て我朝九月十三夜と以明月の夜とも常盤記
 姓生熊万里小路部光卿の御説と引て云十三夜の月と賞
 せ一正き起りハ天曆七年九月十三夜始て月の宴を行
 ひとゆひハ遺例とあり来りハ但此宴ハ本八月十五夜の
 御遊びとあられて行いゆると其由ハ八月十五夜ハ先帝朱

の御国忌小當りともハ扱へも後れて此九月ハ其遊を行
 うゆると此月ともと十五日ハ猶其日次も忌りたるにて
 十三夜不定て此月の宴を開き行ゆると○忠道公十
 三夜翫月詩云閑窓寂々月相臨從屬窮秋望已禁潘
 室昔蹤凌雲訪蔣家旧徑躡霜尋十三夜影勝於古數
 百年光不若今馮前軒回首見清明此夕價千金○唐ハ
 富士ありハ月の月も見よ素堂○後の月とハ十五夜ハ對
 してハ○二夜の月十五夜の月とくらハ二夜の月と賞を○
 栗名月、豆名月ハ浪華の俗十五夜と芋名月
 とハ十三夜を栗名月、豆名月といふハ
 祭 十日より 江戸芝増上寺大門の傍あり神領十五石
 廿日まで 別當金剛院神主西東氏當社旧地増上寺の
 山際あり故ハ飯倉明神と号し祭礼九月十日より廿一日まで
 神幸 此節時よく秋雨多しを以て世俗神明のめぐり
 祭とハ祭礼の間社内ハ於て生姜と高ハ是と根勝根勝とハ
 ハ本朝醫方傳云薑ハ穢土と去神明ハ通き土俗々々の
 事と誤り傳てく生姜と賣むるをハ外擗割み菟う藤
 の花と再き内ハ鮎と盛りてこれハ風木箱と称ス但し

秋 志

風木の餘りあて作れしとる謂ふく、城南寺祭

赤詣の人必生妻と此ちき箱と買て帰る。

廿日神社啓蒙城南の社ハ山城國鳥羽の里あり祭る所

の神ハ坐鳥羽天皇、○社説云祭る所二十二社の内七社ハ

伊勢、石清水、松尾、稻荷、賀茂上下、平野、春日、以上城南神

と号も、例祭九月廿日神輿二基あり、その地人皇七十四代鳥

羽上皇の離宮ありて王城の南、鹿ヶ谷祭

十禪師祭云、洛東銀閣寺の門前北の方ハ十禪師の

社あり、同所ハ八所明神の社あり、神号詳からば土人産沙

神と名祭礼九月二十四日、**狎々菊**

天皇祭云、今祭礼微ありて記も及む、

黄狸々ハ万重大人乱狸々ハ本紅ありて葩、**女花**

尖て大人ハ小狸々ハ狸々の如くありて小、

女節女莖の異名あり、**兼和の色**

是小よりてりふや、**草唐**ありて菊と

わてをゆくと、陶洲明ふも、我朝ありて兼和帝

仁和より始てり遊ひゆ、故ハ兼和の色と申し、此

このいま、菊の品も分とせ、只黄ありて用いられ、黄

菊とて兼和色とも蕪我菊とも申とや、藻蓋草の

説くくの如く、類聚国史ハ桓武帝の菊の御と載

らして、兼和帝より菊とけりて愛しめ、

只此帝わきて菊とて遊ひゆ、

後の哥ハ多く、**志ら菊**

黄を貴ぶ、詩人の賞も、所葉用ふも、

小多く、**新羅菊**の義とあり、花史在編ハ菊品

新羅一名倭菊、**芍薬の根分**

葉純白とせり、芍薬其花肥大

壞とて、毎年九、**柴栗**

月根と取削り去る、**熟折**

熟折哉、**椎の實、椎柴、椎の葉**

本草小とあり、**羅山文集**余幼年より椎ハ木の名と、

あると太平御覽不在と聞、後ハ父考も、蓋胡説後、

書南山志と見る、**科子**、其末尖て、**錐**ハ似る、

故ハ推といふ、宋志ハ推ハ作る木に従ふ、**和漢三才**

秋 志 二 一

箇会 椎子 鐵櫛 其葉櫛不似て 鋸齒細く 強く冬もまこ
葉落む 其實長く尖り 筆頭不似て 紫褐色 仁白く 西片
とある云 允桎 鉤栗 椎子の 棟相似り 小椀の如し 俗呼
て 供器なり ○季吟云 堀川百首 小椎柴と冬の 題小出
せり 其故や 冬とまゝ一説 實も 實も 秋とつり 推
ハ 秋季と持し 小椎柴 小葉も 実も 秋とつり 松子

新松子 海松 天和本草 海松 五葉あり 若水日信州
戸隠山あり 然も 日本 小本あり あり
わら松と訓むるハ 非あり べし 松と大之子 果も 食

ふべし 日本 産ハ 朝鮮より 来る 小おとる 倭名抄 松子
漢語抄云 五葉松 ○青林と
子和名 万豆乃美

大坂の里語 小新松子 小
奈何とあれ 小新松子 小
ハ 秋も 前後の 働と 賞と して
稗米 新熟の者ハ 気と 動し
年と 経る者ハ 亦 病と 登る

霜置て 岡への 道ハ
霜置て 岡への 道ハ
霜置て 岡への 道ハ
霜置て 岡への 道ハ

霜置て 岡への 道ハ
霜置て 岡への 道ハ
霜置て 岡への 道ハ
霜置て 岡への 道ハ

霜置て 岡への 道ハ
霜置て 岡への 道ハ
霜置て 岡への 道ハ
霜置て 岡への 道ハ

の葉と戴く 夢華録 唐の時 立秋の日 京師 戴の葉
を賣る 婦女 兒童 剪て 花の 様ふり

一葉 桐一葉 淮南子 一葉落而 天下 知秋 一
葉ハ 桐とも 柳とも 句体 あり

一葉の舟 一葉の水 浮びると 舟ハ
一葉の舟 詩文 多し 冷 秋の事

彦星 暮秋ハ 彦星 志の部 二星
の条 小出づ 火取香 棚機 小手 向

西北机 唐 香爐 一口 納殿の 百和 香 四兩 盛之
公事 根源 机の上 小火 くり 終夜 空 燒物 あり 菟麻子

唐胡麻 唐 胡麻 時珍 曰 楸葉 大なり 早く 脱つ 故 小れ
の部 小注 楸 と 楸と 小れ 楸葉 小なり 早く 秀 故

小れと 楸と 花葉 楠 小出づ ヒサキ キサケ カフ
テコブラ ライテ キリ 人家 往々 こと 裁 高さ 二丈 白

鐵樹 小類 して 皮 赤 龍の 鱗の 如し 葉ハ 杉木 小類
大 或ハ 尖り 或ハ 三尖 夏 筒子の 花と 似ら 小み して 白色

紫点 あり 凋て 莢と 結ぶ 數十 簇 蛸 大和本草 時珍
と して 枝の間 小垂る 長さ 尺餘 曰 小み して 色 青

秋 い

綠ある者、爾雅註云小青蟬也、此せし山中ふあり、晚ふく故ふ名く、常の蟬より小ありて青赤く音聒く、凡聞ふ堪く、寒きとき鳴く、**兼三秋物引板**、拾穂抄板木と添て綱とつけて引あり

し鹿と鷲 **一本芒**、大和本草一葉よ、八月菱、了多く叢生と

取、**茹菱**、時珍曰菱實一名菱或ハ沙角その角稜峭、これと菱といふ俗呼て凌角と云、中自湖中

小生も葉実とも小く其角硬して人と刺其色嫩くも者青く老る者黒し嫩くも時利食ふ甘美く老る時蒸して食ふ、**天和本草**、**稭**、時珍曰稭苗菱葉の如し八九

八月九月これと採、月莖と相んつ三稜あり細花と

ひらく、**瓢箪**、**百生**、千生、和漢三才圖、栗の穂の如し、**青瓢箪**、**会苦瓠**、俗

ニ云瓢箪、**壺盧**と一類ありて別種ある者明けし葉花小ありて壺盧に似て瓢の味食ふ堪は、四太ある者多く炭斗ふ作ふ長して細腰あるは酒樽ふ作らる、長五六寸の者あり俗百生と称ス、二三寸の者あり千生と称と細

腰本末相均し者俗呼、**平葦**、和漢三才圖、平葦山林の濕地に生じ苦棟

の樹多くこまこと出も十月盛ふ其形松茸に似て瘦傘薄く匾し故ふ名く、大と三四寸亦至て大なる者あり灰白色裏白く細刻あり性柔く脆く其柄多く、**鴻**、正中ありて畧偏て生も、大小叢生も味淡く甘、**和漢三才圖**、**菱**、喰状ち雁の類とて大なり背頸俱あり

灰色、**翻深**、黒其尾本白く末黒し、腹白く脚黄其角黒して鼻の辺ふ黄の條あり、其肉の味雁に劣らざる、**鴨**、和漢三才圖、俗云比与土里状ち鸚鵡に似て尾長く蒼灰色

頭上の毛乱れ起眼の辺ふ微赤色と帯ふ胸臆灰且腹の下灰白く、俱小黒き斑あり、背利く脚脛短く掌まて蒼黒く、常小群とありて飛啼好て草木の實と食ふ、或ハ云山茶花、**鵝**、古抄秋、貞享式ふもこひ、**日雀**、和漢三才圖、俗

云比伽羅狀四十雀に似て小く、頭背赤色、頰の辺、**鵪鶉**、白黒相交ふ、腹白く翅尾黒く、其根澤あり、**秋**

河原鵝

和漢三才圖會 俗云比和止里雀より小く、全体黄色めて青と帯ふ、頭背頸翅小黒と文ふ、尾黒し、腹黄白

背灰白く脚黒し、其声清滑よく、鳴る又河原鵝状、鵝小似て稍大く、頭背灰白く、眼の後微黒く、背小黒き斑あり、羽蒼黒く、黄と交ふ、大和

本草 唐鵝、紅鵝、蓼鵝、赤鵝、状略之、鯁漬 和漢三才圖會 二すむ

りの小鰈と用て醃とす、造法、鮮鰈一升洗、よすて塩三合和し、三日めて、後石と以て重し、或は同く、茄子

生薑、穂蓼、番椒、赤漬るも、又佳く、鰈の字未詳、本朝食鑑、鰈ハ小鰈より、九月賜氷

と、九日 公事根源 十月の旬のこふわらむ、今日を魚、氷奥と給ふ例あり、年中行事、菊のみち折

給ふこゝのほろぎ内衣、百菊 草ふ云和朝よちい、滑替雜談、いあて

て菊と愛する中、殊小百菊とて、百種の名あるゆれ、ら、傳へり、足利將軍義輝公御園、植らし、御寵愛

あり、義景藤孝兩人、小贈られ、百種、鴨上戸 和名、の菊あり、百菊ハこの種あらう、云

わの部、時珍曰、栗稍小きゆの山栗とて、山、小出づ、錐栗 栗の口よりて、尖らざる、錐栗とて、瓢

の樹 和漢三才圖會、其木の葉、女貞小似て、厚く狭く、長く微淡し、三四月小細花と開く、深赤色、実と結

ふ、大豆の如し、自ら裂る、中子細小く、黒色、別小其葉、の面、小子の如く、あるもの、脹出て、中、小、き、蟲あり、化し出づ、

穀、孔あり、塵埃と吹去、空虚とて、大者ハ桃李、如し、其文理、栝椰子の如し、人用ひて、胡椒、秦椒、木の、林と收り、

瓢、瓢小代ふ、故俗瓢の木とふ、或ハ小兒、戯ふ吹て、笛と云、駿州小多く、こゝとあり、祭礼、小この、笛と吹て、神輿、供奉を、

榼藤 時珍曰、其子、榼の形、小象を、故小名く、此、糸、黒色、微光る、大さ、二寸、口、あて、偏、入、多く、肉と、剔き、

去り、葉、瓢、小作て、腰、小垂、廣州記、穉、字彙、秣、再、藤、似て、樹、小つく、通草、のごとく、穉、ひ生る、稻、より、

古今川、まの、田、小、まの、ひ、ら、ち、の、わ、小、出、ぬ、い、七月

百子姫 棚機七姫の内、百子、百子の池、七子、池

秋 ひも

物と備ふ是ハ鬼子母神の子と云り食ふ故ハ佛戒めて今よ
 其法が食ハ別ふと誓ひとあるこの故ハ末世の仏子ハ
 勅して毎日淨飯七粒つを喫へとの飢渴と云くは云
 ○一説小目蓮の母餓獄の中ハ墮よりてこの功德をまうは
 諸の餓鬼として食を得ずしむるよりり施餓鬼通覽
 廣大施餓鬼の法淨き所と点定し地と掃ハ棚と作る長
 三尺ハ過へくも但桃樹柘榴の外用ふると云れ鬼神を
 引てこも食ふと云えむ或ハ淨地の上大石の上或ハ泉池
 江海流水中これ川餓鬼ナリ用ふ東ハ向うて施と尤時と時定め
 てこもと行ハ大幡二本と云ふ咒語と書て云唵嚩唵囉
 呼叱娑婆訶と云寶樓閣經の咒又七如来の幡と云く
 別ハ魚百鬼王と用つるハ施食のよりハ面前鬼ハ始る故
 俱舍論頌 鬼八月と日とを五百 攝待 門茶 仏祖統紀
 人間の二月と日として壽五百歳 宗曉傳曰
 義井と城南の標社ハ靈法華水といハ以て行者ハ飲しむ
 草ととの上ハ作ア施と湯茗と以す屋と結ぶと數極
 創て攝待といハ○往來の人 洗車雨 洒淚雨 天中
 小茶と施も入り門茶とも云 記

月の六日の雨と洗車雨といハ七日の雨を洒淚雨といハ
 塩草車と洗ふ雨といハ七夕の別といハ○この夕ハ雨といハ天
 の川水漲ア二星會つると云る 施火燒 大文字火
 俗説この洒淚雨と云ハ誤りし也 鳥居の火
 船形りの火 紀事 七月十六日今宵東山淨土寺の山上
 妙法の火 小薪を以て大文字と云む此字畫九筆の及ぶ
 處ハわらも傳へつ室町家繁昌の日遠望遊觀の爲と云
 点せむ故ハ一糸通りと正面とも○一説小延徳元年七月十
 六日相國寺横川和尚始てこもと作る是將軍義尚追憶
 のと云く九この月六日より薪を伐点火と云ハ不至る事と
 不預るハ數十家あり今日申の刻各伐乾と云つの新
 と搭い山上登るハ大文字一畫長と百五十間余又又りり
 と隔て薪木と積事一堆の數四百八十余所各薪と積終り
 て後日の没ると待て同時ハ火と点むこの外北山松が寺ハ
 妙法の火と点じ船岡山ハ船形りの火と点じ愛宕山ハ
 鳥居形の火と点じ洛外所々の山岳并ハ原野ハ諸人集りて
 枯麻の枝檜の枝破子公卿墓の類を燒く 善福寺童
 とんと聖天の送火といハ又施火といハ

相撲

十五日江戸麻布雑色町あり麻布山と号し開
山了海上人の親鸞上人の弟子今日開

権現の社前あり童相撲あり報恩のころあり
公羽花

公羽花

花の形刻と有て小刀或ハ鉄と以てきりみせるが
ごとく俗ふせんといふ秋深紅の花とひらく種類数品あ
り松本セシ小倉セシブシセンフレコロ眼皮ハ一類異種
カニヒフシコロハ三四月五六月も咲依て剪春羅ともいふ
搦て此花和種之昔峯我清凉寺の北小寺より仙翁寺と
いふ其寺絶て跡小珍花生む時人仙翁花

とあぐり則剪羅紅あり又紅梅州ともいふ
兼三秋物

千秋樂 王子降誕七夜ふことと奏を盤涉調ハ秋の
野不秋女郎花風ふ吹く如く吹きき〇俳書ふ千秋
集と出して万歳集秋風集と出さる秋風集ハ漢の武帝
の時出来て秋声の辞ありと

八月 釋奠 献昨 日

本紀 聖武天皇天平二十八年八月癸卯秋奠服器及び儀
と改め定む〇二月ふ同じ春のせの部とすハ公事根源あり
らる日秋奠の昨とまゐるを藏人持て朝餉の前ふとむ藏
人答てふんやのつろこの奉まふ昨日の秋奠の昨音と文字
とふくつひて高く撃持て簾の中ハ入事ハ此夏ハ二月ふ
あふきや昨と献もハ八月ハ限るふと承ふ猶有職の入り
尋ぬべし〇秋奠の翌日あり

事ハ昨といひりきのことハ 鶺鴒 鶺鴒の部 稻負鳥 千
振 胡黄連とせんありハの部 飄曹 九月 泉涌
の部とすハ 千生 泉涌の部とすハ

寺舍利會 八日洛の泉涌寺舍利殿ふありて毎年九
月八日舍利會と行ふ音集あり律師
湛海宋の白蓮寺よ 仙蓼 珊瑚とさ 梅檀の
受持の仙牙あり

實 時珍曰其子金鈴の如し熟まると時ハ黄色金鈴
と名く移ふ象る〇梅檀ハ棟之夏のあの部とす

七月 硯洗 水灯會

硯洗の部 机洗の部 水灯會の部

秋 せ 冬

秋 せ 冬

秋 せ 冬

秋 せ 冬

秋 せ 冬

秋 せ 冬

秋 せ 冬

十日城州宇治郡大和田黄蘗山万福寺のり人堂等
 八華人黄蘗隱元琦禅師明曆中の建立〔紀事〕今宵
 宇治川の船中〔中〕と修〔と〕水中施食の法事〔其〕
 式船二艘と双〔申〕の刻〔む〕小岡屋の前〔出〕先〔流〕流〔小〕
 折〔て〕宇治橋の下〔至〕暮〔及〕及〔で〕船中數个の燈臺
 と点〔し〕僧徒左右〔座〕と列〔ね〕七如来の牌〔と〕安〔し〕供物と
 備〔へ〕經卷と誦〔し〕音聲と〔と〕流〔小〕流〔小〕下〔ま〕ま〔じ〕じて
 後三百六十个の燈と宇治川〔浮〕流〔ふ〕水〔こ〕水〔小〕水〔小〕順〔ひ〕
 散〔乱〕せむ恰〔も〕螢火〔の〕如〔し〕その灯〔白〕紙〔と〕以〔小〕蓮花と
 造〔り〕内〔小〕艾心〔と〕堅〔く〕熟艾〔の〕焰硝〔と〕以〔て〕煮〔る〕火と
 その末〔小〕点〔し〕或〔ハ〕流〔ふ〕伏見豊後橋の
 下〔至〕其間遊覧の船數千〔小〕月令廣義〔南〕南国の凡俗中
 元の夜家戸各善美飯と具〔へ〕齋供と門前〔小〕羅或〔ハ〕桐欄
 の所〔傷〕亡〔の〕野鬼〔と〕祝〔祀〕畢〔つ〕水燈三十六〔と〕け
 流水〔小〕浮〔ひ〕度孤〔と〕燈〔ハ〕紙燈〔あり〕
 相撲〔部〕頭使〔漢〕書注〔兩〕相〔當〕力〔と〕技〔藝〕射
 騎〔小〕毬戲〔と〕故〔小〕角〔能〕事〔原〕

史記秦の二世甘泉宮〔在〕樂〔を〕角力戲〔能〕優戲〔と〕漢
 漢の武帝この戲〔と〕好〔む〕即〔チ〕今〔の〕相撲〔と〕垂仁紀〔大〕和國當
 麻蹶速〔と〕出雲國野見宿禰と力〔と〕撲〔む〕蹶速〔野〕見〔小〕
 勝〔て〕あ〔ら〕ど〔の〕腰〔と〕踏〔折〕と〔て〕死〔せ〕野見〔菅〕家
 の祖〔扶〕桑累記〔柏〕原天皇の時〔と〕代々天子皆悉く相
 撲〔と〕好〔む〕貞觀以後寂然〔と〕無事〔今〕聖主〔と〕捨
 せ〔り〕又〔集〕先〔三〕三月〔の〕大將以下陳〔の〕座
 小於〔相〕撲〔使〕の事〔と〕定〔む〕諸國七道〔小〕遣〔し〕相撲人〔と〕
 召〔ま〕部領使〔と〕事根源相撲〔江〕次才〔仁〕壽殿
 あり〔仁〕壽殿〔於〕仁壽殿〔の〕出脚〔の〕とき〔是〕諸國の供脚人〔供〕脚人〔相〕
 仁壽殿〔於〕仁壽殿〔の〕出脚〔の〕とき〔是〕諸國の供脚人〔供〕脚人〔相〕
 國の遊〔人〕諸〔人〕を〔め〕あ〔ら〕めて七月〔小〕相撲の節〔と〕ひ〔て〕天子
 の御覽〔ま〕る〔と〕先〔十〕十六日〔の〕間〔小〕召〔仰〕あり上御勅〔と〕
 奉〔つ〕て左右〔の〕次將〔小〕相撲〔あ〕る〔き〕より〔と〕仰〔ら〕る〔と〕左右〔の〕
 近衛方〔と〕分〔て〕國々〔へ〕使〔と〕下〔して〕相撲〔と〕召〔ま〕る〔と〕万葉
 小こと〔と〕使〔と〕ひ〔つ〕廿六日〔小〕内取〔と〕あり仁壽殿〔江〕
 才裏〔春〕廿六日〔の〕月〔廿〕六日〔小〕の月〔廿〕五日〔仁〕壽殿〔於〕これ〔と〕行〔く〕
 御物〔目〕のとき清涼殿〔小〕お〔し〕る〔と〕近〔年〕御物〔忌〕と申〔と〕とき〔の〕
 義〔と〕内取〔と〕相撲〔と〕出脚〔と〕左右〔の〕角力人〔庭〕
 故〔小〕左〔と〕右〔と〕相撲〔と〕出脚〔と〕左右〔の〕角力人〔庭〕
 是〔て〕角力〔十五〕番〔り〕故障〔壇〕鼻の上〔小〕侍衣袴〔を〕着〔る〕
 あり〔と〕時〔ハ〕仰〔ら〕る〔と〕進〔止〕せ〔り〕壇〔鼻〕の上〔小〕侍衣袴〔を〕着〔る〕

延元三年江記云角力人三十人淡才行列その裝束烏帽子狩衣
 續鼻禪差細狩衣の上帯と着下衣袴と着る後跳各三人
 おしきこせまお取て勝負あり廿八日大の月廿八日召合
 あつと裏合云召合技出ハ左右相撲相合江次才云勝方乱声
 時と決ま左勝負右勝負のときハ右先ッ納留利と奏ま左
 綾三と奏ま又せんけいあるやまきも他の舞と奏す天手
 南殿より出御王御参上も大将相撲の奏と執る十七番取
 勝方乱声あり又廿九日技手として角力とまがりて御覽せ
 らるゝ神龜三年始マて諸國より召上せらる寛平七
 年ハ童相撲と御覽ありまごて角力の起りと申小日本紀
 垂仁天皇七年七月當麻邑小勇士あり云○助手最手加
 手まごこれ相撲小所助手是と腹手といハ江次第ろ
 るてさうり今關腹まごらるまらりろ名と設けまごま
 意改仁
 和漢三才面会苗ハ黍小類ハ葉の間小枝とまごらて穂と出
 實と結ふ其梢の端小小白花と開く九草木の花落
 て實と結ふ此花と実と別ハ形口く末尖り端小自絲三條と
 出も畧乾くときハ絲脱去て孔とあり上下通む小兒絲まご
 貫きて念めん
 珠とまご

西瓜

和漢三才面会慶安中黄蘗隱元入
 朝の時西瓜扁豆木の種と獲へ来り

始て長崎小種本朝食鹽水瓜ハ西瓜ハ俗小瓜中水多
 故小名く大和本草三月種下し蔓延て地ハ布四月
 黄花と開く甜まご
 瓜の花のとし鈴虫
 俗云鈴虫此亦蟋蟀の類真黒
 松虫小似て首小く尻大く背窄く腹小黄白色あり夜鳴
 声鈴と振が如し里里林里里林とふかろ○此鈴虫の
 舟まの部松虫
 すげの庭鳥
 異名分類ふんこの
 薄とらふ又芒とらふ杜栄○時珍曰芒葉皆まのこく
 りて大く長さ四五尺甚快利りて人と傷ると鮮又の
 如し七月長き莖と抽んで穂とあり蘆葦の花のこき
 者○縵芒篠芒鷹の羽芒糸芒篠芒十寸穂ハ芒
 麻苧穂の芒真蘇苧の芒穂芒花芒
 尾花鬼芒等各頭字の部よりちて注
 相撲草
 和漢
 三才面会野原湿地ハあり葉地ハ布て叢生も忍凌ふ似く
 微扁く石莖小似て浅く秋莖と起て嶺小穂とあり青白

兼三秋物

尔雅薄草
 の聚こ生

秋す

